口頭伝承

はじめに

伝説は玄竜地獄・チアダックボなどの地名に関するものや、天狗・河童・狐・ヤマイヌ・ムジナの話の数が多い。

昔話は数が少いが、すでにほとんど語られなくなった現在、猿聟・だんごだんご・蓬と菖蒲・ほととぎすの話が採集された。どのような昔話が根強く語り継がれるか、興味ある問題を示しているといえよう。

地名には、特に注目すべきものは見当らない。

命名に際しても、三人の亀さん・三人の森さんを区別するための配慮は見られるが、従来の調査地で見られたような渾名に類するものはごく少い。かつての村の人間像ともいうべきタイプを捕えることがむずかしかったのか、またその露頭に触れ、更に探り出す機会に恵まれなかったのかとも思われる。

「流行語・地口のようなものにも製作者があったと思われる。寒い、長い冬の利根地方では炉端の軽口に屢々これが用いられたらしい」として、「過ぎたるもの」の例が数種採集された。多那・大島・大洞・東入りなど、どれも白沢の人たちにとっては、身近かのもので、ここからも話の緒はほぐれていたものと思う。（上野　勇）

伝説

地名伝説

玄竜地獄

越後からきた玄竜という漢法医がいた。この人はどんな暗い夜でもチョウチンを持たないで手さぐりで歩いた。或る晩赤城根の方へ往診にいった帰りに大クゾレで落ちて死んでしまった。その場所を玄竜地獄と呼ぶようになった。（岩室）

小判を埋めた話

オクサキというところに水の湧出すところがある。そこに他所からきて鍛冶屋をしていた人があった。主に農具などをつくっていて、大そう金をのこした。たまたま、この鍛冶屋が旅に出ているとき全焼してしまったので、あきらめてどこかへいってしまった。そのあと、小判が岩の下に埋めてあるというので、村の将来のためになるようにと埋ておいたというので、村人が掘ってみたが出なかった。青木の人もきて掘ったが何も出なかった。（岩室）

チアダックボ

平出村内、久屋に通ずる道の沢にこの地名がある。むかしタキタナの原で大合戦があり、その時の血がこの沢を流れたのでこうよぶ。またこはキアダックボともいう。（平出）

雨乞山

雨乞山に雲谷寺という寺があった。その寺の釣鐘を弁慶が盗んで、引きずって京都まで持って行った。引きずって行ったために、イボがすり

へっている。「上州高平」と書かれているその釣鐘は今でも京都にあるそうである。〔註記・この話川場の話なれど、尾合にて採集、川場出身の鶴淵みよ氏談（明治二十年生）〕

釣鐘が盗まれたと聞いた本尊様（阿弥陀様）が弁慶を追ったが、追いつかなかった。追っている途中で、腹がすいてどうしようもなくなり、下久屋部落で食をふるまってくれるように頼み、粟飯を食べさせてもらった。このことから、下久屋部落の人が雲谷寺の壇中となった。「粟飯壇中」とはここからきている。（下古）

河童の薬

大尽（川場村谷地の関氏）の兄（アニイ）が馬を洗いに行った処が、河童が馬の尻尾に摑っていたので、面白いと云って桶をかぶせて置いた。河童が是非逃がしてくれろ、そうすれば大切な河童の薬を教えるからと云った。そこで薬の作り方を教わった。それは、五月のお節句に百色の草をとって日陰干しにして、乾かして黒焼きにし、今一つだけ薬種屋から買って来て入れると出来上る薬だった。

後々になって薬屋から仲間に入れと云って来たので、薬作りがむずかしくなり止めにした。山へ行って旦那が刈って来るのだが、百種刈ったが一種だけは家で作らなければならなかった。茶の間に石が敷いてある所があり、百種を一つかみずつ、つるして乾けばもして黒焼の薬として、それをつけたり、飲んだりした。（尾合にて）

昔話

猿聟

昔、一人の爺さんに三人娘があった。一人百姓で山の畑をうなっていたがコワイので（疲れて）休んだ。そこで、つい「誰かこんな畑をうなってくれる人はないかなあ。畑うないしてくれれば三人の娘の一人位はくれるんだがなあ。」と独り言を云った。そしたら山の猿がそれを聞いていて、そこへ出て来て、「お爺さん、何云ってる」というので、又うっかりと「仕事が大事なんで、誰か畑うないしてくれれば娘の一人位やるが」と云った。そしたら猿が「どれ俺がうなってやるべ」と云って、お爺さんのえんがをかりて、忽ちうなってくれた。爺さんは猿に娘もらわれる事が心配になって、晩方家に帰ってもしおれていた。そしたら娘が三人して「爺さんどうかしたかい。体でもわるいか」といった。爺さんは、「体なんかわるくはねえけれど、猿に畑うなってくれれば娘の一人くれると云ってしまった。どうか一人嫁ってくれねえか」と云った。一の娘は「とんだこんだ、誰が山の猿の嫁になるべ」という。次の娘も同じで、きいてくれない。末の娘は「爺さん爺さん〳〵、そんなに心配すんな。おれが猿がとこへいぐよ。」と云った。それで末の娘がいろいろ用意して猿の処へお嫁にいく事になった。その日に猿が迎えに来たので一緒に山へ行った。その翌日「お里がえりだが、お爺さんにお土産もって行かねばならねえ。」と云った。猿が「何がいいんだ」というので、「お爺さんは餅が好きだから」といったら「そんだら餅もってゆくべや」と云った。そこで猿が餅ついて、何に入れてゆくかなというから「爺さんはいろいろ嫌いがあって重箱は臭えと云う」といって、立臼ごと猿どんに背負せて出かけた。崖っ淵を二人で通って行くと、その崖にジシャの花が咲いていた。そこへ来ると、「おらが爺さんはあの花がわけなしに好きだ」といった。猿が「ちゃあ、登ってとるべや」と臼を下ろそうとすると、「そこいらに臼おくと土臭くなってお爺さんは食わねえよ」と云うので、仕方ねえから猿は臼背負ったまま、木に上ったと。そしたらジシャの木が折れて猿は臼と一緒に流れてしまった。

「俺は　流れてもいいから
　嫁ごは生きて助かれよ」

と猿が云ったと。そこで家へ逃げて来て、「もう猿どんは来ねえよ」と云ったと。

市が酒買つちゃった。（尾合）

「だんごだんご」

一すいくらか山の中で、頭の足らね人があった。やっぱり嫁もらって嫁の家へ行ったが、いろいろ御馳走になったと。その中、団子を御馳走になって、これは何ちゅうもんだと聞いた。これはだんごちゅうもんだと教わった。そこで忘れちゃなんねえぞと、「団子。団子。団子。団子」と称えつづけながら帰って来たと。そうすると途中に堰があったので、「やっとこな」とかけ声してとび越した。そしたら後は「やっとこな、やっとこな、やっとこな」と唱えつづけて家へ帰るなり、「やっとこな作ってくれ」と云った。家の者は「そんな物はねえ」といって棒でどうづいたと。そしたら団子のようなコブが出来たので、「ホレ分らね事いうから、団子みてえなコブが出来らあ。」と云った。それを聞くと「あ、その団子作ってくれえ」と云った。（尾合）

蓬と菖蒲

昔魔物が人間に化けて、人を食おうとして、ある百姓家に入って来た。魔物は女に化けていて、普段は変った事もないけれど、物を食う時家の人と一緒に食わず、いつも一人で食った。これを不思議に思って、男が二階からそっとのぞいていたら、おそろしい鬼みたいな本性に戻って物を食っていた。とてもたまげていると、女はこれは覚られたなと思い、姿をあらわして、男を籠の中に押し込んで山の方へ向いて背負って走り出した。えらい早さでかけるのでおそろしいが、どこへ連れてゆかれるか男はなおこわくていたところ、ちょど木の枝が一本道の上へ出ているところがあったので、ひょいと飛びついて籠からぬけて逃げてかえった。化物は空になったのも知らないで山へとんでいった。男は家へ帰ると、急いで蓬と菖蒲を軒端にさしめぐらした。そこへ化物が気がついて戻って来たが、人が見えず、蓬と菖蒲ばっかりなので、もうこの家は空家になったのかと、どこかへ行ってしまったという。（尾合）

ホトトギス

ホトトギスは「ホト突っ切った」と啼く。むかし兄弟二人があったが兄の方が盲で、弟が働いて兄を養っていたが、兄は盲のひがみで「弟はおれが眼が見えないのをよいことにして、美味いところは自分で食い、まずいところだけくれるのだろう」と思いこんで弟を責めた。弟はこれほどまでしてやっても兄にはわかってもらえないのかと、「それでは兄さん私ののどを割いて見てくれ」と言った。兄は弟ののどを割いてみたところ、大根の尻尾や、魚の頭などばかし出てきた。後悔した兄はその日から鳥になり「弟のど突っ切った」と言って啼くようになった。（尾合）

怪異

キツネ

金井のおじさんが沼田から魚を買って夕方の暗くなりかかった道を帰って来て、カンノン橋の所まで来たのはおぼえているが、そこから変なところへ入っちゃって、どこへ行こうとしてもわからず、何としてもそこから出られなくなっちゃった。今のヤンヅリのテッペンあたりの森らしい辺に入っていたのだろう。おじいさんは「これは狐にやられたな、魚がほしいんだな」と思ったので、持って来た魚を「食いたければもってけ！」といってぶんなげたという。ヤゲン森の辺だという。

そのうちに一番どりが鳴いた。それから間もなく明りがポッとついたので、「あれっ」と思って見ると、それがツタサンのおばあが、朝早く用があって朝飯を早く煮たので明りをつけたのだというから、まったくの一晩中わからずに、どうにも歩けられねえんだということだった。魚はとられずにぶんなげたところにあった。（上古）

うちのおじい連中が畑へ行っていたら、東へ行く街道を東入の大将がやって来て、花ざかりのソバ畑の中へ入ってゆき、頭にはちまきをしてフンドシ一つになって水を泳ぐかっこうをしてソバ畑を一生懸命こねま

わしているので、これは変だというのでみんなで近くへ行って、「何しているんだやあ」というと、ハッとしてようやく自分に戻り「海へ行って水を泳ぐつもりだった」といった。村の人たちは、狐にだまされたんだろうといっていた。（上古）

キツネ

五郎さんの家のあるところの坂のあたりは、もとはとてもキツネがいてウヨウヨしていたという。そこにはキツネの掘った穴があり、たくさんの子キツネがいて、いつということもなしに他人の家のものを引いて行ってしまうので困ってしまい、キツネの子が生まれると赤飯をたいて、穴のところへ行ってあげてきた。明治初めのころの話である。（上古）

家の子がレンちゃんの山をしているころ、よく仕事に行くと、まだ十四、五のことで一人での夜道がおっかなくて、ヨキなどを担いでやっと帰って来ていたが、モンサンの墓のところを通ったら、オッチだか誰だかが死んだ当夜だったのでびくびくしながらそこを通りがかったら石塔の陰から白い手が出て来たので、「それ化けて出た」というので一目散にとんで来て、正夫さんにつっかかった。「お前何をそんなにあわてて来るんだや」というので、「おじさんお化けが出た」といっても信じてくれないので二人で墓へ行ってみたところ、こじきがお墓の裏にいた。埋めた当夜だから供えてある新しいダンゴを墓の後からとって食べていたのだった。（上古）

ムジナのしかえし

炭やきをしていたころのことで、ムジナの巣をみつけたので昼間その巣をいじくったのだそうだ。その日は、夜おそくなって炭が出るので山にいたところが、夜おそくになって下の方からオフクロが赤ん坊を背負って来るように聞え、赤ん坊の泣く声がしてくるのだというが、誰も近くには来ていない。いやな気分になってしまったという。そこですぐに火を消して逃げて来たので、炭をひとかまみんなだめにしてしまったという。昼間のことがあるので、ムジナが怒って鳴いたんだろうが、自分で良心がとがめているからムジナの鳴き声でもそんな気がしたのだろう。（上古）

ヤマイヌ

金井さんのじいさんは、若い時分平出に夜遊びに行ったが、ある日のこと、例のように平出に行ったところ「今晩山犬が出そうだから今度出たらぶっ殺してくれべえ」というのでベータのでかいのを持って帰って来たところ、いつもの山にかかるところで「ウワー」というので出たのだという。そこでいきなりベータでぶっくらしたところが、いいぐあいに死んだという。ところがいっしょに歩いていた連れがいないので「オーイ、どうした」といったら、そばにあったコガキの木にはいあがっていたのだという。「一匹殺したから下りてこいや」といって、「おめえ背負って行けい」と山犬を背負わせて来たところが、そうしたらまたウワーというので出て来たので、今度は大変だというわけで背負っていたのをぶちゃって、ホーホーのていで逃げて来たという。

明治の前あたりには、山犬はうんといたらしい。（上古）

鉄砲は、借りて来てやったぐらいで、最近でも村内に二人ぐらいしかいない。

もとは、いのしし・しか・山犬のようなのがたくさん出て来たので、これを防いだのだという。

昔は、山犬はこの辺にも大変いたらしい話を聞いている。

明治になってからも、キツネがお産をした時には、赤飯をふかして、穴のところへ持って行っておいたという。（上古）

狐にばかされた話

夏の夜のことで、シボシボ雨が降りそうなところで、沼田の帰りで急いで来たところが、前の方がボーッとしてきたと思うと、わずか下のところに火が燃えて、家も見えるのだから本当に近い。わずかに歩いてく

るとパッと消えてしまう。

最初はタカナイ山のところをチョウチンが下から上って行くものだから、これはコクゾウサマのお祭りで、にぎやかだなあと思った。けれども近すぎるなあ、これはおかしいなあと思っているうちにこっちの方で高平のあっちの方が火事になっちゃって、それがだんだんこっちへ走って来る。県道のあるところを走って来るのだ。小屋のところがものすごい火事に見えるので、これは本物にちがいないと思っているうちに、ポカッと消えた。別に何も持ちものはとられなかったが、火が消えたときはさみしいような、いい気持ではなかった。（上古）

白蛇が出た話

大阪夏の陣の時、各村から人夫が出されたが生枝では行くものがないので、浪人の太郎、三郎にたのみ、無事に帰って来れば、村の半分の土地を与える約束であったが、帰って来るなり二人を殺してしまった。その当時の名主の家の縁の下に白蛇が出て恐しかったが、それからは流行の厄病が広がり村人の多くが死んでしまった。（生枝）

岡村武夫さんが小学校五、六年生の春狐に化かされた。消防士が三十人もでてさがしたことがある。そのとき、武夫々々と呼ぶので、つきはなされると家の近くにひとりでにきていた。数坂辺にいた狐だろうという。十二様の近くにも大きな何かがいるという。（岩室）

お客に行く時、こいをお土産に持って行ったところ、泊っている間、連れて行った赤ん坊が夜泣きをした。帰って来ても三晩泣くので不思議に思い家の外に出て見たら、いたちが庭で踊っているのでつかまえて殺したら、夜泣きがなおった。

たつさんの母が、いたちが毎晩悪いことをして困らせるので、追まわし、殺しそこなったところ、あくる晩から、ほかの人には見えないがその人には、にじになって見せた。その当時は、いたちのことを、いたち坊主といっていた。

岩室の十二様にお願を掛け、満願の日に行って見たら、十二様が十二ひとえを着て表われた。

自分の赤ん坊が死んでしまったので手に、印をつけて、よいところに生れ替るように唱えて葬ったところ印をつけた子どもが生れた。

昔は、各家に「ぬし」という、青大将のへびがいて、大切にして、かまったり、殺したりしないでおいた。このへびは、すなおな性質で、八幡様ともいわれていた。

寺の前に天狗がいた。ある住職が女と仲よくなって二人で通ったところ、天狗が怒り住職をひねりつぶしてしまった。

今年五十年祭が行なわれた住職新海さんは、ほんとうに狐につかれ、寝床に白狐の毛がいっぱい落ちていたという話がある。

あるおばあさんが狐につかれ、親類衆が集り、寝ているおばあさんに向って「ごちそうをくれるから、はなれろ」と口々にいい、油揚げをくれたりして、追い立て、山に送って行った。おどろいたおばあさんは一生けんめい走ったがついにつかれ果て腰をぬかしてしまい。その後まもなく死んでしまった。

さじゅうさんという人には、へびがついて舌を、へびのように常に出したり、入れたりしていた。（生枝）

命名

地形名

ヒラマ　傾斜地。平出の中に観音ビラというのもあり、ヒラマはまたヒラともいった。

ヒラ　山の斜面

テーラ　平地のこと

クボ　低地

（岩室）

人名

亀さんという人三人あり、その区別

カジカメさん　鍛冶屋の亀さん
タノカメさん　田中（屋号）の亀さん
イノカメさん　父がイノさんの亀さん
重さん二人あり、その区別
ヨシ重さん　父がヨシさんの子
白髪重さん　白髪だったので
（上古）

森さんという人が村に三人いたので、これをそれぞれ「アップの森さん」「泣き虫森さん」「きんたま森さん」と呼んで区別した。アップの森さんはいつも「アップ、アップ」といっていたし、泣き虫森さんは愚図愚図とクドくのでそういった。きんたま森さんは行儀が悪いので特にそうよんだ。

精さんという人も三人いたので、「カゴ精さん」（商売がカゴ屋だったから）「オタ精さん」「おかみさんがおたみさんといったから）「石屋の精さん」（職業が石工であったから）とそれぞれ区別してよんだ。ほかにも「カゴ敏さん」「綿屋の敏さん」という人もいた。いずれも村のなかで人を分類するためにとられたものだということである。（尾合）

タメかけ蔵さん、この人はタメを一荷かついでだまま馬方をした。チョンマゲを最後まで結っていて、坂道でも平気で、八十歳になってもうないことができた。（岩室）

せかせか幸さん　この人は岡村幸作さんのことで、せかせかよく働いたので有名である。（岩室）

方　言

ツモノガシ　女の人がゆっくり楽しんで遊べること。今日は女衆はつのもがしに沼田へ出たなどという。

セッチュウラク　せっちゅうらくのことをしゃべるななどといい、自分に好都合、分のいいしゃべりかたをしたときに用いる。

ズッケ　等量交換、黒豆と米はズッケになるなど。

シトシッタ　繭一貫二百匁のこと。

コグソッコ　少いこと、蚕糞にたとえたもの。

オカマゲーロ　ひきがえる。
（岩室）

ヘンゲール　話がかわる。

ヤレテ　うすくなる。布などが古くなりうすくなる場合をいう。

チャンガラチャンガラ　よく歩けない。

ツヅラテ　つづいて。

カジカッカリ　かじかとりのこと。
（生枝）

鳥などの啼き声

ホホジロ　チョッキラ五粒二朱負けた

カエル　ゲコゲコ

四十雀　チンチンカラカラ
（尾合）

軽口・俚謡

土地は流行語、地口のようなものにも製作者があったと思われる。寒い、長い冬の利根地方では炉端の軽口に屢々これが用いられたらしい。

○過ぎたるもの

多那村に過ぎたるものが二つあり、諏訪の桐の木、長頭石

多那村に過ぎたるものが二つあり、要助がかかあと諏訪の桐

大島に過ぎたるものが二つあり、（後半失）

大洞に過ぎたるものが三つあり、（後半失）

東入りに過ぎたるものが二つあり、賢和の筆に、園原騒動

参　考

本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名に炭屋の塩原

この有名な言葉は利根の軽口に何か関係あるように思われる。

○地名よみこみ俚謡

石戸みて、二度とみられぬ大島田栃又かくして、尻は多那村
（尾合にて）

「白沢村誌」狂歌の名人桑原九蔵参照

諺

仏は、ほっとけ、神は、日々お祝いしている。（神様は毎日拝め）
仏は、日々働いているから、ほどけ。（生枝）

謎

生品村とかけて、ももひきと解く、そのこころは、たつまちによこまちがある。（生枝）

童唄

まりつき歌

いちじく、にんじん、さんしょう、しいたけ、ごんぼう、むかご、ななくさ、やいな、くわい、とうなす。

ナンゴ（お手玉）、まりつき歌

一つやー　しんとくまるは、（まま子）かわいさに、まま親様にいのられて
二つやー　ふたおや様があるならば、こお、こおゆくともあるまいな。
三つやー　三つの時から、かあさまに、わかれてゆくのもつらいもの。
四つやー　よその人でも他人でも、なみだを流さぬ者はない。
五つやー　いつまでこうしていたとても、こうゆうやまいは治らない。（レプラ）
六つやー　むりに進めて、ひまもらい西国、四国と歩きましょう。
七つやー　泣き、泣きわがやを出るときにゃー、ままおやさまは上きげん。
八つやー　山にねようか、野にねようか、おおかみさまにのまれよか。
ここのやー　ここはどこかと、とうたらば、泉の底だと引き返す。
とうやー　年神様のおまつりは、今月、来月、さらいげつ。（生枝）

数え唄

一つとや　人々ひと日も忘るなよ、忘るなよ
はぐくみ育てよ親の恩、親の恩
二つとや　二つとなき身ぞ、山桜、山桜
散りても薫れや君がため、君がため
三つとや　みどりは一つの幼稚園、幼稚園
千草に花咲け、秋の野辺、秋の野辺
四つとや　世にたのもしきは兄弟ぞ、兄弟ぞ
互にむつびて、世を渡れ、世を渡れ
五つとや　いつわりぬと
（失念）
学びの始めを、よく守れ、よく守れ
六つとや　昔を尋ねて今を知れ、今を知れ
開けや、富ませや、我国を、我国を
七つとや　七つの宝も何かせん、何かせん
ゆきにもいろます、このみさお、このみさお
八つとや　養い育てし、ひめ小松　ひめ小松
（失念）
九つとや　心は玉なり、磨きみよ、磨きみよ
開けや、富ませや、我国を、我国を

十とや　とよはたみはたの朝光、朝光
いよいよ雲なし、君が御代、君が御代
（下古）

一つとや　人は心が大事よ、大事よ、大事よ磨いて、おさめて、世を渡れ、世を渡れ
二つとや　再び帰らぬ、光陰を、光陰を、むなしく過して、すむものか
すむものか
三つとや　三つ四つ五つの、幼子が、幼子が、我身を育てる、幼稚園、
幼稚園
四つとや　良き友選びて、まじわれよ、まじわれよ、良き友、良き師は
身の守り、身の守り
五つとや　いつまで言えども尽せぬは、尽せぬは、我身を育てし親の恩
親の恩
六つとや　昔をあきらめ今を見て、今を見て、今より開けし、世を思え
世を思え
七つとや　何より大事は、人の道、人の道、人々はげめば、国も富む、
国も富む
八つとや　やちことことほぐ、君が世を、君が世を、むなしく過して、
よきものか、よきものか
九つとや　（失念）
十とや　ところは日の本日の光、日の光、あまねく、国恩、忘るなよ
忘るなよ
（下古）

桃太郎

芝のおりどの　しずがやに
翁、おうなが住いけり
翁は山へ柴刈りに
おうなは川へ洗たくに
日毎夜毎のなりわいも
いと勇ましき　浅間山
いと忙がしき　五十鈴川
流れ流れる水のもに
流れ来たれる桃の実
おしきにすえて　めずるうち
桃はおのずと打割れて
おのこご一人　生まれけり
老の夫婦は喜んで
桃の中より生れしに
桃太郎と名をつけて
犬・猿・きじを従えて、鬼ケ島へとうち渡り（下古）

お手玉　手まわり、ナンゴ
十モン　カメイカ
二十　カメイカ
三十　カメイカ
百までつづける。（下古）

毬つき唄　（毬はぜんまいの綿をくるんでしつけ糸でくくり、変わり糸でさす。）
○トントン叩くは誰さんだ
シンマチ米屋のじへいさん
じへいは今頃何に来た
ジョンジョがきれたで　買いに来た
今頃ジョンジョがあるものか
おっつけ　カラスが鳴く時分
チョイト　一貫貸しましょう
○オマンどこ行った

油買い　茶買い
油屋の前で
すべってころんで
油一升こぼした
おかあさんに叱られて
おとうさんにほめられた。（下古）

○カラカサ百本、棒八百本
トウトウトガのトウゲンジ
子供が傘を指にのせてうたう。（下古）

子守唄

赤城山から鬼がけつ出して、ナタでぶっ切るような、屁をたれた。
ヨイヨイ横浜、まる焼けだ、東京じゃ、オジョロが車引き、沼田じゃ芸者がしらみとり。
ネンネンネコのけつ、カニがはいこんだ、おっかさんがたまげてお茶をこぼした。（下古）

労働唄

おかめにまつたけ、エンヤラヤ
皆さんたのむぜ　エンヤラヤ（下古）

白沢村の民家

桑原　稔

一、はじめに

昭和四十三年も最後の月に入った十二月の始、矢島先生の急逝を知り驚いた。先生にはもっと生きていて仕事をして欲しかった。私は過去に何度か先生と一緒に調査に出掛けたこともあり、古民家について、お互の研究部門が似通っていたため話をしだすと止まることを知らなかった程で時には夜遅くまで話がはずんだこともあった。しかし、もうそういった機会も永遠にないと思うと非常に残念であり淋しい限りである。

さて、この度の白沢村の調査は、奥様の話によりますと非常に期待しておられて調査期日の十日も前から足の訓練にと、運動靴をはいては足ならしをしていた程でした。この様な熱の入った先生の仕事の後を依頼されはしたものの未熟な私には荷が重く、おまけに調査から原稿書上げまで正月をはさんで一ヵ月半の余裕しかない。正直いって十分な結果が出せるかどうか心配でした。しかしながら、白沢村教育長さんはじめ村教委事務局の皆さんのご協力のお蔭で、どうやら私の責任を果すことが出来ましたことを厚くお礼申し上げます。また年末の多忙な時期に心良く調査させて頂いた各家に心より深謝致します。最後に矢島胖先生のご冥福を祈念致します。

二、調査遺構について

村内の七地区を平均的な割合で調査民家を抽出して、合計二十一棟を調査する筈であったが、日程その他の都合で十九棟になってしまった。この点お詫び致します。これら十九棟を復原して、平面及び細部形式を分類し、様式編成すると第一表に示す如くになる。第一表でも明らかな如く村内の民家は平面形式から基本的には次の三つの形式に大別できる。

(1) 四間取型
(2) 五間取型
(3) 多間取型（六間取型、七間取型、八間取型に別れる）

次に以上の三つの型式を順を追って記述する。

三、四間取型の民家

村内を見廻って、一般に規模の小さい民家がこれに属する。中には桑原享家の様に大規模なものも見られるが、これは例外でめずらしい。調査した民家は、第一表に示すS_1～S_5の四棟であって総べて右住いであった。平面は長方形をほぼ半分に分けて右側を室とし、左側を土間として、土間の部分を『台所』と呼ぶ、右側部分は、さらに二分してこれらを前後で仕切り四室とする。

三・一　四間取型民家の古形式

四間取型の古形式を示す家が中村卯内・佐藤要氏の両家である。この形式では四室とはいうものの「デー」の表側の室は土間となり、ここを「表口」と呼ぶ。従って、床上空間は第一図に示す様に「ヘヤ」・「茶の間」・「デー」の三室となる。中村卯内家では主要構造が柱一間ごとに建ち、「茶の間」と「デー」境に袖壁を残し、「デー」の見付柱にチョーナ仕上げの手法を残す等民家に於ける原始的技法をあちこちに散見する。なお当家の「茶の間」のトコは「押板」と呼ぶもので、トコ板が壁面から室内に突出している。これは現在一般的に見られるトコの始祖であり、原始的形態を示す好例である。

三・二　各室の使用法について

「ヘヤ」は家族の寝室である。広さは奥行一間であるが新しい遺構になる程奥行を増す。巾は「茶の間」の巾と同一にするため横に細長い室となる。四周は出入口を除いて総べて土壁をめぐらすのが古形式である。「茶の間」は家族の居間であり、団らんの場であるため古くはこの室にイロリを設けた。夏になるとこの室は主に養蚕飼育に使用される。すなわちこの室は、居住空間であると同時に作業空間でもあるわけである。「茶の間」は、この様に二重性の空間であるため十九世紀の中頃に至るまで畳を使用する様には計画されなかったらしい。（註1）「デー」は客間であり、冠婚葬祭時の主室となる空間であるため、この室の前面には「表口」と呼ばれる正式の玄関が付属する。これに対して家族の出入口は「トボーグチ」と呼ばれ、台所から出入するのが普通である。

三・三　四間取型民家の新形式

四間取型民家の新形式を示すのが新木博・桑原享・小林辰蔵氏の家である。先ず新形式になって大きく変化するのは「表口」が消滅することである。従って古形式に於て「表口」に相当する室に床板が張られ、さらに畳が入って室の奥行が増大して「トマノデー」が出現する。「ヘヤ」はその奥行が徐々に増大して行って開放的になり居住性の増大が計られる。故に家の規模は増大し、軒高・棟高も増して、いろりの煙出と養蚕の関係から「茶の間」の真上に「ヤグラ」が付設されるようになる。又、台所側の妻屋根は、丁度寄棟造の軒先を切落した恰好の「カブト屋根」になる。「カブト屋根」は小屋裏採光の一方法だが、この地方でも「カブト屋根」出現と同時に台所に根太天井が張られ小屋裏利用が考えられている。なお、桑原享家では「上チョーツバ」に引出式の木製便器を残しており、今日では非常にめずらしい存在なので付記する次第である。

四、五間取型の民家

この形式に属する民家は第一表のS_6～S_{11}までの六棟である。S_{11}の金子秀男家を除いて他は総べて右住いであった。聴くところによると、この地方では右住いが一般的で左住まいは少ないという話であった。平面形式は前記四間取型と似通っているが基本的には梁行長さを増して「トマノデー」を増設するのが、当地方の五間取型民家である。

四・一　五間取型民家の古形式

五間取型古形式の特徴を良く示している遺構が角田忠弥（S_6）・木暮六蔵氏（S_7）の両家である。角田忠弥家に於ては「ヘヤ」・「茶の間」の閉鎖性が前記中村卯内家よりもさらにはげしく、土間空間内部に上屋柱が建つことや、台所と床上境の柱がチョーナ仕上げであること等を併せて、この地方の民家の原始的手法を知ることが出来る。

さて、五間取型古形式の特徴は四間取型古形式のそれを包含するのであるが、「トマノデー」の奥行が独立した室としては最小の単位である一間であるところに特色がある。

「トマノデー」の性格は、その発生時に於ては「オキノデー」に付随する「控えの間」的存在であるところに意味があった。即ち、四間取型古形式に於て「表口」と障子一枚で接していた主室「オキノデー」は落着きと重厚さに欠けていた。この点を補って「オキノデー」の性格を一層「客室」（註2）らしく仕立てると同時に「控えの間」として出現したのが「トマノデー」の発生原因であろう。それ故当初は奥行が一間もあれば十分その存在意義を発揮したことであろう。

四・二　五間取型民家の新形式

五間取型新形式の特徴も、四間取型新形式のそれを包含するのはいうまでもない。しかし、特に顕著なのは「トマノデー」の奥行が徐々に増大し、外側の土壁が消滅して総べて建具で仕切られる様になることである。こうして「トマノデー」は間口二間奥行二間の正方形となって完全に独立した居住空間となる。さらに今日では「表口」に床板が張られ、時には畳を入れて居住している家がかなりあった。又、近岡義恵家の様に「表口」が土間で旧態をそのまま今日に伝えている家もあるが、現在ではこの部分を出入口として使用していないのが普通である。

五、多間取型の民家

多間取型に属する民家は第一表のS_{12}～S_{18}に示す七棟であって、岡村雄二家を除いて他は皆右住まいであった。室数については六間取が四棟、七間取が二棟、八間取が一棟の割であった。中村敏男家の他は総べてが台所側に「カブト屋根」を設けるが、小林功家は両妻側の屋根が「カブト屋根」であった。外観は大きくて棟が高く、見るからに豪荘で往時の勢いをしのばせる。内部に入れば「オキノデー」には総べての家に「書院」が設けられ「トマノデー」と共に天井が張られている。これらの家は昔、名主や大名主を勤めた家がほとんどであり農村では上級の民家に入る。この形式の民家は平面形式を考察すると、いずれも五間取型を基本とし、これから発展したものであることが判明する。（第1図参照）

この様に当地方の上級民家は五間取型を祖形とし、十八世紀中頃には六間取型の出現となる。これがさらに七間取型となり十九世紀の中頃には中村輔家の様に大規模な八間取型となって上級民家の形式は完成する。従って多間取型民家は、およそ十八世紀中頃以降の比較的新しい名主階級の一般的形式であると言えよう。

これより以前の上級民家の形式は五間取型となることが角田福方家の形式から推して判明出来るし、（註3）さらに遡れば四間取型となって上下級民家の差がなくなることは、農民の階級分化過程から推しても明らかとなるであろう。

六、柱について

古い家では上屋柱（註4）が必ず一間間隔に立つため、二間の間仕切の場合は中間に柱が立ち目ざわりである。台所には外壁から離れて内側にこの上屋柱が一間間隔立ち並ぶ。（角田忠弥家参照）これは構造技術の未熟なことを示す証拠であって、この時期に於ては上屋柱の省略は技術的に許されなかった。時代がだんだん新しくなると、これにつれて構造技術も向上し、徐々に上屋柱の省略が計られる。やがて、台所内側に立つ上屋柱が省略されて広々とした作業空間（註5）となり、部屋境の間仕切に於ては中間に立った柱が除かれて、間仕切と間仕切の交叉点に立つのみとなる。台所と床上境には六～四本の柱が立並び古い遺構では

総べて「チョーナ」仕上げである。新しくなるとだんだん「カンナ」が掛けられる様になり併用（台所側はチョーナ仕上げ、茶の間側はカンナ仕上げ）を経て総カンナ仕上げとなる。なお、この通りの柱径については他地域に比べて一般に細めであり古い遺構では四寸前後でシキイ・カモイ巾と同寸である。新しいものになっても大した変化はないが幾分径を増す様である。しかし、特に太い柱は現われず、従って大黒柱は最後まで存在しない。この様な特徴は吾妻地方の民家についても言えるところである。（註6）

七、台所について

建坪に対する台所面積の割合は、第一表の「台所巾の桁行長さに対する割合」で明らかな如く、新旧の別なくほぼ半分を有する。新しい遺構になると台所側に当初より計画された「エン」が設けられるため実質的には台所土間（床下作業空間）（註7）の減少となる。又、台所には南に面して「茶の間」側に「勝手」（又は「流し」という）が設けられ冬の食事準備に日光を受けながら暖かく仕事が出来る様考慮されているのは気候の及ぼす影響とも考えられるが現代的なセンスを感じさせる。「トボーグチ」と接しては「勝手」と反対側が「風呂場」になり、その奥が「馬ヤ」になる。「風呂場」の下には大きな下水溜を設け壁表に汲み取り口を設ける。時にはここが小便場になっているため「トボーグチ」に近付くと異様な臭気が漂い田舎らしさに充分接することが出来た。

八、おわりに

平面形式を中心に、その変化もわかるように出来るだけ年次的に記したつもりである。（第一表及び第一図参照）小野良太郎家は高平では古い家であると聴いたが、主屋ではなく往時の書院であるため他と同様に言及することが出来なかった。又、時間の都合で増田茂樹家、山口磯雄家を調査出来ずにしまったことを深くお詫び申し上げます。最後に、あちこちに行届かぬ個所があるのではないかと心配しておりますが、いまだ発展途上にある（?）未熟な者ゆえ大目に見て頂ければ幸いと思っております。

「註」

1……このことは、現在は「茶の間に畳を敷いているが、端部で巾広の畳寄せ（上端を畳上端とそろえる）という木材を使用して畳と敷居の間にできた隙間をふさいでいることにより当初から畳を使用する様に計画された室でないことが判る。

2……冠婚葬祭時の主室となるため「オキノデー」を主室または客室と仮に呼ぶ。

3……角田福方家は当地の大名主であると伝えるが、その民家は「五間取型」である。また、近岡義恵家も代々名主を勤めた家柄であるが、その民家形式は「五間取型」である。従って十八世紀中頃以前の上級民家は「五間取型」の型式となるのではないかと推察する。

4……小屋組を通して屋根の重さを支える柱のこと。

5……農家の台所に於ては、脱穀・籾摺り・わら仕事と農作業のほとんどがここで行なわれる。故に台所の本来的な性格は作業空間であると考える。しかし、時代が新らしくなると徐々に作業空間的性格はうすれ、炊事と日常の接客的性格が増すため「茶の間」に接して「エン」が張られ「いろり」が切られる様に移り変る。

6……桑原稔「群馬県西部と北部の民家遺構について」日本建築学会関東支部第三九回学術研究発表会梗概集　昭和四三年

7……古い遺構では「茶の間」を床上作業空間と定義付けるのに対し、「台所」を床下作業空間と定義付ける。

白沢村民家遺構の形式分類表

１９８－２０３頁は

個人情報が含まれるため非公開

小林　辰蔵家（S5）台所側の妻屋根を「カブト屋根」の形式にして妻側より小屋裏採光を計る正面の屋根の切上げは最近の改造による

中村卯内家（S1）

角田　忠弥家（S6）軒が低く古形式が漂う

佐藤　要家（S2）東側屋根にわずかな「カブト屋根」の形式を見る

木暮　六蔵家（S7）

新木　博家（S8）屋根の段違いは後の改造による

角田　福方家（S9）棟の「ヤグラ」も草葺とするため重厚さを感じさせる。（この地方の特徴である）

桑原　享家（S4）正面屋根の一部切落しは後の改造による

中村　敏男家（S12）

横坂　始家（S9）正面屋根の切落しは明治になってからの改造

岡村　雄二家（S14）中頃に「表口」が見える

近岡義　恵家（S10）

桑原　勇家（S15）草ぶき屋根にカラートタンをかぶせる

金子　秀男家（S11）

小林　功家（S10）

小林　幹男家（S12）正面屋根の切上げは後の改造である

岡村　雄二家軒裏の「セガイ」

岡村源五郎家（S17）

中村　　輔家（S18）

小林功家の東妻側の「カブト屋根」

小野良太郎家（S19）　　書院

小林功家の屋敷内を流れる沼田城御用水

佐藤要家　茶の間の「畳寄せ」（畳と敷居の間の板を畳寄せという）

佐藤要家　奥行の浅いトコ、このトコ下に見える小さな戸板に墨書あり、「文化七年十二月」大工源次郎とある

桑原　享家　　台所

中村　輔家　茶の間と台所境の敷居に取っ手がついており夏になって畳を使用しなくなった場合簡単に取はずし出来る様工夫されている。

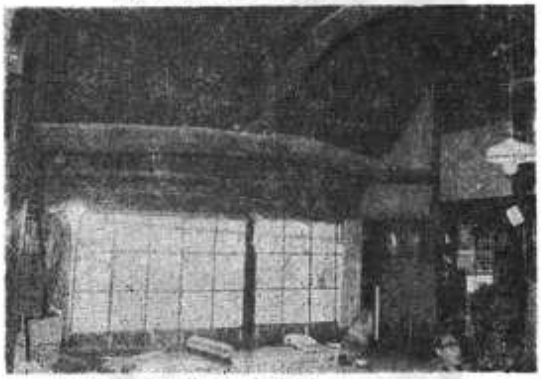
中村　輔家　　オキノデー

桑原　享家　　茶の間の「畳寄せ」と台所境の柱

近岡義恵家「茶の間」

小林　功家「茶の間」カモイ上のシュージ部分は土壁となり天井は吹抜けとなる

金子秀男家「茶の間」に残る「表口」



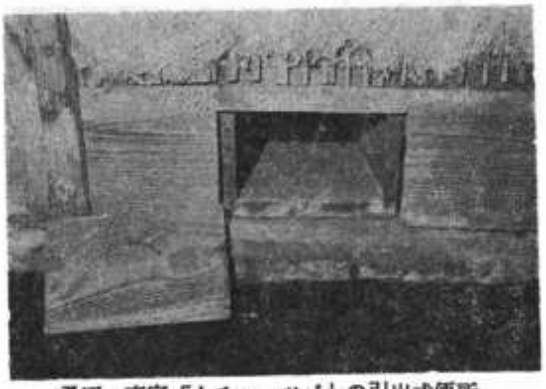
角田福方家「茶の間」表側

小林幹雄家「オキノデー」の平書院

横坂始家の外壁（壁心はコマイ竹を使用せずして、横は雑木を使用し、縦はこれに草の茎をたばねてゆわえ、土を塗ったもの）

近岡義恵家「オキノデー」に付く平書院

角田忠弥家「茶の間」のトコ、左が「ヘヤ」の出入口

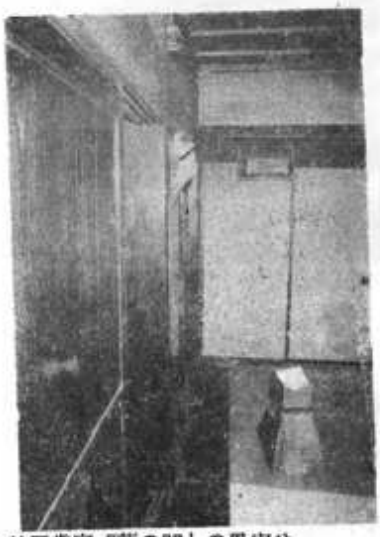


桑原　享家「上チョーツバ」の引出式便所

中村敏男家「トマノデー」より「オキノデー」を見る

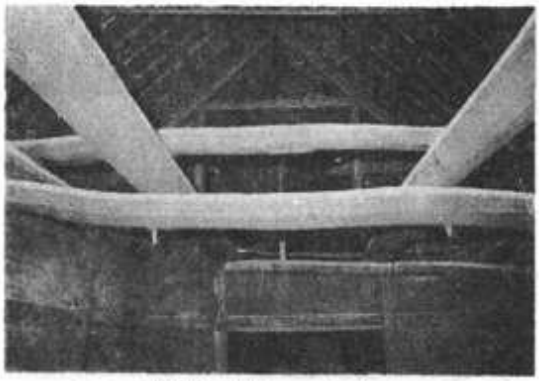
桑原　勇家「オキノデー」

中村敏男家「トマノデー」の平書院

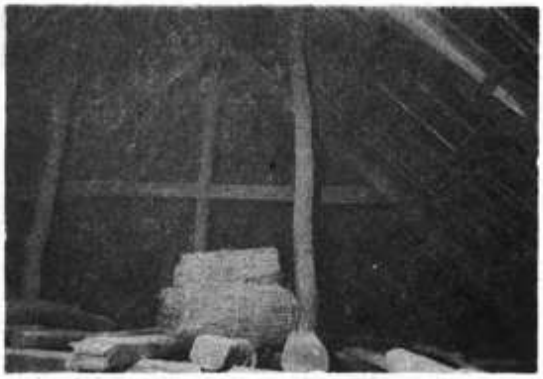


小林辰蔵家「茶の間」の畳寄せ

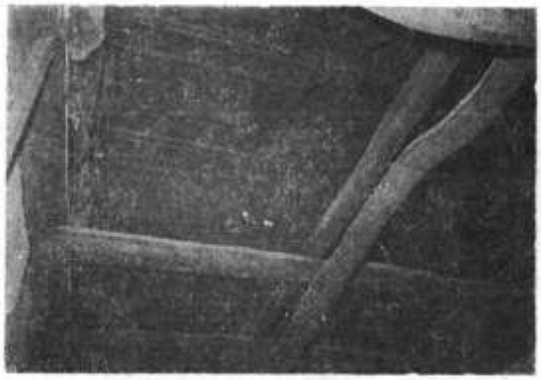
横坂　始家「フロバ」と「馬ヤ」



岡村源五郎家　小屋組



桑原　勇家　小屋組



角田福方家　小屋組

木暮六蔵家　小屋組

木暮六蔵家　台所に立つ「上屋柱」

民具

はじめに

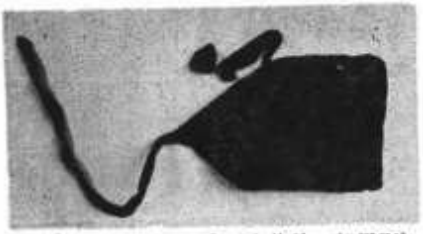
白沢村の民具を一瞥して感じた事は余り目立って特殊な物は見当らなかったという事である。そして調査員各々が拝見したものはその大部分が既に使用の生命を終った民具であった。しかもそれは僅か数年、或は十数年前迄は明らかに生き生きとして働いていた物であった。それ程、時代の変化は甚しく民具の変遷もきわだっていた。しかし、現在使用中のものについては遺憾乍ら、村の方達から見れば、余りにも平明の変化である為、殆ど実例を示していただけなかった。従って以下に実物を並べ解説する民具の多くは、現在既にその用途を失って居り。この村で現実に使用されているものでない事を特に記憶しておいて頂きたい。しかもその殆ど全てが、私達にとっては目新しくも何ともない昨日迄の使用品であったという、ほんとうの過渡期の時点にこの観察は立っているのである。

（今井善一郎）

衣食住に関するもの

一、発火

燧石と**火打金**による発火は勿論明治初期から失われた。火打道具の残存は普通神祭用のが時折見受られるが、白沢では携帯用火打道具だけが一個尾合の宮田福松氏方から報告された。それは裏付の布製の袋の中に火口（ホクチ）と燧石及び鎌（火打金）が入っており、袋の一端に紐がついていて、袋の上から結えられるようになっている。勿論袋は手製、金は市販、石は自然物かもしれぬし、販売品かもわからない。



火打道具入れ（尾合）（今井善一郎撮影）

二、灯用具

灯用具の中、最も原始的なものは**ヒデ鉢**である。この中、上古語父宇敷伊作氏方の粗製の石皿様の背面に三つ足があり、上面は皿形に凹んでいるが、その中央にヒデを燃え易くする様に突起ができている。岩室の岡村作次郎氏方の一コと尾合の山田新次氏方（今は鶏の餌入れに使用）のは円型の比較的整ったもので、尾合の鶴淵蛍光氏方のはやや大形の四角型のものが残っている。いずれも明治初期迄は使用したという。ヒデ鉢の中にやや新式形態のものに生枝で見出された瓦製の焼物がある。これは皿状の台の上に籠用の蓋をつけたもので、ヒデ鉢としては進歩したものであるが焚き物の補充に世話のいる難があったかに見える。

行灯（アンドン）は上古語父宇敷伊作氏と岩室岡村雄二氏方から報告されている。後者には燈芯（トウスミ）も残存していた。

行灯と同じく燈蓋（トウガイ）（油皿）を使用する灯用具で、火の位置を上下する仕掛のあるヒョウソク台というものがある。木製で次の

ヒデ鉢（尾合）
（今井善一郎撮影）

ひで鉢（生枝）
（阿部孝撮影）

ひで鉢（上古）
（阪本英一撮影）

ヒデ鉢（今は鶏の餌入）
（尾合）
（今井善一郎撮影）

ひで鉢（岩室）
（近藤義雄撮影）

ローソク立ての原形と思われる。これは高平の諸田又二氏方から報告があった。

蠟燭立ては可成残存しているらしいが、これには木製のもの（尾合宮田福松氏方）、金属製のもの（下古語父）等がある。後者には真鍮製の芯切りがついている。

手燭（テショク）金属製の蠟燭の持ち歩く道具、可成多く使用されていた。この例は下古語父のもの。

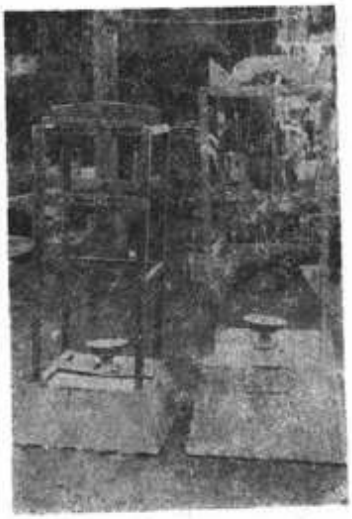
提灯（チョウチン）も蠟燭を持歩く用具であるが、その普段用は余り使い古されてむしろ残って居らず、儀式用の大型のものが報告されている。高平の小野亀太郎氏のもの岩村の岡村雄二氏のもの等この例である。小田原提灯と今は呼んでいるらしいが、通例の小田原提灯は小型の普段持歩くものである。これは明らかに結婚などの儀式用のものである。岡村氏方の六角提灯というのはその異型のもので、提灯の一特性の畳む事の出来ぬものである。

ランプは明治の遺産で、大正の初期迄使用された。今も停電用、小舎用等に使用する人がいる。吊りランプ、台ランプの別がある。台ランプは初の脚の短かいのを別の台の上にのせて使用した。後に台そのものが伸びたのである。吊りランプは下古語父から一つ尾合の小林ろく氏方から一つ出ている。上古語父の増田茂樹氏方には数種のランプが残されていた。

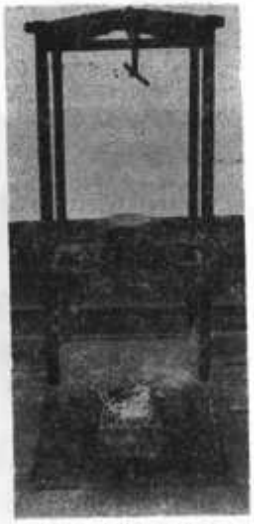
がんどう（尾合）
（今井善一郎撮影）

ガンドウは一方的の光明投射器であり、又雨天の時の灯火移送具であった。周囲が漆塗の曲物でできているのが多いが、尾合鶴淵螢光氏方のものは比較的新しいものらしくブリキ製で、中のローソクを垂直に立てる仕組みは旧来のものと同一である。

祝提灯(高平)(関口　撮影)

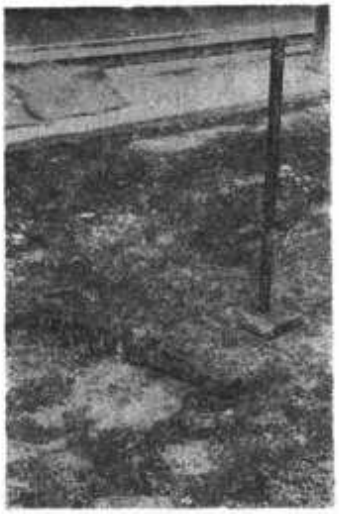


あんどん(骨)(上古)
(阪本英一撮影)



あんどん(骨組)(岩室)
(近藤義雄撮影)

ローソク立て(尾合)
(今井善一郎撮影)



ひょうそく(右)と竜吐水(左)
(高平)　(関口正巳撮影)

手　燭(下古)
(佐藤清撮影)

小田原ちょうちん(岩室)
(近藤義雄撮影)

三、調理用具

調理用具は実に多いのであるが、報告に現われたものは極く少ない。

木鉢　これはトチ・セン等の木製で、一時代前迄はうどん・そば・団子等を作る時粉をこねるに使用した。現在ではジュラルミン・アルマイト等に代位された、上等のこね鉢は朱の漆塗の美しいものもある。尾合からも報告があったが、ここには高平の鳥山鳴氏のものを掲げておく。

薬研（ヤゲン）　名の如く製薬用具であるが又多く調理用に使用される。胡麻・唐辛子・陳皮（チンピ・蜜柑の皮）等を粉末化した。上古語父佐貫悦氏方。

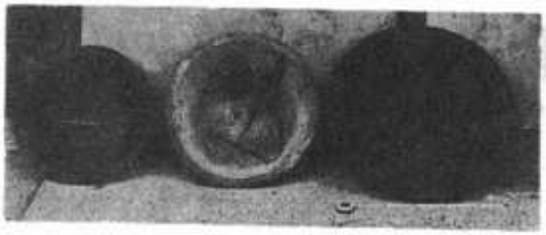
鉄瓶と茶釜　共に湯沸し具であり、両者共五徳にかかるものと、鍵竹にかかるものとがある。後者は勿論蔓がある。いろりにかゝるのである。岩室岡村氏のやかんというのは茶釜であろうと思われる。

ランプ各種（上古）
（阪本英一撮影）

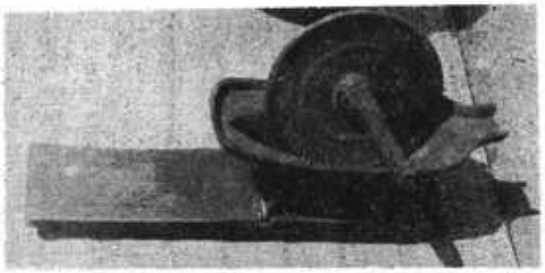
ランプ（尾合）
（今井善一郎撮影）

六角ちょうちん（岩室）
（近藤義雄撮影）

ランプ（下古）
（佐藤清撮影）



木　鉢（高平）　（関口正巳撮影）



やげん（上古）（阪本英一撮影）

こくびつ（生枝）（阿部孝撮影）

挽き臼　これには粗磨りし仕上磨りの差があろう。粉挽き臼の如きは後者に属する。油しぼりもこの中に入る。茶を挽く茶挽き臼もある。

醤油しめ機　生枝の一例がある。風呂桶用の桶に、醤油のもろみを袋に入れて重ねラセンの力で締めるのである。

油しぼり機　高平の中口秀吉氏方から報告されている。太い二本の縦枠に横木を挿しこみ「や」でしめる。菜種はふかくして、袋に入れて、上からしめ木を入れてしめるのである。

豆腐釜　岩室の中村広次氏方の大釜、要するに大量に豆を煮た釜である。各地に味噌豆の釜として同様のものが多い。

穀櫃　生枝中村佑氏方のもの、大きな四角な箱であるが、中が区切りされてあり、上と前が板がはずれる様になっている。今はブリキの罐を一般に用いるようになった。

鉄びん（俗称まおとこてつびん）（下古）（佐藤清撮影）

茶がま（岩室）（近藤義雄撮影）

石　臼（岩室）（近藤義雄撮影）

四、飲食用具

飲食用具も当然、数多い事であるが報告になったものはやや少なく、片よっている。

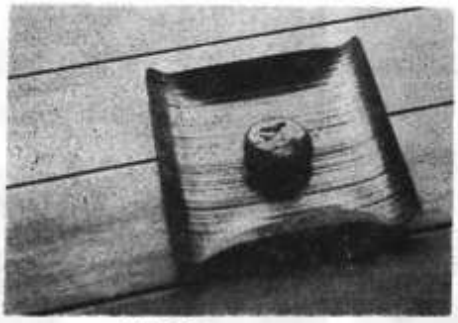
へぎ　これは尾合で報告のあったもの、これは竹製である。竹の身を圧平して皿状にしたもので、漆がぬってある。多分に神事用とか祝祭用のものであるらしい。赤飯など盛る。

イジメ・イズメ　これは藁製の冬期の飯類保温具である。可成各地から報告されている。上古語父の鈴木正夫氏方は茶器の入れ物であったという。同所の字敷伊作氏方では渋紙張に補強されていた。以上の外尾合の宮田福松氏、小林ろく氏高平の小林一雄氏等のものは円形で、宇敷氏方の別の一箇、下古語父報告の一箇等は角形である。これらのイヅメは又乳幼児の子育用にも使用したと云われていて兼用のように見受られるが、結局それは大きさによって異るので、大きなイヅメは確かに育児用に使用されたと思う。

弁当箱　これは古いものは柳行李の小形なもので、御飯が圧されず美

醤油しめ機(生枝)
(阿部孝撮影)

油しぼり機(高平)
(関口正巳撮影)

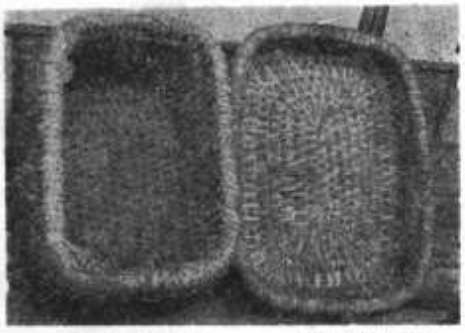


へ　ぎ(尾合)
(今井善一郎撮影)

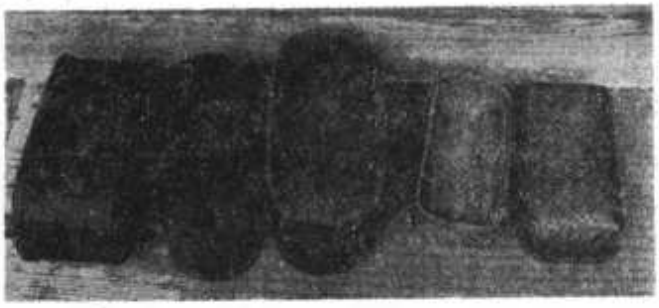
豆腐釜(岩室)
(近藤義雄撮影)

イヅメ(上古)
(阪本英一撮影)

イヅメ（上古）
（阪本英一撮影）



イヅミ（下古）　（佐藤清撮影）



弁当のいろいろ（岩室）
（近藤義雄撮影）

メンパ（弁当箱）（上古）
（阪本英一撮影）

弁当箱（尾合）
（今井善一郎撮影）

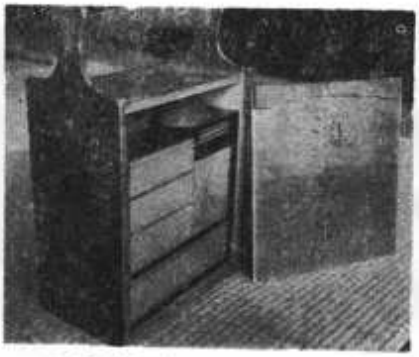
味しかったという。次は所謂メンパである。これは蓄附の曲物で主に漆塗であった。岩室の中村雄二氏、上古語文の増田茂樹氏方等にある。今少し進んだのは四角形、オカズ入れのついた塗物の弁当箱で尾合の宮田氏方で報告されている。

汁物の容器が二つ報告されている。一つは上古語文鈴木正夫氏方の「長柄の杓子」というが、用途不明との事で、或は祝儀の席に酒を入れたかという。これはしかし一見長柄の湯桶（ユトウ）かと思われる。之に反し、同じ上古語父小淵久佐久氏方の湯桶と称する器具は漆器であるがどうやら油差しに似ている。しかし酒器と解されているようである。前者は揚げ羽の向い蝶、後者は山口菱の立派な金紋入りで、いずれも購入品らしい。

酒器は各種のものが報告されている。下古語父から報告された大型の蓄附瓶と、上古語父増田茂樹氏方の花弁文様付の美麗な瓶とは共に下部に呑み口がついている事

長柄ゆとう（上古）
（阪本英一撮影）

により酒瓶である事が知られる。徳利大小種々のものが報告されている。下古語父からは下端の尖った下に立てておけない徳利が報告されている。瓢箪もいくつか報告されているが増田氏方のものは可成大形のものである。稀しい酒器には尾合の中村哲夫氏方の**酒重箱**というのがある。これは携帯用弁当箱に酒器の附属したもので、四角形の酒入れがついてあり、あと菜入れ、皿盃の類が皆塗物で出来て居り、一つの手提用の箱の中に納まっている。野遊びとか芝居見物等に利用されたものであろうが、一般民具より一寸高尚である。



酒重箱（尾合）
（今井善一郎撮影）

箱膳　数例報告になっていたが、膳に普段用の茶椀、箸等の揃った好例は見出せなかった。**釜敷**が鶴淵螢光氏方から報告になっている。手製であろうが、之はおそらく現在でもまだまだこの地方では充分活きて働いている民具である。

茶道具は、下古語文から急須及び茶器の美しいものが報告されている。その外一般的のもの故か報告をみない。

煙草道具は上古語父の佐貫悦雄氏及増田茂樹氏から、煙管胴乱等が報告されているが、いずれもやや特殊形のもので、一般形のものも現在では最早失われつつある状態である。

茶道具各種（下古）　（佐藤清撮影）

箱　膳（尾合）
（今井善一郎撮影）

釜敷き　薬の手製、尾合鶴淵氏方から報告があったが、これは燃料にマキや柴をもしている地方では現在でも多く使用されている。

五、服飾具

この報告は極めて少なかった。

笠　一個、下古語父から報

茶入れ（下古）
（佐藤清撮影）

煙草道具（上古）
（阪本英一撮影）

酒のいれもの(上古)　(阪本英一撮影)

酒瓶徳利甕類(下古)　(佐藤清撮影)

酒かめ(下古)
(佐藤清撮影)

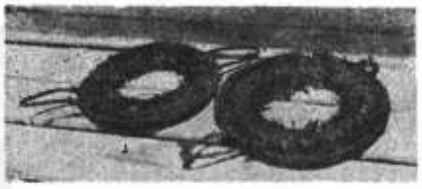
ひょうたん(上古)
(阪本英一撮影)

一升徳利(尾合)
(今井善一郎撮影

いていた。材料は篠の細割りにした特殊のものである。この地方では一般に管笠が使用され、越後方面から移入されていた。

草履と草鞋　尾合の小林ろく氏方から報告がある。この場合草履は足半（アシナカ）で鼻緒がエボムスビにしてある。草履にはこの外冬期殊に雪中などにはく先端がクツ様になったものがある。上古語父の増田茂樹氏方から報告されている。スリッパの袋様のものが勿論藁で編んであるが、その外側にちゃんと鼻緒がついている。この鼻緒は足指をさしこむ筈がないから、袋様の爪覆いの補強の仕事をしていると解される。

藁沓　右の増田氏方其の他で報告されている。大体同型である。半長靴式である。勿論雪沓用であるが、高平の藤井光男氏方の例によれば、味噌作りの大豆踏み、酒造りの麹踏みに用いるという。此の場合は底に木の板を当てる。この藁沓を作る時の木型が岩室の岡村雄二氏方から報告されている。



釜敷き（尾合）
（今井善一郎撮影）

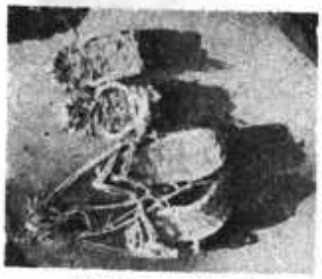
わらぐつの型（岩室）
（近藤義雄撮影）

綿帽子かけ（尾合）
（今井善一郎撮影）

まんじゅう笠（下古）
（佐藤清撮影）

わら草履（上古）
（阪本英一撮影）

わらぐつ（上古）
（阪本英一撮影）



草履と草鞋（尾合）
（今井善一郎撮影）

わらぐつ（高平）
（関口正巳撮影）

わらぐつ(右)と馬のくつ(左)
（下古）（佐藤清撮影）

綿帽子かけ　衣服類の報告がないが、一つ祝儀用の綿帽子をかける、つまり真綿を之にかけて綿帽子に仕上る原型が鶴淵螢光氏方で見出された。瓦製のアンカ様のものであった。

六、調度品

印籠　この物の使用せられなくなってから久しいが尾合の鶴淵螢光氏、宮田福松氏から報告がある。

印籠(尾合)
(今井善一郎撮影)

印籠(尾合)
(今井善一郎撮影)

矢立　これも同じ右二氏から報告があった。

硯箱　これは箱形の大きな硯入れで、下に二乃至三の小引出しがあり、上は蝶番い上げ蓋になり、あけると筆硯がある。尾合の宮田福松氏角田福市氏から報告があった。後者では之を掛硯と呼んでいる。

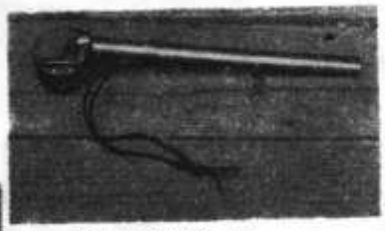
財布　下古語父から一例報告があった。

鏡　鏡は柄持式大型一面、紐式小型二面、岩室から報告になっている。

七、生活用度品

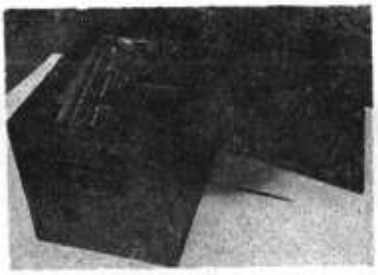
手水鉢　二種類上古語文の増田氏から報告がある。一つは木製の平桶、三つの脚が下部に伸びている。洗面具、一つは石製の深鉢、これは便所の手洗鉢、いずれも現在は使用されていない。

さいふ二種（下古）
(佐藤清撮影)



矢立て（尾合）
(今井善一郎撮影)

鏡（岩室）
(近藤義雄撮影)



硯　箱（尾合）
(今井善一郎撮影)

洗面器（上古）
(阪本英一撮影)

ネコ　これはアンカともいう、同じく増田氏のもの、瓦様の焼物の平鉢に炭火をいれ、一方のあいた木製の箱に納め、上に布団などかける。簡易の置炬燵。

置戸棚　尾合樹木茂林治方箱形の大きな容れ物、前面がけんどん仕掛の戸が立たっている。

箱梯子　尾合小林辰蔵氏方にある。上下二段組のもの、今は別口に分けてある。安政四年作銘がある。戸棚と引出しが側面に作りつけられている。

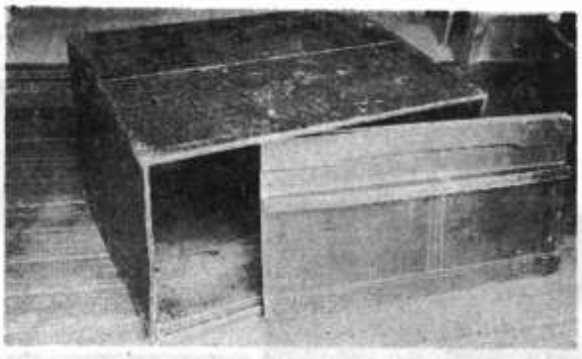
箱階段(上部)(尾合)
(今井善一郎撮影)

箱階段(下部)(尾合)
(今井善一郎撮影)

手洗鉢(上古)
(阪本英一撮影)

ネコあんか(上古)
(阪本英一撮影)

イジメ（岩室）
(近藤義雄撮影)



置き戸棚（尾合）　(今井善一郎撮影)

火のし（尾合）
(今井善一郎撮影)

イジメ　之は育児用品として項目を新にすべきであるが一応ここに入れておく。既に先述した藁製のいづみ・いづめ等と同一の用途のものであるが、前者が蓋がある為これを食品関係に分類したが、ここに竹製の籠のイジメ（と呼ばれた）が報告されている。土地の説明にイジメは子供の立場から、この器の中に入れられたつらさを現わす語とさえ云うが、いずれにせよこれは専用の育児具であった。岩室岡村雄二氏方報告。

火のし　之は真鍮製の火皿に木

柄のついたもので、深い火皿の中に炭火を入れ、衣類等に火のしをする。この金属は厚く、熱度の持続と直接の焦けを防いでいる。尾合と下古語文から報告がある。之は服飾具そのものではないがその関係品なのでここへ入れた。

箪笥　旧形の古い鉄金具の物々しいものが尾合の樗木茂林治氏方から報告になっている。この型も今は稀らしい。

竜吐水　高平の諸田又二氏、岩室の岡村雄二氏方から報告になっている。木製箪笥。ポンプ柄一本を上下して、弁を開閉する事によって水を噴出する。明治時代のもの。

箪　笥（尾合）　（今井善一郎撮影）

竜吐水（岩室）　（近藤義雄撮影）

生業に関するもの

一、農　具

農具として報告された品物も現在使用されたものは少なく、一時代乃至もっと以前に使用された道具類である。以下不揃乍ら之を列記する。

さ　な（尾合）　（今井善一郎撮影）

麦打ち杵（高平）
（関口正巳撮影）

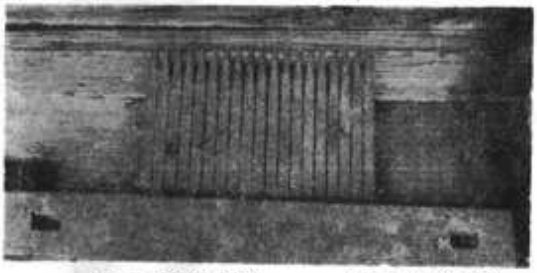
くるり棒（岩室）　（近藤義雄撮影）

クルリ棒（上古）
（阪本英一撮影）

脱穀器の原始的な形のものに**麦打ち杵**が高平の中口秀吉氏方から出ている。之はやや太目の棒に丁字形に柄をつけたもので麦の穂をネコの上にひろげて打って実を落したという。この進歩したのがクルイ或はクルリ棒という竹の長柄の先に廻転する棒をつけたもので、この棒には竹との接続部分が別の木を用いたものと、穀物を打つ棒の部分の自然弯曲を利用したものとがある。後者の例は生枝の中村佑氏方にあり、前者は一般的であるが岩室の中村広治氏、上古語父の増田茂樹氏、高平の小林一雄氏等から報告されたがこの例は村内にまだ多いと思う。稲のボッサや大豆等もネコの上で打ったものである。

小麦の脱穀にはサナがあった。尾合の岡村和太郎氏方のは今は脚を失っているが一応昔の姿が偲ばれる。細長く割竹を縦にならべたもので小麦を打ちつけて穂を離したものである。

麦つき杵（高平）
（関口正巳撮影）



かなごき（岩室）　（近藤義雄撮影）

オシッコト（上古）
（阪本英一撮影）

木製臼（岩室）
（近藤義雄撮影）

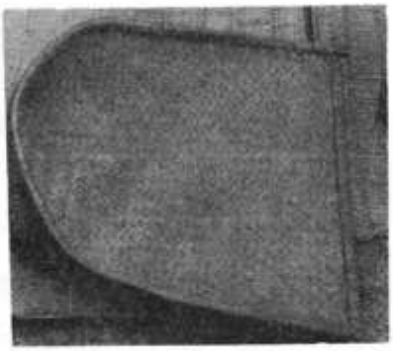
木製臼（岩室）
（近藤義雄撮影）

米麦共に（金具に多少の広狭があった）用いたものに金ゴキがある。他所で千歯（センバ）と呼ぶもので櫛状に鉄片をならべ、穀類をしごき落したものである。岩室の岡村雄二氏方から報告されている。下古語文にも報告があった。

麦の場合落ちた穂を大臼に入れて軽くつきノゲ押しをした。この時用いる麦つき杵は餅つき杵よりも軽くできている。高平の中口季吉氏方から報告されている。上古語文から報告のあったオシッコトウスはこの目的のもので、臼の下に麦桿束を二つ入れてスプリングの役をさせ、麦、米のノギやカラを取る為に用いた。

米や大麦は脱穀しただけでは籾がらがついている。之をとる為にスルスにあけてひく。岩室の中村広治氏方のスルスは松の木の太いものを輪切りにし、その年輪を臼の歯として利用したもので古型のものである。臼の上玉の両端に紐をつけて交互に行き来させてする。一人でもすれるが二人使いが多い。下古語父から報告の一例は桶用の作りで土臼の一種であろうが、やはりやや古い形と思われる。

ヒョウダシ（俵口）（尾合）
（阿部孝撮影）

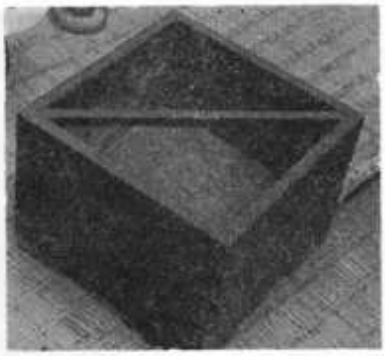


箕（上古）
（阪本英一撮影）

穀物の取扱は箕（ミ）でする。その一例上古語文の増田茂樹氏方のはやや上等のもので篠竹製であるという。（写真を見ると籐のように思われる）

俵に入れる時一種のジョウゴを当ててすべりよく穀類の納るようにする。そのジョウゴ様のものを表口（ヒョウクチ）という。尾合の宮田氏から報告がある。外に下古語父からも一例出されていた。

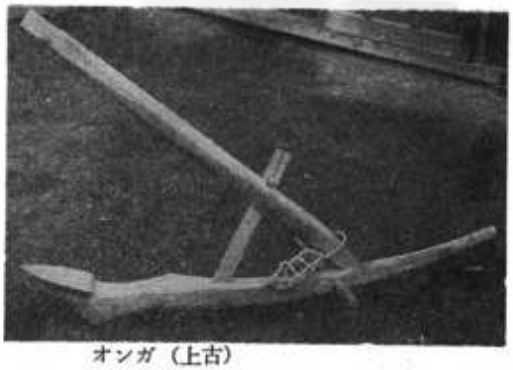
できた穀類を計るに桝が用いられるが、ここには斗桝が上古文の増田氏から報告されている。これは旧式の金盤（カナバン）桝の一種で、一斗桝には補強の為の斜の鉄の角棒が入っている。斗桝はこの後皆円型になった。升以下の桝は引きつづき角形であったが金盤は失われて行った。



斗　桝（上古）
（阪本英一撮影）

農具の中耕作用具を一瞥するとテンガ、エンガ、スキ等皆此の地にも存するが、報告にあらわれたのは僅々左の二種にすぎない。即ち一つは摧土器の一種、四つ子である。一つは木製のものに六本の鉄釘を打ったものであり、この方が古い。一つは鉄製の軸から釘が五本出た道具である。この方が新式のものであり、現在使用されている。エンガ等で田畑を鋤き起した後この道具で土の塊を打ち摧くのである。四つ子というのは昔こ

四つ子（高平）
（関口正巳撮影）



オンガ（上古）

（阪本英一撮影）

肥出しかぎ（高平）

（関口正巳撮影）

の釘が四本だった時の名残りであろう。

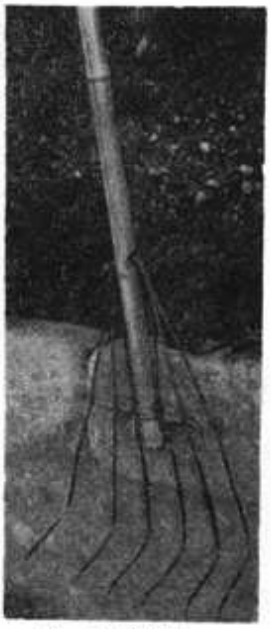
田畑を鋤き起す道具はオンガといい、馬に引かせたのであるが上古語文の桑原勝太郎氏方から報告されたものはそのやや古い一例である。このオンガは其の後幾改良された。この例の如きは先の金具は鍛冶屋で、木質部は村の大工等にたのんで作ったものである。

次に農業用雑器具を少しく掲げておく。高平の鳥山鳴氏方から報告されたものに肥出しかぎがある。その古いものは自然の木の枝を使い、その股の部分を利用して尖ったカギ様なものを作り、主に堆肥をかき出すに用いた。最近はもっと作りやすい鉄製の二本子の釘を柄の先につけたもので同一の仕事をするのである。

養鶏用の水与え器　これには種々の形式があったが報告された一例は尾合の小林みき氏のもの、さかさに立てられた器からは気圧によって水は下の受け皿に一定量しか下らず、いつも皿の中に水が保たれるのであるが、この考えの産物は非常に多かったのである。

鶏の給水器（尾合）

（阿部孝撮影）



熊　手（岩室）

（近藤義雄撮影）

綿くり機（岩室）

（近藤義雄撮影）

こまで　熊手の事である。岩室の中村広治方から報告された例は爪の部分が針金で出来ている。通常は割竹でできているのである。つまり多少これは開けた産物と云えよう。

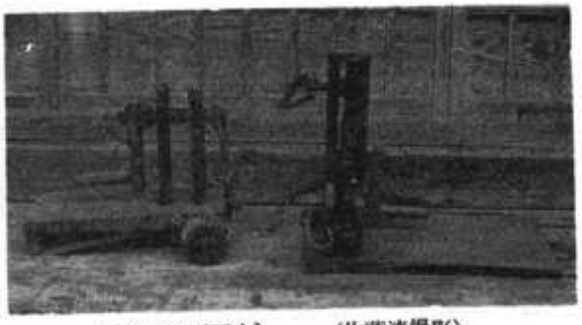
綿繰機　今は木綿の栽培がたえて久しいのであるが、時にこの綿操機の残っている家がある。云わば綿と種との分離機である。岩室の岡村雄二氏方にこの一例がある。二本の棒は螺旋によって相互に廻転し合うと共に互に距離を一定にせしめて、種を綿質部と分離せしめるのである。

種子入れ（ひょうたん）（岩室）
（近藤義雄撮影）

種物入れ　農家にとって、次期農作の基を作る農作種子の保存は最も大切な事である。この為に種子入れに種々な工夫がされる。第一は湿気をおそれ又過度の乾燥をおそれる。第二に虫鼠の害から守る、第三に簡便なものをという点等からして、上等なものはその為の小箪笥から、割目の入った竹筒等種々あるが、ここに報告になったのは岩室岡村氏方の**とうがん**である。瓜の中味をくり抜いたもの。

次には**藁**の工品作製用具を一瞥する。これもいろいろあるが、ここに報告のあったのは岩室中村広治方の**藁叩き杵**（キネ）一つの大きい（堅い質のものを用いる）を輪切りにし、柄の部分を削って握れるようにしたもの、石の台上に藁をおいて叩き柔らめて加工に用いる。

次には**縄より機**、これは縄ない機ではなく、縄を三本つかって、それをより合せる道具、尾合の小林みよ氏方から報告されたのはやや古く、一方の固定部は二本立てた木か杭かに固定して用いる。下古語文からの一例はより進んで三つのよりをかける部分が歯車で同時に動くように出来て居り、固定部は台になって居り、人がのってその目方で動かないようにしてある。他の一方の逆によりを（三本一緒に）かける方は両者とも似た構造で、下に車がつき、縒りがかかると次第に縄全体が短かくなるので、車がついていて前進できる。

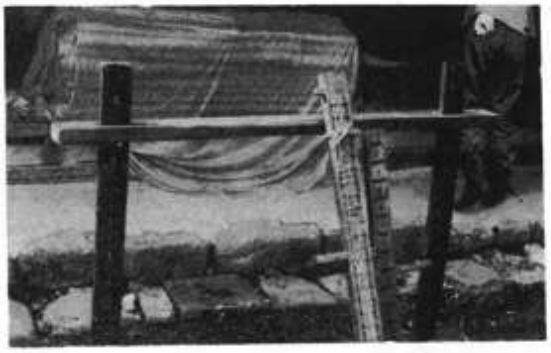


縄より機（下古）　（佐藤清撮影）

筵（むしろ）**織機**もまだ各地に残っているが岩室岡村憲一氏方から報告された一例。写真は枠だけで実演のところでないからよく了解しにくいかしれないが、上下二本の枠と、左右二本の柱が見えるが、この下の枠はそのまま台で、実はその上の中間に今一つ枠が入り、上下の間に芯縄を幾重にもめぐらし、その縄を筬（オサ）の役をする一方は只の穴一方は広く縦に拡いた穴をもつ柄つきの横棒に通し、これを上下して、そ

わらたたき（岩室）
（近藤義雄撮影）

縄より機（尾合）
（今井善一郎撮影）

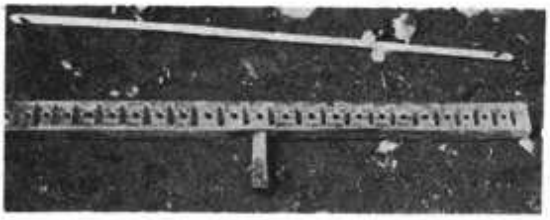


むしろ織り機（岩室）

（近藤義雄撮影）

ねこあみ機（岩室）

（近藤義雄撮影）



むしろ機のおさ（岩室）

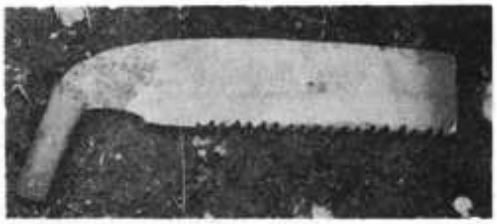
（近藤義雄撮影）

の間に藁を左又は右から入れて織る。

此の地方では**ネコ**は昭和の大戦前迄作られていたといい、ねこ織の機械も残っている。これも岡村氏方**ねこばた**が報告になっている。ねこ筵は藁を充分に打って、これはねこをかくという通り手で編むので、大型の丈夫な筵ができる。白沢にはねこはまだ多く残存しているが、これは最早後の製作者を見出す事のできない技術であろう。堅牢な筵である。

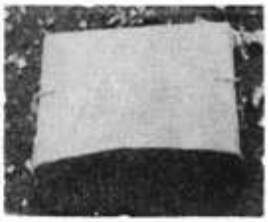
二、山樵用具

白沢は古語父の連山を背負って山地が多いのであるが、山林用具は比較的少ししか報告されなかった。稀しいもののみ報告されたが為であったかしれない。



大　鋸（岩室）

（近藤義雄撮影）



目立の時の鋸おさえ

（岩室）

（近藤義雄撮影）

大鋸（オオガ）**木挽鋸**　これは本当の大鋸ではない。大鋸の普通の品はもっと背が厚い、本報告品は中位のものであろうが、たしかに木挽の使用品であったと思われる。大正期のもの、岩室岡村雄二氏方の品。

目立てばさみ　これは鋸の目立て（鏨で刃を尖鋭にする）をする時、その振動をふせぐ為に鋸を挟んで固定する道具、同じ岡村氏方の報告、今も使用しているという。

枝打ち鉈　これは山林の育成中、下枝の打落しに使用する。普通の鉈の先に堅い曲りがついていて枝をおさえたり落したりするのに便利に出

来ている。尾合儀木茂林治氏方の報告。

枝打ち鎌（尾合）
（今井善一郎撮影）

削りよき　これは厳密に云うと、山林用具ではなく大工用具なのである。しかし、よきというと普通刃部の狭い背巾の厚いものになるが、それは専ら山林用具で、根切りや、枝打（大枝）に使用される。けずりよきは細身の丸材を鋸を使用しないで角材にけずって作り出す道具であり、又大きな材木の場合も之を荒けずりして平らな面を作り出すのに用いる。普通よく**手斧**（チョウナ）作りの家という場合、水平に木面を叩き平らげる**チョウナ**と、この**ヨキバツリ**という削りよきを使用する場合があり、実際はこの削りよきの使用の方が多かったかと思われる。上古語文小曾根重雄氏方の報告。

ケズリヨキ（上古）
（阪本英一撮影）

三、狩猟用具

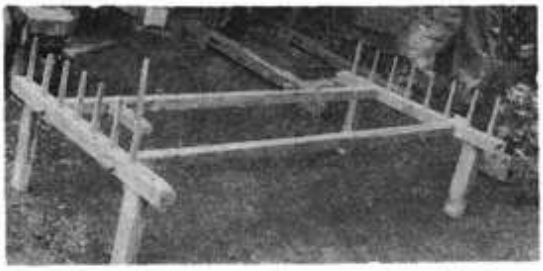
狩猟用具は全く報告に乏しかった。大形の鳥獣に別れて久しい為かしれない。

猪槍（ししやり）高平の諸田又二氏からの報告、江戸時代使用の由、猪狩に用いた鎗。全長一九三糎、穂長一二糎半。

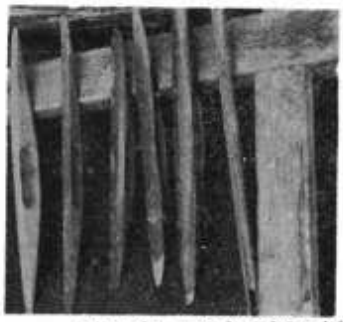
四、紡織色染に関するもの

これも報告の少なかったのは、今はこの仕事から女性が急激に遠ざかり、且つ忘却されつつある為と思われる。

ししやり（高平）
（関口正巳撮影）



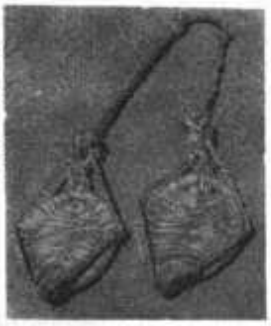
ヘデエ（上古）　（坂本英一撮影）



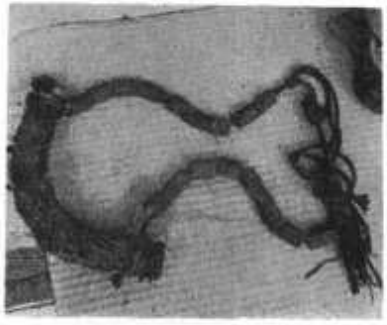
イザリばた上（ヒ）（下）（上古）
（阪本英一撮影）

へでえ　糸をへる（織る前に糸を整えること）時に使う道具で此の地では多くの女性が使用できた。終戦後も物質不足の項は農閑期には使用したという。材料は杉、村内の大工の製作。この例は上古語文宇敷伊作氏の報告である。

いざりばた　同じく宇敷氏の蔵品。終戦後しばらく使用したという。之は自家用機織の中では古式のものである。写真に見える尖ったのは「ひ」で細いのが絹の上等品の時、太いのは木綿等に使用した。



馬の沓（上古）
（阪本英一撮影）



しりがい（岩室）
（近藤義雄撮影）

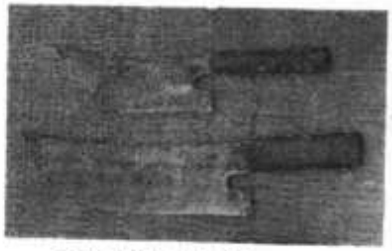
五、畜産用具

馬の沓　上古語文の桑原雅三郎氏方、尾合の宮田福松氏方から報告があった。藁の自製品、馬を飼った頃は沢山作った。今は作れる人も少ないであろう。二月上旬に奉公人の出代りという日があり、年期の使用人が止めて主家を去る時は「**ゆずりぐつ**」と云って、百足の馬の沓をおいていくものだと云われたという。

馬の尻繋（しりがい）岩室の岡村雄二氏方からの報告、荷鞍用という。しかし写真を見ると普通の荷鞍用のものはもっと柔かな材料でできているのではないかと思う。この品はむしろ田植などの代掻きの時に使う。**しろぐら**（代鞍）用のものではあるまいか。材料が濡れてもいいようにできている。

六、養蚕用具

養蚕用具は本来農具の一部分であるが、資料がやや多く報告されているので一項立てておく。



桑切り庖丁（上古）
（阪本英一撮影）

煙草切り庖丁（上古）
（阪本英一撮影）

桑切り庖丁　もとは蚕の小さな時は桑葉を刻んで与えた。その時の庖丁である。鍛冶屋にたのんで作ってもらったり、市販を買ったりした。報告の一例は上古語父増田茂樹氏のもの。

これに似て非なる一例を上ると、やはり上古語父宇敷伊作氏方から報告のあった煙草刻み用の庖丁は、昔専売以前自家用当時の使用品であるが、刃がやや短かく厚い。

桑ぶるい　これも現在では使用しないが刻んだ桑の葉を蚕の上にふるいかけて給する道具であるが、蚕齢の差によって篩の目が大きくなるの

である。上古語文、宇敷伊作氏方。

ダンロ（上古）（B）
（阪本英一撮影）

桑ぶるい（上古）
（阪本英一撮影）

ダンロ（上古）（A）
（阪本英一撮影）

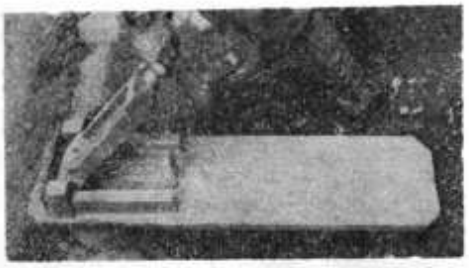
暖炉　これは成育期の気温の寒い時、室温保持の為め用いたもので、元来は室に小さな炉を切ったり、火鉢を持ち込んだりしたが、大正頃は炭又はマキ使用の持ち運びのできる道具ができた。Aはマキ用、Bは炭用、共に上古の増田氏のもの。

まぶし繰機　明治から大正期、昭和の初期迄は此の地方ではマブシは萱を刈って自製していた。これは屋根葺萱のように剛くない柔かいのが喜ばれ、専ら作りかやを使用した。報告の一例は尾合宮田福松氏方のもの、腕木を上下して、コの字形の中にカヤを折り込んで作った。同様な一例が岩村の岡村雄二氏方から報告されて居るが、これは中村卓郎という人の考案になるものという。

座繰りは　くず繭の自宅処理をした糸とり機で、明治、大正、昭和の初期を通じて一般に行われた。従ってその機械も岩野、上古語文、下古語文、尾合等各地から報告されている。終戦後も稀には糸をひく人もあったという。

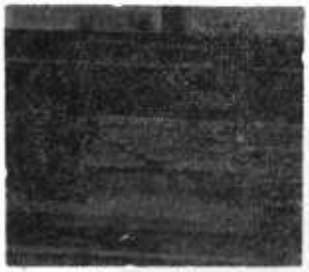
牛首・糸かえし台　これらはいずれも糸を巻いたり、巻きかえたりするに使う道具で広く使用された。糸かえしは現在も利用されている。岩室岡村雄二氏、岡村作次郎氏方から報告があった。

くだまき機　糸から機械への過程に使用する道具、いざり機を使用していた頃の品昭和の初年迄使用した。報告は岩室岡村雄二氏方のもの。



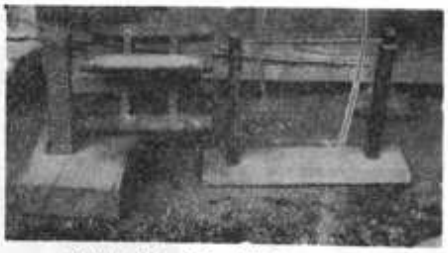
まぶしおり機（岩室）
（近藤義雄撮影）

アブミ作り機（尾合）
（阿部孝撮影）



ざぐり（下古）
（佐藤清撮影）

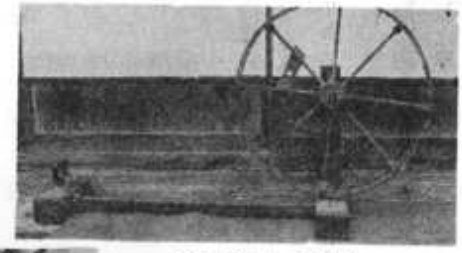
ざぐり（上古）
（阪本英一撮影）



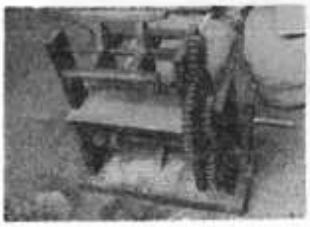
牛首と糸かえし（岩室）
（近藤義雄撮影）

ざぐり（尾合）
（今井善一郎撮影）

ざぐり（岩室）
（近藤義雄撮影）

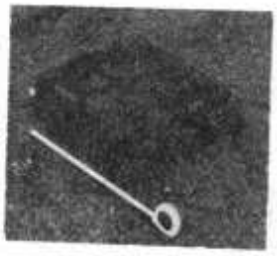


くだまき機（岩室）
（近藤義雄撮影）



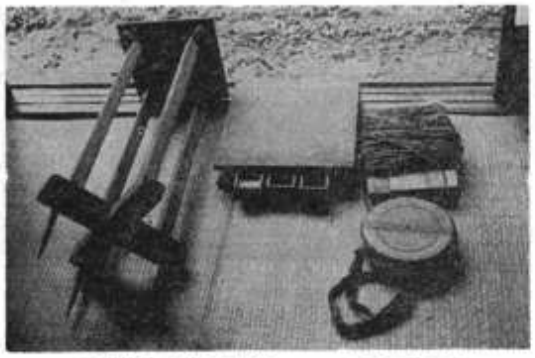
七、各種職業用具

度器の中斗桝は農業の収納の場合に記述したが、その特殊のものとして、これは民俗資料としてより史的資料であるが、伊賀桝というものが報告されている。沼田藩主真田伊賀守は苛政で有名であるが、年貢取立用の特殊桝を作り之を使用せしめたといい、高平の鳥山鳴氏方に遺品がある。勿論云い伝えによるものと思うが、徳川初期のものである。桝は内法で縦横二一、二糎、高さ八、六糎あり、二升二合入るという。これを二升桝と称したという。

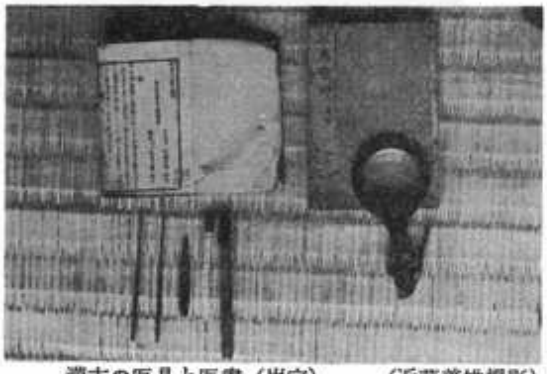


伊賀桝（高平）
（関口正巳撮影）

測量機具　岩室の部落有であるが三脚の部分が固定した四脚のもので



測量道具（岩室村有）　（近藤義雄撮影）



漢方の医具と医書（岩室）　（近藤義雄撮影）

ある点などが興味深い、明治九年の地租改正当時の品物という。

漢方医具　岩室の中村いち氏方にレンズ、検温器等極く簡単な材料が医書数冊と共に残っている。この程度の機具で人命をあづかった昔の医者は余程の名医であろう。

銭　箱（尾合）
（今井善一郎撮影）

銭箱　これは職業的のものかどうかわからないが、（金融業関係の人もあったかしれぬが）各地に可成沢山残って居り、古くから銭が好かれた事を実証している。大体明治初期迄は之を使用していたのであろう。堅牢である為遺品が多いのである。

八、通信運搬に関するもの

これも報告が比較的少なかった。

一、運搬具

手籠　**目籠**（メケエ）などとよぶ。桑などつんだり、野菜物など畑からもって来るにつかう。

背負籠（ショイカゴ）大形な籠で背負って運ぶ。落葉など。

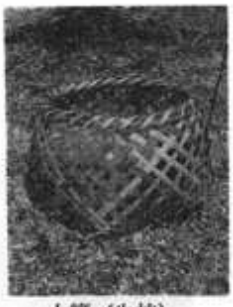
手桶　水類を普通手にさげて運ぶ時に用いる。天秤にかける時もある。

天秤（テンビン）二つの荷を両方にかけて、肩にのせて運ぶ棒、しなうように出来ている。

さげ　天秤用の深い桶、竹の長いツルがついている。水、肥料等運ぶ。

ショッコ（背負子）岩室の中村広治氏方からの報告、ついている縄をカッチニ縄という。この荷背負い具は現在も使用している。

尾合の小林きみ氏方の荷背負いは普通背中に当る部分は藁縄で痛くないようにできているのを、板にしてあり、且つ石油罐の大きさのものがそっくり入る様に構作してある。つまり、自家製背負い消毒器である。



大籠（生枝）
（阿部孝撮影）

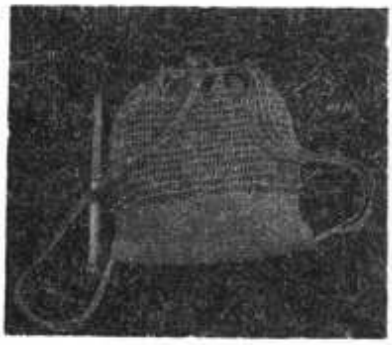
手　籠（生枝）
（阿部孝撮影）

運搬消毒具（尾合）
（今井善一郎撮影）

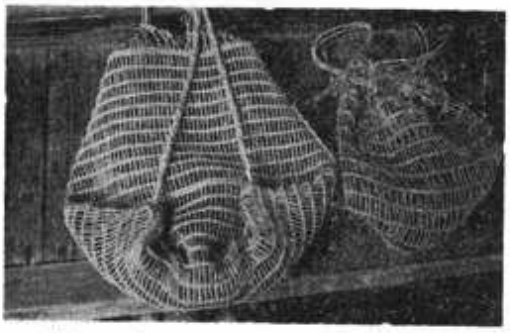
肥だめとさげ（生枝）　（阿部孝撮影）

しょっことかっちに縄（岩室）
（近藤義雄撮影）

ビク　之は芝を綯って手製したナップサックの原形。丈夫で美麗であり、内容品も一目判然して忘れ物等にもよく、非常に役立つ背負い袋である。村内各地に見出されるが、この一例は尾合鱗木茂林治氏方のもの。



ビク（生枝）　（阿部孝撮影）



背負いびく（尾合）　（今井善一郎撮影）

荷鞍（岩室）　（近藤義雄撮影）

荷鞍　馬用の荷物鞍、馬のいない現在は稀らしい遺品になった。岩室岡村雄二氏方のもの。今は荷鞍を作り、修繕する人もいなくなった。

荷車　昭和初期迄は殆どこの車を人が、曳き、より大形の長柄のものを馬が曳いたのが重運搬の主要具であった。岩村の中村卓郎氏方のもの。

籠　これの使用時期は不明であるが、比較的最近迄用いられたというのは、このカゴは病人専用のも

荷車（岩室）　（近藤義雄撮影）

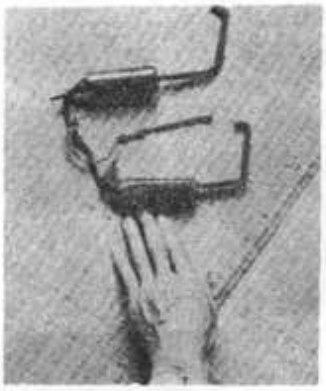
かご（生枝）　（阿部孝撮影）

のであったからである。或は元来は昔の乗物の遺物であったのを病人用にしたのかもしれない。大きさは、高さ九五糎、上部縁一一〇糎、横六七糎。下部縁八〇糎、横六五糎ある。生枝の中村佑氏方の報告。

九、団体生活に関するもの

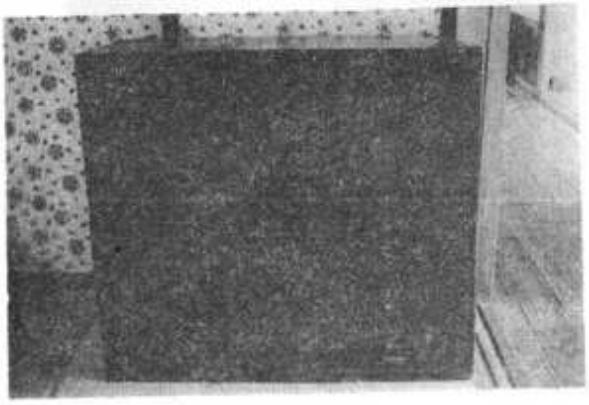
これは岩室の例だけ僅か報告があった。

鎮守の鍵　岩室には二個あり、一つには鍵の柄に「諏訪大明神」とあり、他の一つは「保多賀大明神」とある。それぞれの社の名前である。



鎮守の鍵

区の鈴



長だんす（何れも岩室）（近藤義雄撮影）

区の鈴　真鍮製の首のふれる鈴、最近迄区の集合の合図に使用した。今は有線放送ができて鈴は不用になった。

区長箪笥　区有の文書を入れておく、区長が代れば引きゆずる。現在でも使用している。

区長提灯（岩室）（近藤義雄撮影）

夜番の番札と拍子木（高平）（関口正巳撮影）

区の提灯　之は区の行事のある時に使用する。又火災の時など区長がつけて出て、自分の所在を表示するわけである。

共同葬具　岩室には共同葬具のある部落があり、葬式の御輿は之を使用する事になっている。

外に高平に次の例が報告になっている。

夜番の番札　之もどこにもあるものであるが、火の番の為め柏子木をうって夜警する。その順番を書いた札が廻ってくる仕組になっているのである。

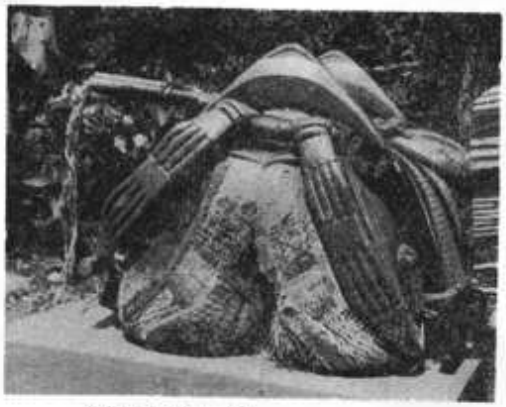
十、儀礼に関するもの

行器（ほかい）これは幸、不幸の際赤飯、餅等を入れて他家（その家

が当事者）へ贈る道具である。建築の建前祝には餅、祝儀の時又葬式の時等は赤飯を贈る例がある。下古語文からも報告があったが、写真の例は尾合生方伊雄氏方のもの。

行　器（ホカイ）（下古）
（佐藤清撮影）

飾馬具の腹掛け（上古）



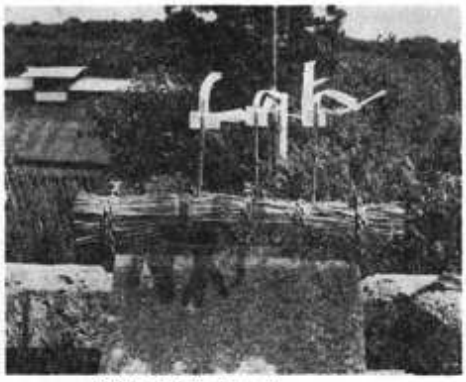
飾り荷鞍（上古）
（阪本英一撮影）

祝儀荷鞍　馬の鞍であるが特に結婚式にのみ用いるもの、化粧荷鞍で、赤青等の色彩も美しく、金具も光って居る。結婚の時は鞍の両側に箪笥をつけ、中央に花嫁が横坐りに乗っていったという。之に付属した腹がけもある。勿論しりがい等も残存している。共に上古語父増田茂樹氏蔵。

十一、信仰行事に関するもの

幣帛類　尾合付近の所見では屋敷稲荷の幣帛は屋根の棟上に立てる習慣がある。自製のもの。

祭供品　尾合鶴淵とり氏方には神様の太刀として長大な刀身が蔵されている。全くの供物である。尾合尾清という銘がある。



稲荷の神幣（尾合）
（今井善一郎撮影）

神祭用　太刀銘の部分（尾合）
（今井善一郎撮影）

神祭用の長い刀（尾合）
（今井善一郎撮影）

神棚にダルマを上げる風習は上毛の他地と等しくこの村にも行われていたが、猶、高平には小祠の内にもだるまが上げられているのが見られた。

建前の祝柱（高平）
（関口正巳撮影）

（絵馬尾合三柱神社）
（今井善一郎撮影）

盆の高灯籠　高平には新盆の家では戸外に杉の高竿を立て提灯を掲げる風習がある。

建前の幣立　建築の時、建前の際棟の上に丸扇形の祝飾のついた幣束を立てる。この地方一般の例である。写真は高平所見。

絵馬　神社に絵馬を上げる習慣もある。尾合の村社には大型の見事な絵馬が見られた。可成古いものであった。

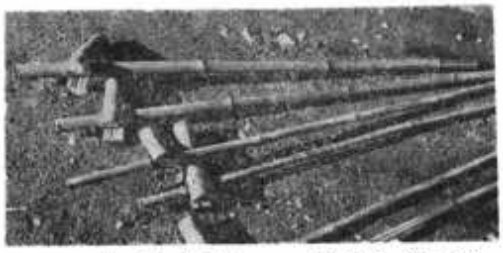
十二、娯楽遊技に関するもの

この例も少ないが左記少例報告になっている。

竹馬　尾合所見。

子供そり　尾合及び高平所見。

いずれも雪の日の遊び道具である。



竹　馬（尾合）　（今井善一郎撮影）

箱そり（子供用）尾合
（今井善一郎撮影）

子供そり（高平）（関口正巳撮影）

雪かきと子供そり（高平）
（関口正巳撮影）

資料

白沢村民俗関係資料

○三騎石

大字生枝の数坂峠の中腹に三騎石と云うのがある。文治の昔九郎判官義経が、兄頼朝に追われて再び奥州に赴き秀衡に投ぜんとした時、主従三人が此石の陰より谷間へ逃れたと云うので、今も道行く人が小石を拾っては其上に積み重ねて、之をかくしてやろうとして居る。其側に蹄溜と云うのがある。義経が馬の蹄跡に溜って居た水で咽喉を潤したので、それ以来どんな旱天にも干た事が無いと伝えている。只此の前で倒れた馬は快復しないと云って今に恐れられて居る。

それから東村の平川には義経主従三人の木像を祀った判官堂があり、判官井戸や義経の腰掛石がある。又片品村の東小川には弁慶の下駄の跡だと云う、二の字形の凹の付左右がある。更に奥へ行くと赤城根村根利山には、義経が滞在したと云う公屋敷がある。尚池田町下発知には義経公の栗の借用証文があり、花咲峠を越えたと云う千貫松の伝説がある。思うに鎌倉よりの追手を迷わさんが為に、幾組かに別れて何れか真の義経であるかを知らしぬ策に出たものであろう。

三騎石谷深くして霧を吐く

○田植地蔵尊

大字尾合の禅定院にある本尊は、延命地蔵尊にして丈三尺の厨子入にて、弘法大師の彫刻と伝え、世に開眼読経の地蔵と云って、名高いものである。今日は田植えで忙しいが人夫が不足して困ると云って居ると、何処からともなしに来ては手伝って行く男がある。それが何時になっても賃金を取りにも来なければ何処の人とも解らない。そういう事が何時になっても賃金を取ににもこなければ何処の人とも解らない。そういう事が幾度となく繰り返されたので、だんだん不思議な噂が立つようになった。それに気付いた連中がそっと跡をつけてみると、何時もお寺の門前で見失って仕舞うのである。或る日住職が朝の御経の時に、御像に泥が付いて居るのを幾度も掃除した事もあるところから、是は本尊様か俗人の姿となって我々百姓を御救い下さるのだと、それから誰云うとなく田植地蔵と云う様になった。昔の開山は慈覚大師で開基は葛原親王である。又小児の虫封に霊験があるので遠方から参詣する者が多い。

○化物石

大字上古語父の道端に、高さ五尺、長さ二間にも余る大石が在る。時代は未だ此所か上組下組と別れなかった貞享以前の事である。紅葉も己に色褪せて、芒の穂の中を狐の嫁入行列が通ると言う頃の事である。人家を離れた原中に魔物の蹲った様に大石、側を通るとなんだか小川の流れる音迄がヒソヒソと話でもしかけられるようで、小雨の降る晩等通り掛ると身震する程淋しく、誰もがなるべく石の側を避けては山の根腰の方を通ろうとするのである。

或る夜庚申待って若衆が集まった時の事、話は偶々化物石の事に移った。衆議の結果は、剣道修業中の若者が化物退治に行く事に決した。而し相手は神変不思議な怪物である。失敗してはならぬと色々工夫を擬した。夜は次第に更けた時分はよし、いざと言わば抜手を見せた見事切捨ててやろうと、伝家の宝刀鞘を払って其侭肩にして通り掛った。果して闇の中から何物か冷い物が顔に触れた、間一髪を入れず、紫電一閃!!確かに手応えがあった。返す刃に怪物の本体と瞰む大石目掛けて五大刀、六大刀切付けて帰った。化物退治をしたと、血の付いた刀を提げて飛び込んだので幾つかの提灯が現場へ駈け付けた。見れば、怪物の手だと思って切ったのは芒の

だ。夜な夜な丑満頃になると露を含みて重くなり、自然に道へ垂れ下がるのであった事が判った。側に血に染っ人の耳が一つ落ちて居た。之は剣道の先生が肩にした抜身で切付ける時に手先が狂って、自分の耳を切り落したので刀に付いた血も之だと判った。斯んな悲喜劇があってから化物石と言うのである。

（すると、折々冷い手で顔を撫でられたと言って気を失う人や、命からがら逃げ帰った人もあった。）

春の朧、秋の夜長を上下と遠く隔てた若い者同志が、互に人目を避けて恋を語るには屈強の場所だった。夜更けて通り掛った朧病者が之に驚いて逃げ出したのが怪談の因となり、若者同志は又之を幸に永く甘い恋に酔った事であろう。

大石は只黙しけり朧月

○ 米山の湯

大字下古語父、昔も昔ズーッと遠い神代の頃から古語父山の麓に、滾々と湧き湧るる温泉が在った。此恵まれた地に生れ住む人達は、朝は星を頂いて出て夕は月を踏むて帰り、田に畑に終日稼いだ体を自然の霊湯に浸し汚れを洗い清めて、楽い夢を結びつ、老いも若きも又、輝かしい明日の希望に燃えつつも互に喜び会う桃源郷であった。此湯番をして居る年寄夫婦に只一人の娘があった。美人と言うではないが、田舎にはめずらしい何となく垢抜のした愛嬌者である。年頃に成り多くの若者達の目は何時となく彼女に注がれた中には言い寄る者も数あったが、柳に風と受け流しては居た。恋に狂うた一人の若者が遂に自分の恋の叶わぬのを恨むで馬骨を湯壺へ投げ入れた。神の怒にふれたのか、忽ち湯は冷えて水となり、加持祈禱も効なく、昔の湯には戻らなかった。

大正十二年に地主の重太郎さんが之を汲み込むで沸湯を始めた。神経痛、リョウマチ、に効が有ると言うので繁昌する、今に湯船と言う地名が遺って居り、享保十二年小林権平の建てた湯薬師の石祠が在る。

恋の米山灯が見える稲も孕むた夕月夜

○ 雲谷寺の鐘

大字高平、明けても暮れても戦の絶間が無かった或る日の事、鎧を着て七つ道具を負った弁慶坊がやって来た。門を這入ると峯の鐘楼を目差して駈け登り、掛けて在る大釣鐘を取り外して駈け出して行った。さあ大変だと思ったが誰にも手も足も出せない。漸く過ぎての事である、「オーイ其釣鐘を返してくれ」と、一生懸命に其跡を追いかけて行く坊さんがあったが、もう遠く離れたと見えてとうとう追付く事が出来ず日は暮れてしまった。腹はペコペコになって歩く事さえ苦しくなった、幸い道端にある農家を見付けて粟飯を振舞ってもらい、すごすご帰ったと言う。それが縁となって今も下久屋に檀徒が残って居る。後になって本尊延命地蔵尊の口の辺に粟粒が付いて居たので、之は本尊様が若い坊さんの姿と成って釣鐘を取戻そうと、其跡を追いかけたのだと言う事が解った。其後、鐘は信州の諏訪湖に沈められたので、天気の好い日には水底に此鐘が見えると言っている。

沼田加沢記には文明五年高平山雲谷寺の鐘の銘が載せてある。思うに臼根神社の鐘と共に武田勢の為に持ち去られたのが事実だろう。元禄十一年の書上帳には薩摩国雲谷寺末とあるが、長州禅門の逆修塔から考えても本寺と末寺が同名な筈もなく、周防国天花山雲谷庵こそ深い関係があると思われる。

○ 岩坂の天狗

大字平出と上久屋との間に岩坂と言うのがある。古元の大藍之牧と久野の牧との自然界をなした処で、俳人松永乙人が「岩坂や霧に辷る杖の跡」とよんだ様に、羊腸たる小径は辛して人馬を通するのみであった。苔生した石段高く十二神社があり昼さえ何となく淋しく、昔から天狗が住んで居て時々人を驚かすと言うので、誰しも日が暮れると通る人は無かった。

偶々止を得ず用事が出来て通り掛ると、夜

中に絶頂で鶏が啼いたり、大木を伐倒す音がしたり、地響を立てて岩石を投げ落しかと思うと後では何もなかったりする。

ソンナ馬鹿な話があるものかと、血気にはやる若者が度胸試しに行ってみると、闇の中に建てである道標の文字判然と読める不思議だと気がつくと、それがソロソロと自分の方へ倒れて来るので気味が悪く、とうとう逃げ出したとか、又サラサラと行手の崖一ぱいに十三仏の大きい掛物が下がって来たとか、道路の真中へ大木の玉切ったのが幾つも転がっているので、邪魔だから一つ側へ片付けて通ろうと力を出して抱き付くと、突然其木が笑い出したので腰を抜かした事もあったと言う。

投網する人が此下の淵へかかった時、向うの岸で「オーイ」と呼ぶので、之は同じ投網仲間が来て居るだろうと思う中に、自分の腰にあった魚籠の中から「オーイ」と返事をしたかと思うと、大きい光の玉が飛び出してお宮の上で消えたとか、中には宵闇に来た男が事もあろうに饅頭が一個かかった。之は天狗の悪戯だろうと又一網やると相変らず饅頭なので川へ捨てて逃げ帰った。後になって之は川向うに葬式が出来たので、それに使う饅頭を運ぶ荷馬が土橋を踏み抜き川へ落ち込んだのだと言うようなナンセンスも含んでいる。

又管田の石投天狗だとか、南越生の薪伐天狗だとか言う様なものがあって、石を投げたり木や竹を伐る音をさせたりする。辞典等調べると、天狗は深山に棲むと曷う想像上の怪物で、大天狗は山伏の形をなし鼻高く翼を有し、小天狗は烏に似て木葉天狗と言うと書いてある。してみると、世間に伝うる怪談が暗示となって、種々のな幻覚や錯覚を起した精神上の作用と、好事家の作り話も加わり伝えられた事と思われる。

天和の昔、沼田城主真田伊賀守信利が、沼須平を田にしようと此山裾に設けられた用水路がある。ソレが大正元年沼田大間々線改修工事の際に穿拡げられて、今は定期の自動車が通ずるようになった。

框の実の石段を落ちて転げ行く。

○ 榎の木様

大字尾合字安場の山林、時は明治十年頃の事である。鵜淵治良七と言えば旧高六十石宗家十右衛門と共に、神社にも寺院にも相当力を尽した旧家であったが、今は衰えて日々の生活にも差支える程となった。或る夜の事何処よりともなく一人の女神が枕元に顕れ、夢の中に告げて言うには「是より乾の方に当り汝所有の山林中に夫婦の榎の木あり、吾は其中に棲める者なり、汝等我を祀らば福を授くべし」と、明朝起き出て、妻子に語れば不思議の事なりと、皆打ち連れて林の中を探し求めけるに果して異様の榎の木があった。

其形土より一足許り上りたる所にて二本の幹合さりて一本となり、恰も人の抱え合えるが如くにして其間を子供の潜り抜ける程輪になりたる所あり、されば茨草を刈り払い陰陽師を招きて祭の式を行いけるに、我も我もと聞き伝え集り来れり、諸の願を掛くるに感応著しければ近郷より参詣する者日に数十人に及べり、然れば米は一家の食に足り銭は塩味噌を買うて余あり、裕ならずと雖も日々の生活に不自由なきに至れるは、治良七が日頃の正直を神の恵み賜いしならんと人々に語り合えりと言う。其後幾春秋を経て今は其跡すら定かならず、只僅に植物崇拝に関する物語を残すのみ。

木の実さえ豊なりけり夫婦榎

○ 片品川の筆草

長閑な春の日を浴びて片品川の渓谷をフラフラ入り込んで来た絵師があった。耶馬渓にも勝る風光明眉の地である一つ彩管を振って仕上げようと努めた。漸く左を書くと右に霞が掛って見えなくなる。右から書くと又左が隠れて仕まう。翌る日来て書き始めると又うまく行かない、次の日も思うようなのが出来ない。トウトウ彼は絵筆を投げ捨てて立ち去って仕まった。其れに根が生えて筆草になったと言うている。

高山正之先生の北上日記にも片品川の筆草と言うのが書いてある。

筆捨てて絵師もありとか春霞

○ 太郎三人様

大字生枝、徳川家康は方広寺の鐘に事寄せて慶長十九年大阪城を攻めた。沼田城主真田伊豆守信之は父昌幸と意見を異にし徳川方に加勢した。是が為、それぞれ領内に夫役の割当があったので村内一同を集めて幾日も評議したが、扨て誰も好んで応ずる者はなく、結局生枝の石高五十三石の半分を与えると言う約束で、浪人者の太郎が行く事に成った。翌年春両軍の和議が整って無論死だと思った太郎が戻って来た。さあ村内は大騒ぎだ、村高の半分を取られては皆が立ち行けない。一層の事に、奴を殺すより外に策は無いと、其所で名主覚右衛門の宅に偽って慰労の宴を催した。太郎も身に危険の迫るを覚って逃れようとしたが、遂に大勢の為に追いかけられ西原に於て切り殺された。

早くもそれと知った妻は幼児を臼に入れて搗き殺し、自分も自害して果てたのである。それから三年間と言うものは此村だけが作物が稔らず、名主や役人に成った者えは頻りに災難がつづいたので、之は太郎達三人の祟りであろうと石の祠を建て、毎年三月十日に祀る事にした。

○ 聖が坊

大字尾合、幾日となく降りつづく大雨に風さえ加わって片品川には濁流が渦巻き流れ、水は日に増し勢を加え、遂には田を呑み畑を浸して、果ては人家を押流そうと迫って来るのである。人々が如何に立ち騒げばとて其甲斐なく、崖は次第に崩れて行くばかりなので、村人達は只此の上とも万一の場合を慮って昼夜怠らずに、逃げる用意と神仏の力にすがる外なかった。

是を見かねて多くの村人を救うべく、聖須法印は身を此の淵に沈めて治水を祈り崖の崩れを永久に保護しようと誓った。其の誠の天に通じてか、不思議にも流れは急に向を換えて其侭安全となった。村人は其徳をたたえて今に聖が坊と言っている。禅定院の過去帳を見ると、四世聖須法印寛平八年九月寂としてある。それから千有余年崩れかかった崖には血に燃ゆる聖須法印の義心其ものの様に紅葉が色彩って、追憶の念を呼び起すのである。

○ 打伏の森

大字高平、時は正平二十三年（六〇〇年前）の昔の事、足利勢の為戦破れて新田方の大将二人、此所迄は落ち延びて来たが、兄は遂に流矢に当って馬より打伏に落ちて戦死をした。之が打伏明神即ち新田義宗公である。弟は片品村土出迄逃れ其処で終った。之が山妻在明神で実は従弟脇屋義治である。雪のチラツク頃足跡隠しと言い、私言条と言うて其日は小声で話すと言うて居る。

里人義宗公の祠を建てて打伏明神と称し、馬にて此前を通行する時は必ず下りて礼拝する事として居る。雲谷寺境内に五輪の塔が在り衣冠束帯した木像も在る。

尚附近には幾つかの砦跡もある。

堀幾つ崩れ残りて笹茂る

○ 古語父山の鬼女

天正の頃、沼田盆地には武田と北条との争いが層々あり、北条勢が東入に乱入して在々の民家を威し、妻子財宝を掠め作物を損したから、住民は皆恐れて山へ逃げ籠った。或る日古語父山に煙の立ち登るを見て敵大勢が押寄せて来た。此所は只女子供と老人ばかり四、五十人なれば驚き悲しむを、立岩清岸院の殳鳳が母のぶと言う者之を静めて、薪二束を提げて峠の上に立ち現れ、帯締め直し之に腰打ちかけて待ち受けた。敵の駈け上がるを見て、「我等如き賤き者三人、五人捕えたとて酒代にも足り申さじ引返されよ」と言えば、「憎き女め先ず奴より引捕えよ」と勇みかかるを、手頃を取って打ち込む薪は矢鳴り谷に響き、髪は乱れて風に逆立ち恰も夜叉の形相なり、不思議の大力人間業とは思われず、真

先に進みし者を打ち倒し続いて二、三十本打つ内に、木の根に距き枝に刺され蜘蛛の子を散らすかの如く、見苦しき様にて逃げ去った。

草木は血に染り投げたる薪は深く地に突き刺さりて抜く事も出来ぬ。「ソレ古語父山には鬼女が居る」と、恐れて再び近寄る者もなく、為に一同恙なきを得たと言う。今も清岸院には、のぶ女の洗濯石と言うのがある。

○ 河童

片品川の右岸尾合から多那へ通ずる栃又橋の袖に、紺碧の水を堪えた観音淵と言うのが在る。或る日の事近所に住む彦爺さんと言うのが其上の林で薪伐をやって居た。一汗かいてヤレヤレと昼前の一休み切株に腰を下して先づ一服と煙草に火を移した。散り行く紅葉に俳句の一つもと眺めて居ると、何時の間にか大きな蜘蛛が一つ現れて、手と言わず足と言わず絡み付けてある。妙な奴だと見て居る中に煙草の煙に巻れた故か姿を隠して仕まった。ドレモー一仕事と、手足に絡んだ糸を測の切株に巻きつけて仕事に掛ろうとすると、ソレがだんだん太く成って来其時である、下の河原で「ヨーイショ」と大声を出したかと思うと、其切株が根抜きになって下の淵へ引込んだのである。扨は河童の奴め蜘蛛に化けて己を引込もうとしたな、笑止笑止と崖から覗き込むと、淵に落ち込んだ切株の浪に喰って磯に打ち上げられチョコンと岸に座っている河童小僧の皿頭が見えたと言う。ソレカラは誰も彼も油断して河童に尻を抜かれるなと、近寄る者は無くなったと言う事である。

河童は四、五歳位の童子に似て面は青白く、嘴尖り背に亀甲あり足には蹼があって、頭上に皿の凹があり常に水中に棲み時には陸に上がる事もある。小児の遊泳中に溺れるは之に捕り殺されると言って居たが、是も想像上の怪物だとしてある。

○ 野地穴の狐

大字上古語父、笄山の麓に沼田横堂二十四番の札所が在る。金井与惣左衛門が建立と伝え千手観音が祀ってある。

古語父山月も影さす池の入、深き誓に我もらすなよ、堂の側に穴が在って年経た狐が棲んで居るが、少しも悪戯をしないで大層皆が可愛がって居た。或る日の事、源平爺さんが通り掛って見ると、子狐が穴の端へ出たり這入ったりして居るので、之はお産があったのかヤレヤレお目出度い事だと、爺さん自分の事のように喜んで家へ帰ると婆さんと相談して、赤飯を炊き油揚やお豆腐を買って行って御馳走した。

二、三日経ての夕方山からの帰り途、何時の間に出来たか立派な一構が在る。爺さんが見とれていると、戸が開いて出て来た女房が「私達今度近所へ参りました者、又何かとお世話になるばかりです、ドーカ一寸御立寄下さい」と無理やり家へ引き入れて「何も御馳走はありまもんがマーお上がり下さい」と酒が出る、肴が運ばれるという応待ぶり。フト何を気付いたか「お爺さん済みませんが一寸用事を思い出したので其所まで行ってまいります。速くに戻って来ますから留守をお願い致します」と出掛けようとして「只奥の座敷だけは見ないで下さい」と念を押して行きました。サー見るなと言われると見たいのが人情だ。外に誰が居るではなし、一つ見てやろうと、襖をソッと細目に開けて覗くと娘が一人針仕事をして居る。知ってか知らぬか此方を向いての笑顔、それが又頗るの別嬪である。漸くして爺さん元の座敷へ戻り知らぬ顔の半兵衛をきめ込んで居ると、間もなく女房が帰って来た。

「すみませんでした、サーお酌致しましょう」と幾度か盃を重ねた後に「お爺さんあれ程妾が注意して置いたのに覗きましたね—。何を隠しましょう。彼は此家の跡取娘です。婿を探して居るのですが未だに見付かりませんので困って居るのです。見られた上は仕方がない」どうでも婿に成って下さいと強硬な談判。「決して覗きはせぬ、知らぬ、存ぜぬ」と言うても承知しない。結局偽よと、大胆にも婿入する事に極めた。スルト忽ち何処から

ともなく大勢集まって来て、入浴させる髪を結わせる、竜紋の上下を付けて鏡に向って見ると、成程馬子にも衣裳とやら自分ながらも見違える程若々しくなった。娘も衣紋を整えて座敷に着く。飲めや唄えの大騒ぎだ、高砂、四海波の謡も済んで、愈々取結びの玉の井が謡われる事になった。

一方家では爺さんの帰りが遅く夜が更けても戻らないから心配した。婆さんが提灯を点けてだんだん来てみると、爺さん狐に化かされたのか、畑中に行儀よく座って居る「爺さん何うしたのだい」と声かけると、驚いて「助けて呉れ」と逃げ出した。婆さん一生懸命追い付て、背中をウント打ってやると、やっと正気に戻った。見れば、昼の仕事着のまま元の白髪交りの爺さんに成って仕まった。「あの時は面白かった、楽しかった、まるで夢のようだった」と爺さん鼻水を垂しながら、後になっての話。ソレカラ誰言うとなく、野地穴の浦島狐と言って評判になった。狐が恩返しに爺さんを喜ばしたという話。

○ 金屋の長者

大字岩室、大崎の平へ何処から来たか、鍛治を業とする者がやって来た。小屋を建てて毎日砂鉄や鉱石を求めてたたらにかけ、鉄を求めては農具を練える事を仕事として居た。それが何時の間にか金や銀の鉱石を掘り当て沢山の富を貯え、都へ上って長者の免許を得た。

長者免許の事　昔就天気令旨依執達仍手如件　庚平三年正月　左小弁教通　右小弁師家　毛野国　金屋長者へ

サーこうなると昔の事は何時か忘れて、酒池肉林と栄華の日々がつづいた。今年の春も京都へと上がった跡の事、山火事が起り折からの風が加わって、アレヨアレヨと言う間に燃え広がって、流石の邸宅も瞬く間に焼け尽して仕まった。

跡へ帰って来た長者は「我過てり僅かの財宝に心奢りて己れの務を管りた己れは神の咎を受けたのだ」と悟り、朝日さし夕日輝く九十九折岩黄金千枚後の世の為、と言い遺し、又元の野鍛治と成って立ち去ったが其侭帰っては来なかった。其後幾星霜何処に金が埋めてあるだろうと、探し廻った人々もあったが未だに見付からず、只峰のみが残って居る。

只天和元年真田伊賀守が改易となった同二年、代官所竹村惣左衛門熊沢武兵衛支配となり、二月加沢平次左衛門が調べた沼田領品々覚書には、岩室大崎山是は銀山、先年は盛なりし様伝承等が、伊賀守領地の内は後に出申さす候、と記してある。

○ 六算の神

昔、唐天竺から我日本へ渡って来たと言う。所謂三国伝来の金毛九尾の狐は、鳥羽帝の御代に女官と化け、玉藻の前と名乗って宮中に在りしを、安部泰親の為に調伏せられ遂に下野国那須ガ原に追い詰められて、殺生石と成ったのを玄能和尚に打ち砕かれ、其破片が関東地方に飛び散り六算の神となって世人を悩ますのだと伝えられ、

五七か肩に二六腰四腹八股一三か足、九を頭として、年令九より多き時は其数を除きて残りたる数により計算して、六算除を行うのである。

○ 小豆研き

村の端に在る水車小屋の附近、虫の啼く声も止み木の葉も落ち尽し、モウ粉雪のちらつく頃になると「ザックザック」と小豆を研くような音がする。又小豆ときが出たと言うので通る人も少なくなる。

「小豆研うか人取って喰うかザックザック」と、村の子供達が唄うようになったが之は専ら鼬の仕業だと言の評判である。

○ 火柱

狐火に似たようなもので火柱と言うのがある。何処とはなく突然燃え上がって漸くすると音もなく横に倒れて仕まう。すると、其方向に当って二、三日中に火災が起る等と言われているが、之も鼬の仕業だと言うのであ

る。

○ 人　魂

昔から一般に、死ぬと地獄か極楽へ行くのだと霊魂不滅が信じられていた。よく人が死ぬ二、三日先に魂が抜け出して、夜中に其家の屋根からフラフラと光を放して迷い出すのを見た人があり、又二つ並んで通った事もある。人魂の他にも凄い光を放ち尾を引いて、空飛ぶ円盤の様なのを見る事もあると言う。又人が死ぬと、魂がお寺へ行くとも言って居る。本堂の戸や障子に突き当った様な凄い響がしたり、女の死んだ時には勝手元へ来て音がすると言う。

寺男に聞くと、今でも人が死ぬと速く何か死らせがあり、稀には死んだ人の姿を見た事もあったと言っている。

メーテルリンクの「未知の賓客」に論ずるように、未だ学術上満足な説明は出来ないが、霊感に依る不思議な事実は、今後の精神学界の研究に待つべきなのである。

○ 雨乞と天気祭

昔は七、八月頃になり旱天が続くと、何処の村でも雨乞と言うのをやった。此所でも上郷の高平、上古語父、下古語父は雨乞山に、生枝は想台山に上って、薪木を集めて千駄焼をなし、下郷の岩室、尾合平出では神社に集まり、神官又は僧侶或は山伏を招き八大竜王の旗を建て等して、榛名山や赤城山へ使者を立てて、竹筒え湖水を汲み来りて祭場に撒布し、若衆達は川端で水を浴びて雨を祈るのである。水を貰いに行った者が途中で休むと、其処で雨が降って仕舞と言うので、途中へ又迎いが出て居て休みなしに運ばれて来る事になっている。

又永く雨降がつづく時には、助太刀と言って杉の葉を以って人形を作り、小皿で目を作り天を瞰んで立たせ置き、反対に天気祭と言う祈禱を行うのである。

今ではモー廃れてやって居る処もなく、只老人の語り草にのこるのみである。

○ 狐　憑

狐につかれたと言う人は布団を被って食物したりして、之は病人が食うては無く皆狐が食うのであって、俗には其人の腸迄も食い尽す等と言って恐れたものだ。ソレデ坊さんを頼んで護摩を焚くとか、神官に引目の法を行って貰うとか、皆で掛って病人を縛って置き、硫黄や唐辛子を燻してやると、狐が放れて正気になると言って居る。又狐は女や友達に化けて一夜中野原を引き廻されたとか、提灯の蠟燭を吸い取られたとか、又狐を苟めた仇討に赤子を掻き殺されたとか、炉に入れて焼き殺されたと言う話もある。

学者は狐憑は精神病だと決めて居り、化されて迷い歩ったと言うのも詳しく言うと、誰が体にも持つ組織上から来る一つの癖だと解いて居る。従って真直に歩く心算でも幾分づつか右とか左に片寄るものである。試に目隠をして歩行させて見ると、何時か円く元の位置へ戻って来るものである。夜中に広い野原を迷い歩くのも同じ理屈だと言う。而し東村の薗原では女に化けて来た狐に一晩中野原を引き廻され、朝に成って小川を渡ろうとする時に狐の姿が水に映ったのを見て、之を捕えて帰ったと言う実例もあるので、一概にそうばかりとも決められない。

○ 火 の 玉

夕立雷鳴の時よく現われる火の玉と言うのは、球電光と言うので人魂と言って居るのも同じだろうとも言う。諸所外国等の例を拾って見ると、巨大の火の玉が現われ、頭の上一丈程の高さを通って、側の木に当り皮を剝り附近の家へ飛び込み大分焦したとか。火の玉が落ると一処に道路で幾つかの玉となって横道へ入って消えたとか、台所の窓から提灯程の金色した玉が転げ込み、戸が締って居るので突き当ると、五尺も昇って其割目から外へ出て鉄砲を連発した様な音がして消えた。又濡で少女が鶯鳥を追い込もうとしていると、三尺程離れた処へ突然火の玉が現われ、足に

突き当ったかと思うと、着物の裾から這入って襟へ抜け、空中へ飛び去り少女も一時気絶したが、直ぐ意識を恢復したが体を調べてみると、膝の下から胸の中央にかけて掻き跡が付いて居り、其両側に黒い線がうねてあったとの事だ。

落雷したと思うと、火の玉が煙突から室内へ転げ出し、三、四人話して居た中央を転り側の木製機具に突き当り毀して、次の室へ入って消えた。跡に硫黄のような臭が残った。中庭に火の玉が三つ現われたが、二つは静かに地面の上に運動し、一つは鉄棒に当って跳ね返されると、二、三回転がって方向を変え廊下に入り、階段を下りて戸の間に入り錠前を毀して大穴を明け、往来へ出て二つに裂れて消えた。又庭から屋根裏へ昇り、火を付けて非常な音を発して消えた。

蒼い火の玉もあって、足下へ来た時には、頭をくるりと曲げた小猿のようで人に戯れるように見えたとも言って居る。

○一　本　松

大字上古語父、塩原太助が志を立て江戸に向わんとして、愛馬の青と泣き別れた一本松は、昔八百比丘尼が植えたもので、地上より真直に二丈ばかり枝は東に伸びて恰も結びたるが如くにして穴あり、甲州勢が此所に鐘を掛けたりとて鐘掛の松とも言う。後年落雷ありて其松枯れ今立ちてるは二代目の松なり。

此辺一帯滝棚（田北）の原と称し、三里が間に坂なく橋なく馬駈として天下に誇る所である。沼田の地なるや四面山を以て囲まれ、加うるに利根、片品の二川を廻らし、南僅に十八坂の剣を以て通するのみなるが故に、大軍を以て攻むるも食糧続かず、一夫之を守れば万夫も越ゆる能わず、沼田難攻不落の名城たる所謂なり。従って米、塩は之を越後に仰ぎて東入に送り、代るに大豆を以てしたのである。

○　法螺吹爺さん

まだ明治以前繭を馬に荷せて赤城の原を越えては前橋へ行く頃の事である。定七と言う爺さんが在った。江戸へ中間奉公に行った若い頃の話である。極上等の扇子を買って戻った、「最も価も高いには高かった、何しろ一分（今の二十五銭）と言うのだが効能もあったよ。ソレハ夏の土用最中茶椀に水を汲んで此扇であおげば氷つけむし」と得意になって咄す。

又或る年、馬丁を雇って奥州へ馬買いに行って戻り「宇都宮迄来て宿った晩の事だ、夜が明けて見たら七手縄（一手縄は十二頭）引逃されて、此時は男ながら涙が溢れたよ」。

字後根に大蛇が居たと言う羅ぎに、ソレと鉄砲を懸いで行って見ると、「居た居た、雷の様な鼾を立てて眠っている。之れ幸とソット近寄って覗いて見ると、胴の周囲が三升樽程もある奴だ。鉄砲を逆手に台尻で頭を目掛けて打ち込むと、クルクとトグロを巻いて鎌首を上げ、口を開いてペロペロと舌を出して飛び掛って来そうな勢に胆を潰して、夢中で逃げ帰った其時の恐しさ、今も身の毛がよだつようだった」と、何時もこんな図無の大法螺を吹くのを得意にして居るが、別に罪のない話なので皆喜んで聞いて居たと言う事である。

○　亡び行く童謡を追うて

日に日に新しい童謡が沢山作られるにつれて、日に月に亡び行く童謡を追うて、一応調べて置くのも万更無駄でもあるまいと、玆におぼろげな記憶を辿りつつも、幾度か人にも諮って成ったのが此稿である。

「天智天皇秋の田の……」と、お祖母さんに子守られた事を考えると、又懐しくたまらないものである。（昭和六年十一月）

一、子　守　唄

坊やはよい子だねんねしろ
ねんねのお子守りゃ
何処へ行った
あの山越えて里に行った
里の土産に何もろた
でんでん太鼓に笙の笛

起き上がり小坊子に犬張子
（一に香箱　二につづみ）
ねんねんころりん
ねんねしろ

二、子守唄

ねんねん子守はつらいもの
人には楽だと思われて
雨風吹く時ゃ宿がない
人の軒場で日を暮し
ねんねんねろやい
眠れやい

三、お月さん

ののさん幾つ
十三七つ
未だ年ゃ若い
若子を生んで
だあれに抱かしょ
お万に抱かしょ
お万に何処へ行った
油買い茶買い
油屋の前で
滑って転んで
油一升こぼして
お母さんに叱られた

四、大寒小寒

大寒小寒
小僧が山から泣いて来た

五、野火

野火がついた、火がついた
あったら狐が焼け死んだ

六、兎

兎、うさぎ
何見てはねる
十五夜お月さま
見てはねる

七、烏

烏からす、とんからす
汝が家が焼けるぞ
早く行って水掛けろ
水が無ければ溜かけろ
後の烏が先になれ
先の烏が後になれ

八、鳶

鳶とんび、羽落せ

九、燕

越後じゃ米食う
此方米ちゃあ泥食う
ちいちこ、ちいちこ
ちいちこちい

一〇、雉子

きじはけんけん
山鳥やばっさばっさ

一一、鶏

とてこっこう　夜があけた

一二、蛍

ほほ、蛍来い、かんねんこい
かんねんかんねん、水呉りょ
彼方の水は苦いぞ
此方の水は甘いぞ

一三、蜻蛉

とんぼ　とんぼ
そこらに止まれ
明日の中に
飴買って呉れる

一四、蝸牛

つのんでいろ
角を出さぬとお棚え上げて
首べったり打切るぞ

一五、山いも

坊主ぼっくり山芋
山の中昼寝して
蜂に尻刺された

一六、桃

ゆっさこっさこ　桃の木
桃がなったら呉れるぞ

一七、お正月

お正月はよいもんだ
おんぼろひいてもよいもんだ
油のような酒呑んで
雪のような飯食って
木片のような魚せいて

一八、七草

七草なづな
唐土の鳥の

日本の国へ
渡らぬ内に
ひっぱたけ　ひっぱたけ

一九、十日夜

十日夜　十日夜
朝蕎麦切に昼団子
夕飯食っちゃぁ
打ばたけ

二〇、れ　ん　げ

開いた開いた
何の花が開いた
蓮華の花が開いた
開いたと思ったら
つうぼんだ、つうぼんだ、
何の花がつぼんだ
れんげの花がつぼんだ

二一、かあごめ

かあごめかあごめ
籠の中の鳥は
夜明けに出しょうか
昼げに出しょうか
つうんつうんとつんむぐれ

二二、いっちこたっちこ

いっちこ、たっちこ高崎の
黄色い帽子の兵隊に
西郷が追われて
とことこと

二三、鬼ごっこ

鬼の来るまで洗濯でも
としょとしょ

二四、隣のおばさん

隣のおばさん
お茶呑みおいで
あとでくるのはごめんだよ

二五、酸　漿

ねんねん、ほうづき
根は先出ろ
種子は後で出ろ

二六、どんどん廻り

どんどんめぐり、こめぐり
目がまわってもころぶな

二七、ちゃんぽこ茶釜

ちゃんぽこ茶釜が煮立った

二八、あんよが上手

あんよが上手
お転びがお上手

二九、じいさんばあさん

爺さん、婆さん聞いとくれ
あかねのふんどし買っと呉れ

三〇、上り目、下り目

上り目　下り目
くるりと廻って猫の目

三一、草　履　投

あしたあ雨か天気か

三二、雪

越後のお婆が降って来た

三三、指　切

指切りかまきり
嘘をついたら
百円五厘の罰金だ

三四、泣　虫

いま泣いた烏が
墓場の団子食って
はあだまった

三五、人　ま　ね

人まねこまね
酒屋の狐
酒の粕呉れて
追ん出せ追ん出せ

三六、草　履　隠

おらがお母さん
しわんぼしわんぼ
じんじょ買ってお呉れ
近よっ近よった
遠寄った遠寄った

三七、羽　子　突

一と子に二た子
見抜や嫁子
何時来て見ても
七々子の帯を
やの字に〆て
おしゃれことんよ

三八、寄合って

赤と白と寄合って

寄合の前で屁たれた
幾つひった、十ひった
峠の山ひり越した

三九、桃　栗

桃栗三年　柿八年
梨の馬鹿奴一十三年

四〇、河原ちご

河原のお婆さん
びんたぼ出しゃれ

四一、あばよ、こばよ

あばよ、こばよ
蛙が啼くから又遊ぼう

四二、豆　煎　り

男と女と豆煎り
煎ってもいっても、生臭い

四三、お寺の縄ない

お寺の縄ない
　　チョリチョリチョリ
一尋、二たひろ
三ひろなったらお茶にしよ

四四、牛ねんぼう

牛ねんぼう、かんねんぼう
車引いちゃがあらがら

四五、あかんべい

あかんべいが十六文
皿が三十二文だ
　　×
あかちゃがべろりん

四六、てっこはっこ

てっこはっこ居たか
隣へお茶呑み行ったか

四七、土遊び

ほうとのかな
ほうとのかな
　　ほ　い

四八、福　徳

徳、福、貧乏、金持

四九、三めの子

一人、二人、三めの子
よって眠れ、雉子の糞掻棒

五〇、蜜柑　金柑

蜜柑　金柑　酒のかん
親がせっかん
子が聞かん
橋の欄干
屋根葺かん

五一、や　ん　め

やんめやんめ糞やんめ
雪隠箒で掃き出すぞ

五二、がらがらもんじゃ

がらがらもんじゃ、何文じゃ
三文じゃ未だ解らぬか
解らぬよ
足音止んだらおめつけよ

五三、あつい　や

あついや
あつけりゃ後へしゃれ
後には、はらがある
はらがあったら、かんのけろ
かんのけ棒持って来い
持って来にゃ、餅つけ
猫の尻ひっかじれ

五四、きっこんばったん

きっこんばったん水車
内の坊やがしゃっがしゃっ

五五、こうもりこい

こうもりこい、こうもりこい
草履をやるからはいて来い

五六、八釜と四釜

八釜と四釜で十二釜

五七、梅　干

梅干食うとも種子食うな
中に天神寝て御座る

五八、よいよい横浜

よいよい横浜まるやけで
東京じゃお女郎が
車挽く車挽く

五九、いいとこ

いいとこ床場の縁の下

六〇、ねんねこ坊ちゃん

ねんねこ坊ちゃん
亀の子坊ちゃん

六一、泣　虫

泣虫、毛虫

縁の下のゲジゲジ虫

六二、道陸神

道陸神の馬鹿がいて
一枚紙欲しがって
しびで尻のごった

六三、鳩

てってっぽっぽう
ごごくいていい
ととせいて

六四、摺臼

すうるすこめで
一升五合挽き出した

六五、小豆とぎ

小豆とごうか
人とって食おうか
サック　サック

六六、ふくろう

ほろすけ　ほうほう

六七、知らん看板

知らん看板
練った膏薬

六八、嫁御

嫁御、此方向け
よい物呉れる
蜜柑むいて
中味を呉れる

六九、春蘭

爺婆寝て居ろ
嫁は起きて茶沸せ

七〇、らっきょう

らっきょうらっきょう
生らっきょう
むいてもむいても皮ばかり

七一、尻捲

今日の十六日に
尻捲じんが始まった

七二、馬鹿野郎

馬鹿野郎、こけ野郎、年期野郎
そんな事で年期は勤まるか
おらんざ三年勤めたぞ

七三、ちいりこさい

ちいりこさいよ
あいこさいよ

七四、お借もの

お借もの、何んなとの
こんなもの

七五、寺

なんたら生枝の観音寺
おっかな尾合の禅定院
久屋しい急坊町田坊
岩室一番一音寺
高平田中の雲谷寺
平出平間の正眼寺

七六、ねんねん

ねんねん猫の尻へ
蟹が這い込んだ
お母さんがたまげて
お茶こぼした

七七、盆の牡丹餅

盆の牡丹餅ちゃ
甘いか酸いか

七八、夕焼小焼

夕焼小焼
明日は天気になあれ

七九、盆踊

盆の十六日に踊らぬ奴は
子でも出来たか
シオサンでも仕たか

八〇、ゴンベゴンベ

ゴンベゴンベ赤くなれ
酒呑んで赤くなれ

八一、何たらぼうし

何だらぼうしの毛のふぐり

八二、痛いや

痛けりゃ馳の糞三文買って
三年つけろ

八三、トーケン

誰かさんの頭へ
トーケンがたかった
ソレ落すと坊主に成る

八四、てっちゃん

てっちゃん手が悪い
足がない
達磨の形によく似たり

八五、多那村たんぼ

多那村十三軒
流れちゃ困る
田圃の土手では
イチゴが交んで
片足もがれて
大騒ぎ

八六、うんだら

膿だらつっ切れ
やんだら医者に掛かれ

あとがき

白沢村民俗関係資料として、白沢村尾合在住の郷土史研究家鶴淵伊勢松氏の調査報告の中から伝説、わらべうたを主にその一部を掲載した。鶴淵氏は、白沢村誌をはじめ、わが赤城根村、沼田町史などに関与し、意欲的な郷土の研究を長年にわたり続けている。

索引

あ

アーボヒーボ　一五九
合図の鈴　七二
会津街道　一五五
青鬼　一五三
青鬼・赤鬼　一五六、一五九
青　大将　六
赤い着物　一四四
赤いチャンチャン
赤　鬼　一五三、一五五
アカガエル　七
赤　城　六〇、一六九
赤城神社　八八、一〇〇
赤城の大洞　一〇〇
赤　城　山　一、一四七
赤子の誕生　五
アカ　ザ　七
アカシヤの花　七
あかねざらし　一五〇
アガリ鉄　二
アキマ様　一六九
秋　蚕　一五五、一五六、一四四、一五五、八〇、一六六
秋漬けた大根　一六一
アキの方　一五九
秋の収穫　一四一
秋の彼岸　三
秋のふるまい（振舞）　一四三、一五五、一五六、八〇、一四〇、一六六、一九九
秋　祭　り　一五五、一三、一五一、一七七
悪　魔　一六八
―　除　け　一九九
悪　夢　一五五
アゲイワイ（あげ祝）　七七、一八八
朝　雨　一九九
朝　祝　一五五、一五四
麻うらぞうり　九
朝恵比須　一七九
麻　裃　五五
朝　客　一六八、一九九
朝　霧　一九九
朝草刈の餅　一四四
朝　ゲ（朝げ）　一三、一六一
アサヅクリ（朝づくり）　一三、一四七
朝はん（朝飯）　一三、一三
朝　風　呂　一五五
朝　祭　り　一六一
朝　め　し　一三
朝　湯　一五五
足ごしらえ　八
アシナカ（あしなか、足半）　八、九、一三三
アシビイタ　一四七
アジビキ　一四七
アジロ天井　一三五、一五五
アズキ（あずき、小豆）　一三、一四、一七、一九九、一四四、一六六、一八七、一六四、一五一、一六一、一六四
アズキガユ（あずきがゆ、小豆粥）　一五五、一九九、一四、一九七、一四七、一六八、一八一
アズキゲー（小豆げえ）　一三、一四、一九九
小豆のかゆ　一八一
あずきのごはん　一九九
あずきめし（小豆めし、小豆飯）　一九九、一九七、一八〇、一八一
小豆をにること　九九
遊　び　一〇三、一五四
アタゴサマ（アタゴ様、あたご様、愛宕様）　一五五、一九九、一九〇、一九七
愛宕神社の祭　一七一
アタゴ待ち　九一
渾　名　一八五
アタマスキ　一五五
アタル　一四七
暑　け　一九九
アトミ　一九八
アネサンカブリ（姉さんかぶり）　六、七
アナップサギ（穴ップサギ）　四四、一九九
アナップサゲ　一九八
穴　掘　り　一四四、一四五
アニイ　七七
アネー（アンネー）　七七
姉　家　督　七七
アブミ作り機　一三三
アブラゲ　九九
油しぼり機　二一六
油　屋　一五三
雨　蛙　一九九
雨　具　三
雨　乞　い　九一、一〇〇
―　山　一〇〇、一八五
甘　酒　一〇、一九七、一六〇、一六六、一六八
甘　茶　一六七
網　一五五
雨っぷり正月　七七
飴売り唄　一九九
飴　屋　一九九、一九九、一〇三、一九九
―の太鼓　一一〇
―　節　一〇三、一一九
アラコ　一一〇
仏　一四九
新　一四八、一五二、一五五
アラボン（新盆）　一四八、一五二、一五五
送　り　一五三
―　行　事　一五五
―　の　墓　一五五
アラボンミマイ（新盆見舞）　一五五、一五四、一四八、一五五
ありごの観音めぐり　一九九

アワ（あわ・粟）
淡島様
アワセ（あわせ）
アワセメンバ
アワボヒエボ（粟穂稗穂）
粟飯
粟飯壇中
粟稗
アンカ
安産守護
あんどん（行灯）
アンネー
アンペラ

い

家氏神
家及び屋敷にいる神
家印
家の神様
家の紋章
伊賀桝
育児
―用具
イザリバタ（いざりばた）
石臼
イシダタミ（いしだたみ）
石地蔵
石宮

イジメ
石屋
イズメ
出雲
―の国
伊勢音頭
伊勢講
伊勢参宮
伊勢神宮
伊勢まいり（参り）
板の間
イタリヤサン
イタワリ職人
一音寺
市が酒買っちゃった
一月二日
イチゲン
イチゲン（一見）座敷
イチゴガサ
一代
一駄
―の量
一日十里づめ
一人前
―の仕事
―のよめ
一ノセ

一宮
一ぼう
一マケ
一文銭
一夜飾り
一夜松
イチョーガエシ（いちょうがえし）
イチョウゲイシ
一升のもち
一升ます
一升もち
イッセイキ（一周忌）
イッチョウメー
イッチョライ
イッツオメシ
五つ坊主
一本づきあい
五間取型の民家
イツミ
イツメ
移転
井戸
―台
糸かえし
井戸神
糸とり
稲作
稲妻
稲荷

イナリ様（いなり様、稲荷様）
イナリサン
イナリ神社（稲荷神社）
稲荷の神幣
イナリ祭（稲荷まつり、稲荷祭り）
稲
稲かり（稲刈）
稲のほし方
犬
イヌの日（犬の日、戌の日）
「犬」という字
位はい（位牌）
位牌持ち
位はい分け
衣服
―俗信
いぶし飼い
イブシゲエコ
イヘズラ
イボ（いぼ）
イボッキ
忌
イモガラ（いもがら）
イモゴマ
イモのズイ

イモ掘りメケエ　三〇
イモ飯　八
入会山　六二、一五二、一六九
イルリ　四
イロリ（いろり）　一、四、三、一四、一〇、三、三四、一四、一四、一五、一〇一、一四、一五、一四、一六二、一九五、一九七、二四
いろりの座席　二四
いろりの中　一五
祝提灯　二三
祝いには食べないもの　一九
祝に食べるもの　一九
岩室神社　八二
岩田帯　二六
岩室の十二様　八
イワナ　四五
岩室区有文書　六九
岩室のはじ（恥）かき祭　一、二五、一六
隠居　七
飲食器　八
飲食用具　二六
印籠　三二

う

牛追い　一五四
氏神　七、九
——様　一五四
——まつり（祭）　一六、一七
牛首　二二、二三
氏子　一〇七、一二四

——総代　七、一六、一二、一三、一七、一八、一九
ウソ　九
うたい（謡）　一六、一五
ウタイゾメ（うたいぞめ、謡ぞめ）　六、一五、一六
家中よび　一五、一五四
打ち身　一七
ウッブサメ　一七
ウッブセノ森（うつぶせの森）　八二、八三、一六、一九
ウド　七
ウドン（うどん）　一三、一五、一九、二二、二三、二七、二八、八〇、八七、九六、一六、一五、一六、一六二、一六四、一六六、一七、一七、一七八、二二四
ウドンゲの花　一四
うどんの汁　一五
ウナイ初め　一六
ウナギ　四五
ウブアケ　一七
ウブアゲ　一七、一二〇
ウブカミサマ　一七
産着（産衣）　一五六、二一九
生ぶ毛　一六
産土神　一五
うぶすなさま　九一、一五三
ウブスナサマ祭り　一二〇
うぶ湯　一六
馬　四五、一六

馬一駄　五二
馬入れ　一九二
うまごや　一五六
馬と女の年取り　一六
馬のくつ（沓）　二一〇、二二〇
馬の尻繋　二二〇
馬の背　一五六
馬の桐　四四
馬のたずな　一九六
馬の病気　四四、四七
馬のわらじ　四四
うまや（馬や、馬屋）　二一〇、五二、八五、一九六
うまや小屋　九
生れ変りの話　一四二
生み（産み）はらみ　四四、二一六
梅づけ　一四、一五六、一七
梅ぼし（梅干）　一三二
梅本の観音様　八〇、五二、七七、一九八
うらもん（うら紋、裏紋）　七
ウリッパ　四七、四二
うるし（漆）かき　一九六
ウロコ雪　五二
ウワゴイビク　一五六、二六
雲谷寺　一五六
運搬　一五六
——具　一九、二二四
——消毒具　二二四

え

衛生委員　六六

エー小作　三三
エエダウエ　一五〇
ええちょ祭　一三、一三、一六、一五六
エーッコ（エエッコ）　一二九
枝打ち鎌　一二六
技打ち鉈　一二六
越後　七、一五六
——がさ　九
——獅子　一〇六
——出身者　一〇四
——の毒消し売り　一五、一五二
——の人　一〇四
えっちょう祭　一〇四、一〇四、一〇四
エテコウ　一五二
エナ　一二六
——捨場　一六二
エビス　八四、八五、一六二
エビス講（えびす講）　八四、八五、一九六
エビスさま（えびすさま）　八四、六二
エビス膳　八五、一九六
えびすだいこく（恵比須大黒）　一九六
えべす講　一四四、一三、一七七
絵馬　一九七
エンガ　一二四、一二五
——フミ　四一
縁切　四

演芸会 六
役の小角 八
エンマ様 一六
縁結びの神様 九四

お

尾合柿 一六、一七、四六、四七
尾合のコロ柿 七
尾合神社 一三
尾合の禅宗寺 五
尾合の干柿 四
尾合のまんじゅう投げ 一
尾合のヤアヤアドリ祭 一〇六、一一三
オハチハサマ 一五
お稲荷様 一六、一四〇、一五
オイナリさん 九
オイハイ 一
お位牌代 一四
奥州 五六
大鋸（オオガ） 一三六
大節 一三五
大がま 一八、一四
大かんじょう 一五
大グクリ 七一
オオグミ（大組） 一三、一五、一四、一五
王様落し 一三
大ジメ 一八五
大正月 一五、一九、一六〇
大掃除 一六〇
太田の呑竜さま 一〇〇
オオデ 六

大道具 一〇四
大名主 一九六、一九七
大なべ 一八
オオマクレー 一五、一八三、一八四
大みそか（大晦日） 一三、一三、一九
大麦ごなし 一八
オオメ 八
オオヨリ 一四四
オオワケイシュ 六
おかいこのまつり 八七
お飾り 一六一、一六二
オカシラツキ 一九、一九、一六二
おかず 一三、一五、一八
お勝手仕事 四一、四五
オカマガニル 一〇一
オカマゲーロ 一九〇
岡本文太夫 一九
おかゆ 一六、一一〇
オガラ 一四五
オカリ屋（御仮屋） 一六五、一七〇
オガンショ 九一
——バタシ 九一
オカンノンサマ（お観音様） 一四一、一六六
お祇園 六六、七一
置戸棚 一三三
オキノデイ（デー） 一〇、一九、一四三、一四五、一九六、一九七、一〇〇、一〇八、一〇九
置き針 四五
お給仕 一九

奥の座敷 一〇
尾内に祀る神 八五
オクネゴ刈 九
お蔵米 一六
送り正月 一四
送り盆 一五、一六
おけ屋（桶屋） 四六、一五
オコジョ 一、八三
お高祖 七
オコソ頭巾 一四七
お事じまい 一〇〇
お事始め 一四四
お事八日 一〇〇
オコモリ 八九
お籠り堂 八九
おこわ 一三
おこわめし 一九
オサイセン 八三、八六、一〇〇
オサキ 九
おさげ 四
オサゴ 一〇〇、一三、一五、一六
オサラッコ 四
お産の神様 一〇〇
お産部屋 一三七
お産の方法 一三七
お産の仏様 九六
お産の別れ念仏 一一七
お産見舞 一五、一四
お三夜 一九

オサンヤサマ 九六
お三夜参り 一九
オシイ 八
オジイ 七七
オジイサン 七
押板 一五五
お七夜 八六、一九
オシッコ 一四四
オシッコトウス（おしっことうす） 一八、一三五
おしめ（オムツ） 八
おしめ（おかざり） 一八、一五、一四、一六〇
オシメカゴ 八
オシメ飾り 一四四
おしめカバー 八
オシメナイ 一六三
お釈迦様 一六七
お正月 一五
——さま 八五、一五、一六
——だな 一六
オショーバン（お相伴） 一六、一九
オシラ 一四四
オシラサマ 一、一七、一八、八三、八五、一五、一九六、一九七
「おしらさまおしら様」
オシラ信仰 一六一、一六五、一六三
オシラビマチ（おしらびまち、おしら日待） 八七五、一五一、一六四、一六五
オシル 八
オスワ様（お諏訪様） 一八、八三、一六七

お諏訪様の氏子　五
お諏訪さん　一四
オセイ　六
お歳暮　四、五、五、五
お節供（句）　一五、四
オソウゼンさま　公
オソーデンサマ　公
お供え餅　二
お大師さまのお祭り　八二
オタキアゲ　九七
オ棚オロシ（お棚おろし）　一六二
お棚さがし　一五
おたふくかぜ　九
おたぼこぼし　四
オタラシヤキ　一六
オタルイレ　二
オタルビラ　一五
小田原ちょうちん（提灯）　二三、二三
お誕生　一三
おちご　四
お茶　三
お茶っぱ　三
オチヤボウズ　三
お茶湯　一五
オチューゲン（お仲間）　一五、一六、一九
雄蝶、雌蝶　一九
オチョンマ　四
オチンコのはれた時　三
お月様　一六
オッケ　六
オッチャン　七
オデアレヨ　七
オデシゲー　八二
オデシコ　二三、二二
お手玉　八
オテノコボ　四
オテンマ　四
お寺参り　二四、一六
おてんぐさんの面　九
御灯明　一九
オトキ　四
男アルキリ出る　七
男の子の遊び　三
男の節供　三、一六
男びな　一六
オトッチャン　七
オトメ　九四、九六
鬼　一六、一九、一〇
オニウチ木　八
鬼子　一六
オニノコブシ　八〇
鬼除け　一六四
お念仏　四七
小野組（イッケ）　八三
小野家のウジ神　七
小野氏　九、二四
小野マケ　六三、九
オバア　七
オバアサン　七
お墓参り　一五、一六
おはぎ　三
お歯黒　四
おはぐろつぼ　四
オバサン　七
おはじき　三
おび（帯）　五、二
オヒガミサマ　八五、八六、一九
オヒガミマイリ　八六
オヒガミメーリ　一九
お彼岸　四
オヒナ　七
オヒツ　八
お雛様　一六
お百度　九
——まいり（参り）　九、一四三
オビヤッコ（お白狐）　五、八七
お富士様　一〇、三三
お札　八〇
おふるまい　八
お便所の神さま　八六
オボ毛　一六
オボタ　六
オボの神　一九
オボヤキ　一〇
お盆　四〇、一五
オボヤケ　三
オボンデン　九
——様　一五三、八一
お盆迎え　一七三
オマエダマ（おまえだま）　八七、一八〇
お松ぐい　一八三
お松迎え　一八一、八二、一八三
オマル　一九
オミゴク　八三、九〇、九四、一九、一六七
オミタマ様　一五三、一八四
お宮参り　六、一九、一五四
オムツ（おむつ）　三、八
お召　七
オモッツイ　一五三、一八四
表ロ　一九五、一九六、一〇五
オモテ仲人　一五
おもて紋（表紋）　五、七、九、八〇
オヤキ（おやき）　三、一四四
親子固めの盃　一九
オヤジサン　七
お夜食　三
親の死目　九
オヤバラ七日　四
オヤブン　九
オンガ　一三六
女　三
女衆　五
——の小づかい　四
——の年始　一九六
女と馬の年取り　一五七
女のイチゲン　一四〇
女の神様　九〇

女の子の遊び　一三
女の仕事　一〇、四二
女の年取り　一七
オンベロ　一五
オンマ　四四

か

カアチャン　七
怪異　八七
怪異妖怪　一〇一
会計　六四
かいこ（蚕）　七、八七、一三〇
―カゴ　八
―神　一五一、一六四、一六五
―神様（かいこ神さま）　一、八七、一六
―の神（神さま）　一七、六
―の飼育法　一四四
―の仕事　四三
蚕の上族　六六
蚕のたね　一三
蚕のたね屋　一三
蚕の病気　一三
蚕の祭り　一
蚕ぶるい　一四四
蚕マキ　一三
蚕祭　一六五
かいこやすみ（蚕休み）　一七
かいこ和讃　二、三
開懇　四五
会葬者　六六
懐中鏡　一三七
回転まぶし　一三
カイネズ　六六
回覧板　一三
改良マブシ（まぶし）　一四七
カエリドキ　一九
カエル　七
カカア　七
かかあ天下　四五
―にカラッ風　六
カカ　七
かかし　三
鏡　三三
―餅　一五
カガメ　四四
カカリゴ　七
カカリット　七
カキ　一三
柿　一六、四七
カギ竹（かぎ竹、鑑竹）　一三、一四四、九九、一六五、二三四
カギトリ　三三
カキの首　一七
餓鬼の首　一六三
ガキの首も許される日　一六一
柿の種　一六
柿渋のとり方　四七
柿もぎ　四七
カキレガイ　一六八
角刈　四
各種団体　六一、六六
角袖　一〇
学友会　六七、六八
神楽　一四四、一六七
カケ衣裳　六
かけおち　一三五
掛軸　一三一
陰ぜん　一九
かげぼし　一六
かご（駕籠）　二三四
カゴッパタキ　一六
カゴメ　一三三
籠屋　一六六
籠類　一六
カサ（笠）　九、三八
火災除けの呪い　一六
傘踊り　一〇六
重ね餅　二五
かざりかえ　一六
餅りり松　一六
かざりもの　一三五
火事　一三
カジカ　一五
カジカッカリ　一九
カジゴ　四七
火事の夢　六
火事見舞　一五、一四四
鍛冶屋　一六七、一七五、一七〇
迦葉山　一六七、八八、九八、一六七
カショウ山参り（迦葉山参り）　九一、一六九
柏餅　一八一
カズノモチ　三
カスミ網　一五
かぜ（風邪）　一六、一七、九九
風の神　一六
風まつり（風祭）　九三、一七一
風除け　一〇〇
風穴蚕種　一三
火葬　六五
数え唄　一九一
家族関係用語　七
家族間の民俗　六三、七三
家族生活　七
家族の私財　六三、六六
かたあげ（肩上げ）　一〇、二一
肩掛縄　一五五
カタケニタベル　八
かたびら　一四五
語り物　三
家蓄　四四
かっこう　一六
学校林　六五
合切袋　二六、二四五
勝坂峠　一七五
勝坂トンネル　一七五
カッチキ　八、一六、一九、一七四
かっちに縄　二四四
カッチン縄　一九
勝手　一九七

河童 一八五、一八六
―の薬 一八六
カッポシ 三〇
家伝薬 二六
カド 三三
カドカザリ 二九
門付け 一〇六、一二六
―芸 一〇三
―の太鼓 一一〇
カド火（門火） 一一三
門開き和讃 一一六
カド松（門松） 一二四、一二九、一二〇
門迎え 一二六
カドモチ 三
金井家 一六三
カナグツヤ 一五
かなごき（金ゴキ） 二一四、二一五
金盤 二一五
金物屋 一五一
カニババ 一一六
カネ 四
カネゴイ 一四
カネのつぼ 一一五
金のわらじ 一〇四
歌舞伎 一〇三
―の舞台 一九五、一九六、一〇四
カブト屋根 一〇六
かぶりもの 一五
火防 一六〇
かぼちゃ 一九
カマ神さま（釜神さま） 三一、五三
釜敷 二一八、二一〇
カマス 一九
カマド 一一四、一二四
―神 一五三
カマノクチアケ 一五三、一六六
釜の口開き 一六九
かまのふた 一六九
髪を洗え 一四四、九八
神岡（上岡の観音様） 八三、一六
神おくり（神送り） 一六六
上郷 一五
上古語父の保存会 一〇、一三、一七、八五、九二、一四一、一五、一六、一七、一八、一〇、一二七
神だな（神棚） 一〇、一三、一七、八五、九二、一四一、一五、一六、一七、一八、一〇、一二七
上チョーヅバ 一五五、一〇九
カミデッポウ（紙鉄砲） 一一一
雷 一〇、一〇〇
かみなりが多い年 一〇〇
かみなりよけ（雷よけ、雷除け） 一五六、一〇、一〇〇
神の子 一一六
神むかえ（神迎え） 八三、一九
髪結い 一一七
亀の子たわし 一一三
家紋 八〇
かや 一五
萱刈 一一三、一四四
カヤマブシ（かやまかし） 一三三、一五五
カユカキ棒（粥かき棒） 一六一、一六一
カマカキ棒の棒たおし 一四一
鳥鳴き 一一四
空鉄びん 一五一
狩り 一一一
刈り上げ 一一一
刈上祝 一一一、一九
カリブン 一一六、一一七
刈分小作 一一一
仮埋葬 一一六
カル 一一七
軽口 一一〇
家例 一九、八〇、一五四
革靴 九
カワダテ 一一七
川の神様 一八〇
川ビタシ餅 一八〇
川普請 一一一
川干し 一五一、一五一
棺 一一
干害 一一四
カン飼い 一一三
願かけ 一九
ガンクイ豆 一九、一五五
冠婚葬祭 一六
関西 一四
かんざし 八七
監事 一五、一一四
元日 一六一
寒中 一六一
カンソーイモ 一五
カンダチ（かんだち） 一〇、一〇〇
元旦 一五一
官地 八九、一七
―林 一一、八九
寒天 一六
ガンドウ 一一一
カンナ 一一七
神主 一一、一一、一九一、一九一、一七
観音講 九七、一六一
観音さん 一〇四
観音和讃 九五
カンノンサマ（観音様） 八五、一六一
カンバラジシ 一一四
漢方医具 一一五
漢方の医具と医書 一一一
寒味噌 一八
カンムリ 一五
ガモドキ 一九
官有林 八九
―き
木おろし 一一
祇園 一九、一四一、一五、一五、一七、一九、一〇、一四一、一七、一七
ぎおんかいもん（祇園買いもん） 一五、一六
祇園かんじょう（祇園勘定） 一九、一五、一五

祇園の祭　一六四
祇園の翌日　一六五
木伐り天狗　一〇一
ききんのときの食べもの　一六六
キキンの年　一〇一
兆　一六六
キ　ジ　一〇一
忌　日　一六五
鬼子母神　一〇一
キ　ジ　リ　一〇一、一〇四
奇　人　一〇四、一〇七
義　太　夫　一〇四、一〇七
北向地蔵　一九
北向の地蔵様　一九
忌中念仏　一四
キツネ（狐）　一〇一、一八五、一八六、一八七
狐　塚　一〇一
狐にばかされた話　一八
キ　ナ　紛　一三
キ　ヌ　一六
き　の　こ　一六
木ノ葉籠　一九
木箱の車　一三
木　鉢　一三四
キ　ミ　一四、一九
着物を裏がえしして干す　二
鬼門除け　八六
客　室　一九六
客　目　録　一六六

きゃはん　一四五
キャラブキ　一五
旧　家　一六、一六五
教荒食物　一六
九蔵の狂歌　一四四
キュウタ　一四
キューリ　一六、一七、一九
―　馬　一四三
―　の初もの　一五
―　をつくらない家　一九
キョーカタビタラ（絡帷子）　一三、一五、二一
協　議　員　一六、一六四
共済評価員　一六
囚　作　時　一三
行　商　人　一四、一五、一五一
共同葬具　一三五
共同墓地　一六
郷土芸能　一〇三
キョウバアシ　一四
共有財産　一六、一六、一七
共有山　一七
共有林　一六、一六三、一七三
漁　業　一四五
巨人伝説　一五一
漁　法　一四五
キョメ　一四三
切上げ型屋根　一三
切落し　一〇四、一〇五
切り傷　一七

ギリギリ飴屋　一七五
きりこみ　一三
きりぼし（切干し）　一五、一六、一八
儀　礼　一三
キ　ワ　ダ　一〇
禁　忌　一六、一八、一四一
―作物　八〇
キンダチ　一二
禁　鳥　一四五
金納小作　一三
キンマビキ　一五一

く

区　六一
食いぞめ（食い初め）　一二六、一三〇
区　会　一四、一七一
―　議　員　一四五
ク　キ　六一、六四、七〇、七一
くくり枕　一四五
ク　サ　一〇
草かり（草刈り）　一四一、一四四、一四四、一五一、一六六
草刈りかご（草刈籠）　一六、一三〇
草刈縄　一五五
草　分　け　一六五
く　し　一四
グ　シ　一四一
クスネガネ　一六
クズ蘭　一六六
クセ直し　一三七
区総会　一六四

くぞの根　一七
クソフジ　一七
くだまき機　一三一、一三三
ロ　塩　一八
ロ　祭　り　一六五
区　長　六一、六三、六四、六六、六九、七〇、七一、七三、八五、八七、八八、一〇〇、一〇一、一〇四、一五七、一六一、一六五、一六七、一七七、一八五、一九
区長代理　七〇、七一
区長タンス（区長箪笥）　一六七、一三五
区長提灯　一三五
区長の布令　一四四
区長引渡し　七一
ロ　寄　せ　一五〇
クッツキ同志　一三四
くっつき夫婦　一四一
クッツキミョウト　一三五
クッツキメオト　一三四
区の常会　六五
区　の　鈴　一三五
区の総会　七一
区の役員　一六七
区　費　六一、六六、七〇
首なし観音　九二、九三
ク　ボ　一九
熊　手　二六、二七
熊野皇太神宮　九〇
組　六一、六五、七一
組くみあい（組合）　三一、一六六、一六六

組衛生員 七
組頭 六四
組々の共有 七六
組シンルイ 一三
組の衆 六三
組分け 五
クモの巣 三五
区有の文書 七、六
くら（土蔵） 公
くらがみさま
倉開き 一五
クラモチ 一六
栗拾いの夢 六
栗生新道 九、六
栗生峠 六五、七二
栗生トンネル 九、五
栗生の峠 七五
クルイ 三四
クルミの葉 一〇
クルリ棒 三三、三四
クレ 三四
暮かんじょう 五
クロ 九
桑切り庖丁 三〇
桑コキ（桑こき） 一三、一四
くわ立て 一五
桑つみ 一三
桑とり 一五、四、一四、一三
桑の仕立て方 一五
桑の種類 一五

桑の葉 一七
桑原イッケ 一九
桑原家 一八三
桑原マケ 一九、一八三
桑ぶるい 一三〇、一三一
桑もぎ 一三

け

ケイアン（桂庵） 三〇、三三、一五
ケイト（ケート） 一三、一七、一三
ケイト百姓 一三、一四、一五
芸人の鑑札 九
敬老会 一九
ケエカキ棒 一〇四、一六
ケーカキボー（ケーカキ棒） 一五
ケエニク 一六、一六、一六
ケエリドキ 公
ケゲン（半夏） 一九
化粧 一五
削りよき 四
ゲタ（下駄） 一五
結婚 八、九
相手 一五
契約 一四
式 一五
年令 一五、一五、一五、一六、一四、一三、一五
結髪 一三〇
ケバ 四
下痢 九
玄関 一五
建築儀礼 一五
建築工程 三
ケンチン 一五
ケンチョン汁 一五、九〇
ケンチン汁 一四、一六一
げんのしょうこ 一五、一五
玄竜地獄 一五

こ

コイダシカギ（肉出しかぎ） 一五、一三六
コイダシモッコ 一五
コイニワ 一五
鯉のぼり 一六
講 八一、九四
公益社 三〇、六六、六七、七二、八、一五一、一五
―員 七三
―集会所 六六
―の役員 一六
公会堂 一五、一六
郷倉 一四、一六
高山社 一五
こうじ 一七
麹踏み 一三〇
こうじ屋 一五
江州商人 九
ごうしゅうや（江州屋） 一三、一五一、七三
工場労働者 四
庚申 九七
―供養塔 一五
―講 八一、九四、九六
―さま 九四
―様の膳 九六
―塔 八三、九四
―のカケジ 九六
―の日 九四
―待 九四
―まつり（祭り） 一四、一五、九一、一四七、一六四
荒神さま 一〇
荒神柱 一六
コウジンマユ 九
交通・交易 一七、一五
コウデ 一四、一五
香でん（香奠） 一六
紅白の餅 九一
弘法清水 九一
弘法大師 一〇〇
弘法の岩穴 六三
公民館 六七
高友会 一六
行李 一六、一六
氷餅 一五
こえだめ 一五
コエニワ 一三
子負い帯 一
蚕影様 八七、一五、一六
コカゲサン（こかげさん、蚕影山） 一六、一五、八七、一五

蚕影神 一五六
蚕影神社 八七、一六五
五月の節供 一五三
コガネ 一六
コガネメシ 一六
コキ桑 一七
刻印 一七
コグソ 一六、一六
虚空蔵様 九四
コグソッコ 一八〇
こくびつ（穀櫃） 一三五
小組 一四四
伍組 一五四
五合塩 一八
五合餅 一三五
後家 一四
五穀 一六、一三五
ゴコクブクロ（五穀袋） 一三五
九日夜 一六
コゴメ 一八
―フキ 一七
五歳 一三五
小作慣行 一三三
小作人 一三三
小作料 一三三
小座敷 一三七
ゴザッキゲタ 九
ゴザッキのぞうり 五
こしあげ 一〇、一一
乞食 一六、一四七、一四四
乞食神楽 六三
コシタ 一四七
こじはん 一三
こしまき 八
コシミノ 一四三
コシメカイ（腰メケイ） 一四〇、一七
コシヤリ 一三三
御祝儀 一九、一六、一七、一四
コジュウハン（こじゅうはん） 一三、一三
小正月 一四、一五、一六、一四三、一五、一五一、一五三、一五八、一五九、一六三、一八四
個人墓地 一四九
ゴゼ 一四四、一〇八、一六八
御先祖様 一六三
子育地蔵 一六六
コタ 一四九
コダチ 一一
伍長 一六、一六六、一六四、一七一、一七三
小づかい銭（小遣い銭） 一四〇、一五四
コデウエ 一六
コデガネ 一六
五徳 一三四
こと姫 一一
琴平さん 九八
子ども 一六
―会（子供会） 一六一、一六七、一九七
―そり 一三七
―の躾 一六六、一三一
―の葬式 一四九
コト八日 一六四
諺 一九一
粉餅 一五一
五人組 一三、一五一、一五三、一四四、一五三
―頭 一六四
こね鉢 一一四
五年忌 一四九
ご年始 一五三
コバガイ 一四九
こはぜのたび 一〇
小林イッケ 一六、一五三
小林のハヤシもち 一九
小林マケ 一五四
ごはん 一三
小判を埋めた話 一五
木挽 一四、一六六
木挽鋸 一六
コピョウ 一五三
コブ 一七
古峰ケ原 八六、九八
呉服屋 一五一
コブレ 六一、七一、七二
戸別割 七
コボ 一三
コマゲタ 九
こまで 一三七
五間取型 一九四、一九七
小間物屋 一五
古峯 九八
コミネサン 九八
小麦 一四、一六
小麦粉 一一三、一四、一四、九四、一六九
ゴムぐつ（靴） 九、四一
ゴムぞうり 一六、九
ゴム長靴 一一三、一六、一七、一四一、一四三、一五、一六六、一六七、一九六、一〇〇
米 一四
―買い座敷 一七
―こうじ 一六
―ゾッキ 一四
―俵 一六、四一
五目飯 一
子持山 一三
子守り 一九三
子守唄 一一
子守おび 七
子守っこかぶり 一四
顧問 一九、一六
小屋（道祖神） 一三〇
小屋組 一三一
子安貝 一九
御冷酒 一七一
子者連の神輿 六
コワケイシュ 四、八七
こわめし 一六、一四四
婚姻

―関係 二六
コンコン狐 一〇八
コンシュー流（紺周流） 一二四
紺周印（流） 二六、一二四
コンジンサマ 八六
コンニャク（こんにゃく） 一六、二七、二九
こんびら様（金比羅さま） 八四、八〇
金比羅まいり 五二
紺屋 一五二
婚約 一二七

さ

祭供品 二六六
再生 二六六
賽銭 八七、一二四、一八〇
祭典 四一
―かがり（係、掛） 七一、一八〇、一八七
―伍長 一七七
西の河原のぢぞう和讃 一一七
西の河原和讃 一一一
さいふ（財布） 三三
財布ジッポ 六六
裁縫 三、一〇、四二
―道具 一六六
歳末諸事 八三
祭文 一〇三、一〇八、一一〇
―語り 一一〇
サエモン 一四四
祭礼行事 一〇三、一三二、一三四
座棺 一四五
作業着 六
サク 一二四
さく入れ 一六
さく切り 一六、四一
作っぱらい 四一
作場道 一六六
ざぐり（座繰り） 一三一、一三二
酒 一六
さげ 一二五
サゲオ 一六六
酒かめ 二一六
酒重箱 二一八
サケッポリ 一九七、一六六
酒のいれもの 二一六
酒の席 一六
酒瓶 二一六
ササイタ 一六六
笹板茸き 一六六
笹掛り 一〇七
差上念仏 一一七
笹の葉 一四五
サシ歯 四
アサ 一四四
ザゾケ 一六六
座づけの茶 一六
サッソイ 一四七
さつま 一六
さつまいも（芋） 四、一五、一八、一七、四一
サトイモの柄 一六
里いもの茎 一七
里いもの年とり 一七
里がえり（帰り） 四一、一四四
サナ（さな） 一六、一三五、一三四
木流し（小流し） 一七、一六七、一六八
サナガシ職人 一四四
サビ 一六六
ザマ 一六
ザマかご 一四
ざる 一四
猿追い祭 一四四
猿田彦 八六
―の碑 九三
サルの日（申の日） 一一
サルマタ（さるまた） 八
猿廻し 一四四
猿聟 一八五、一八六
産育 一六六
―俗信 一三二
三階松 一四四
三階節供（三月の節供） 一四五、一三、一五二
三が日（三元日） 一六、一六六
産業神 八七
参宮講 九七
サンゴ石様 一三二
産後の食事 一六
山菜 一七
三歳 一三五
三三九度の盃 一六七、一四四
三七日 一六六
蚕室 一三五
産室 一三七、一二六
三社神社 八三、一三
三十五日 三、一九七、一九六
三十三年忌 一四四、一九六
サンショウ 一七
三条の金物屋 一九六
さんしょうの皮 一六六
さんしょうの木 九八
山樵用具 一六六
三東雨 一六
産泰様 一三五
蚕種 一四四
三度の食事 三
三年忌 一四四、一九六
三人娘（昔話） 一八六
産婆 一〇一、一三七、一三五
三百仲人五百の損 一三五
産婦 一四五
―の食事 一六
三宝荒神 八五
三本辻 一五七、一六六、一九八、一九七、一六〇、一九七、一六二、一六三、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一一、三一二、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、四五九、四六〇、四六一、四六二、四六三、四六四、四六五、四六六、四六七、四六八、四六九、四七〇、四七一、四七二、四七三、四七四、四七五、四七六、四七七、四七八、四七九、四八〇、四八一、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一一、五一二、五一三、五一四、五一五、五一六、五一七、五一八、五一九、五二〇、五二一、五二二、五二三、五二四、五二五、五二六、五二七、五二八、五二九、五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、五三五、五三六、五三七、五三八、五三九、五四〇、五四一、五四二、五四三、五四四、五四五、五四六、五四七、五四八、五四九、五五〇、五五一、五五二、五五三、五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一一、七一二、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五一、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七一、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一一、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五一、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一一、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五一、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七一、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九一、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇、一〇〇一、一〇〇二、一〇〇三、一〇〇四、一〇〇五、一〇〇六、一〇〇七、一〇〇八、一〇〇九、一〇一〇、一〇一一、一〇一二、一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六、一〇一七、一〇一八、一〇一九、一〇二〇、一〇二一、一〇二二、一〇二三、一〇二四、一〇二五、一〇二六、一〇二七、一〇二八、一〇二九、一〇三〇、一〇三一、一〇三二、一〇三三、一〇三四、一〇三五、一〇三六、一〇三七、一〇三八、一〇三九、一〇四〇、一〇四一、一〇四二、一〇四三、一〇四四、一〇四五、一〇四六、一〇四七、一〇四八、一〇四九、一〇五〇、一〇五一、一〇五二、一〇五三、一〇五四、一〇五五、一〇五六、一〇五七、一〇五八、一〇五九、一〇六〇、一〇六一、一〇六二、一〇六三、一〇六四、一〇六五、一〇六六、一〇六七、一〇六八、一〇六九、一〇七〇、一〇七一、一〇七二、一〇七三、一〇七四、一〇七五、一〇七六、一〇七七、一〇七八、一〇七九、一〇八〇、一〇八一、一〇八二、一〇八三、一〇八四、一〇八五、一〇八六、一〇八七、一〇八八、一〇八九、一〇九〇、一〇九一、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一〇〇、一一〇一、一一〇二、一一〇三、一一〇四、一一〇五、一一〇六、一一〇七、一一〇八、一一〇九、一一一〇、一一一一、一一一二、一一一三、一一一四、一一一五、一一一六、一一一七、一一一八、一一一九、一一二〇、一一二一、一一二二、一一二三、一一二四、一一二五、一一二六、一一二七、一一二八、一一二九、一一三〇、一一三一、一一三二、一一三三、一一三四、一一三五、一一三六、一一三七、一一三八、一一三九、一一四〇、一一四一、一一四二、一一四三、一一四四、一一四五、一一四六、一一四七、一一四八、一一四九、一一五〇、一一五一、一一五二、一一五三、一一五四、一一五五、一一五六、一一五七、一一五八、一一五九、一一六〇、一一六一、一一六二、一一六三、一一六四、一一六五、一一六六、一一六七、一一六八、一一六九、一一七〇、一一七一、一一七二、一一七三、一一七四、一一七五、一一七六、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一八一、一一八二、一一八三、一一八四、一一八五、一一八六、一一八七、一一八八、一一八九、一一九〇、一一九一、一一九二、一一九三、一一九四、一一九五、一一九六、一一九七、一一九八、一一九九、一二〇〇、一二〇一、一二〇二、一二〇三、一二〇四、一二〇五、一二〇六、一二〇七、一二〇八、一二〇九、一二一〇、一二一一、一二一二、一二一三、一二一四、一二一五、一二一六、一二一七、一二一八、一二一九、一二二〇、一二二一、一二二二、一二二三、一二二四、一二二五、一二二六、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三一、一二三二、一二三三、一二三四、一二三五、一二三六、一二三七、一二三八、一二三九、一二四〇、一二四一、一二四二、一二四三、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七、一二四八、一二四九、一二五〇、一二五一、一二五二、一二五三、一二五四、一二五五、一二五六、一二五七、一二五八、一二五九、一二六〇、一二六一、一二六二、一二六三、一二六四、一二六五、一二六六、一二六七、一二六八、一二六九、一二七〇、一二七一、一二七二、一二七三、一二七四、一二七五、一二七六、一二七七、一二七八、一二七九、一二八〇、一二八一、一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、一二八六、一二八七、一二八八、一二八九、一二九〇、一二九一、一二九二、一二九三、一二九四、一二九五、一二九六、一二九七、一二九八、一二九九、一三〇〇、一三〇一、一三〇二、一三〇三、一三〇四、一三〇五、一三〇六、一三〇七、一三〇八、一三〇九、一三一〇、一三一一、一三一二、一三一三、一三一四、一三一五、一三一六、一三一七、一三一八、一三一九、一三二〇、一三二一、一三二二、一三二三、一三二四、一三二五、一三二六、一三二七、一三二八、一三二九、一三三〇、一三三一、一三三二、一三三三、一三三四、一三三五、一三三六、一三三七、一三三八、一三三九、一三四〇、一三四一、一三四二、一三四三、一三四四、一三四五、一三四六、一三四七、一三四八、一三四九、一三五〇、一三五一、一三五二、一三五三、一三五四、一三五五、一三五六、一三五七、一三五八、一三五九、一三六〇、一三六一、一三六二、一三六三、一三六四、一三六五、一三六六、一三六七、一三六八、一三六九、一三七〇、一三七一、一三七二、一三七三、一三七四、一三七五、一三七六、一三七七、一三七八、一三七九、一三八〇、一三八一、一三八二、一三八三、一三八四、一三八五、一三八六、一三八七、一三八八、一三八九、一三九〇、一三九一、一三九二、一三九三、一三九四、一三九五、一三九六、一三九七、一三九八、一三九九、一四〇〇、一四〇一、一四〇二、一四〇三、一四〇四、一四〇五、一四〇六、一四〇七、一四〇八、一四〇九、一四一〇、一四一一、一四一二、一四一三、一四一四、一四一五、一四一六、一四一七、一四一八、一四一九、一四二〇、一四二一、一四二二、一四二三、一四二四、一四二五、一四二六、一四二七、一四二八、一四二九、一四三〇、一四三一、一四三二、一四三三、一四三四、一四三五、一四三六、一四三七、一四三八、一四三九、一四四〇、一四四一、一四四二、一四四三、一四四四、一四四五、一四四六、一四四七、一四四八、一四四九、一四五〇、一四五一、一四五二、一四五三、一四五四、一四五五、一四五六、一四五七、一四五八、一四五九、一四六〇、一四六一、一四六二、一四六三、一四六四、一四六五、一四六六、一四六七、一四六八、一四六九、一四七〇、一四七一、一四七二、一四七三、一四七四、一四七五、一四七六、一四七七、一四七八、一四七九、一四八〇、一四八一、一四八二、一四八三、一四八四、一四八五、一四八六、一四八七、一四八八、一四八九、一四九〇、一四九一、一四九二、一四九三、一四九四、一四九五、一四九六、一四九七、一四九八、一四九九、一五〇〇、一五〇一、一五〇二、一五〇三、一五〇四、一五〇五、一五〇六、一五〇七、一五〇八、一五〇九、一五一〇、一五一一、一五一二、一五一三、一五一四、一五一五、一五一六、一五一七、一五一八、一五一九、一五二〇、一五二一、一五二二、一五二三、一五二四、一五二五、一五二六、一五二七、一五二八、一五二九、一五三〇、一五三一、一五三二、一五三三、一五三四、一五三五、一五三六、一五三七、一五三八、一五三九、一五四〇、一五四一、一五四二、一五四三、一五四四、一五四五、一五四六、一五四七、一五四八、一五四九、一五五〇、一五五一、一五五二、一五五三、一五五四、一五五五、一五五六、一五五七、一五五八、一五五九、一五六〇、一五六一、一五六二、一五六三、一五六四、一五六五、一五六六、一五六七、一五六八、一五六九、一五七〇、一五七一、一五七二、一五七三、一五七四、一五七五、一五七六、一五七七、一五七八、一五七九、一五八〇、一五八一、一五八二、一五八三、一五八四、一五八五、一五八六、一五八七、一五八八、一五八九、一五九〇、一五九一、一五九二、一五九三、一五九四、一五九五、一五九六、一五九七、一五九八、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇六、一六〇七、一六〇八、一六〇九、一六一〇、一六一一、一六一二、一六一三、一六一四、一六一五、一六一六、一六一七、一六一八、一六一九、一六二〇、一六二一、一六二二、一六二三、一六二四、一六二五、一六二六、一六二七、一六二八、一六二九、一六三〇、一六三一、一六三二、一六三三、一六三四、一六三五、一六三六、一六三七、一六三八、一六三九、一六四〇、一六四一、一六四二、一六四三、一六四四、一六四五、一六四六、一六四七、一六四八、一六四九、一六五〇、一六五一、一六五二、一六五三、一六五四、一六五五、一六五六、一六五七、一六五八、一六五九、一六六〇、一六六一、一六六二、一六六三、一六六四、一六六五、一六六六、一六六七、一六六八、一六六九、一六七〇、一六七一、一六七二、一六七三、一六七四、一六七五、一六七六、一六七七、一六七八、一六七九、一六八〇、一六八一、一六八二、一六八三、一六八四、一六八五、一六八六、一六八七、一六八八、一六八九、一六九〇、一六九一、一六九二、一六九三、一六九四、一六九五、一六九六、一六九七、一六九八、一六九九、一七〇〇、一七〇一、一七〇二、一七〇三、一七〇四、一七〇五、一七〇六、一七〇七、一七〇八、一七〇九、一七一〇、一七一一、一七一二、一七一三、一七一四、一七一五、一七一六、一七一七、一七一八、一七一九、一七二〇、一七二一、一七二二、一七二三、一七二四、一七二五、一七二六、一七二七、一七二八、一七二九、一七三〇、一七三一、一七三二、一七三三、一七三四、一七三五、一七三六、一七三七、一七三八、一七三九、一七四〇、一七四一、一七四二、一七四三、一七四四、一七四五、一七四六、一七四七、一七四八、一七四九、一七五〇、一七五一、一七五二、一七五三、一七五四、一七五五、一七五六、一七五七、一七五八、一七五九、一七六〇、一七六一、一七六二、一七六三、一七六四、一七六五、一七六六、一七六七、一七六八、一七六九、一七七〇、一七七一、一七七二、一七七三、一七七四、一七七五、一七七六、一七七七、一七七八、一七七九、一七八〇、一七八一、一七八二、一七八三、一七八四、一七八五、一七八六、一七八七、一七八八、一七八九、一七九〇、一七九一、一七九二、一七九三、一七九四、一七九五、一七九六、一七九七、一七九八、一七九九、一八〇〇、一八〇一、一八〇二、一八〇三、一八〇四、一八〇五、一八〇六、一八〇七、一八〇八、一八〇九、一八一〇、一八一一、一八一二、一八一三、一八一四、一八一五、一八一六、一八一七、一八一八、一八一九、一八二〇、一八二一、一八二二、一八二三、一八二四、一八二五、一八二六、一八二七、一八二八、一八二九、一八三〇、一八三一、一八三二、一八三三、一八三四、一八三五、一八三六、一八三七、一八三八、一八三九、一八四〇、一八四一、一八四二、一八四三、一八四四、一八四五、一八四六、一八四七、一八四八、一八四九、一八五〇、一八五一、一八五二、一八五三、一八五四、一八五五、一八五六、一八五七、一八五八、一八五九、一八六〇、一八六一、一八六二、一八六三、一八六四、一八六五、一八六六、一八六七、一八六八、一八六九、一八七〇、一八七一、一八七二、一八七三、一八七四、一八七五、一八七六、一八七七、一八七八、一八七九、一八八〇、一八八一、一八八二、一八八三、一八八四、一八八五、一八八六、一八八七、一八八八、一八八九、一八九〇、一八九一、一八九二、一八九三、一八九四、一八九五、一八九六、一八九七、一八九八、一八九九、一九〇〇、一九〇一、一九〇二、一九〇三、一九〇四、一九〇五、一九〇六、一九〇七、一九〇八、一九〇九、一九一〇、一九一一、一九一二、一九一三、一九一四、一九一五、一九一六、一九一七、一九一八、一九一九、一九二〇、一九二一、一九二二、一九二三、一九二四、一九二五、一九二六、一九二七、一九二八、一九二九、一九三〇、一九三一、一九三二、一九三三、一九三四、一九三五、一九三六、一九三七、一九三八、一九三九、一九四〇、一九四一、一九四二、一九四三、一九四四、一九四五、一九四六、一九四七、一九四八、一九四九、一九五〇、一九五一、一九五二、一九五三、一九五四、一九五五、一九五六、一九五七、一九五八、一九五九、一九六〇、一九六一、一九六二、一九六三、一九六四、一九六五、一九六六、一九六七、一九六八、一九六九、一九七〇、一九七一、一九七二、一九七三、一九七四、一九七五、一九七六、一九七七、一九七八、一九七九、一九八〇、一九八一、一九八二、一九八三、一九八四、一九八五、一九八六、一九八七、一九八八、一九八九、一九九〇、一九九一、一九九二、一九九三、一九九四、一九九五、一九九六、一九九七、一九九八、一九九九、二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四、二〇〇五、二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九、二〇一〇、二〇一一、二〇一二、二〇一三、二〇一四、二〇一五、二〇一六、二〇一七、二〇一八、二〇一九、二〇二〇、二〇二一、二〇二二、二〇二三、二〇二四、二〇二五、二〇二六、二〇二七、二〇二八、二〇二九、二〇三〇、二〇三一、二〇三二、二〇三三、二〇三四、二〇三五、二〇三六、二〇三七、二〇三八、二〇三九、二〇四〇、二〇四一、二〇四二、二〇四三、二〇四四、二〇四五、二〇四六、二〇四七、二〇四八、二〇四九、二〇五〇、二〇五一、二〇五二、二〇五三、二〇五四、二〇五五、二〇五六、二〇五七、二〇五八、二〇五九、二〇六〇、二〇六一、二〇六二、二〇六三、二〇六四、二〇六五、二〇六六、二〇六七、二〇六八、二〇六九、二〇七〇、二〇七一、二〇七二、二〇七三、二〇七四、二〇七五、二〇七六、二〇七七、二〇七八、二〇七九、二〇八〇、二〇八一、二〇八二、二〇八三、二〇八四、二〇八五、二〇八六、二〇八七、二〇八八、二〇八九、二〇九〇、二〇九一、二〇九二、二〇九三、二〇九四、二〇九五、二〇九六、二〇九七、二〇九八、二〇九九、二一〇〇、二一〇一、二一〇二、二一〇三、二一〇四、二一〇五、二一〇六、二一〇七、二一〇八、二一〇九、二一一〇、二一一一、二一一二、二一一三、二一一四、二一一五、二一一六、二一一七、二一一八、二一一九、二一二〇、二一二一、二一二二、二一二三、二一二四、二一二五、二一二六、二一二七、二一二八、二一二九、二一三〇、二一三一、二一三二、二一三三、二一三四、二一三五、二一三六、二一三七、二一三八、二一三九、二一四〇、二一四一、二一四二、二一四三、二一四四、二一四五、二一四六、二一四七、二一四八、二一四九、二一五〇、二一五一、二一五二、二一五三、二一五四、二一五五、二一五六、二一五七、二一五八、二一五九、二一六〇、二一六一、二一六二、二一六三、二一六四、二一六五、二一六六、二一六七、二一六八、二一六九、二一七〇、二一七一、二一七二、二一七三、二一七四、二一七五、二一七六、二一七七、二一七八、二一七九、二一八〇、二一八一、二一八二、二一八三、二一八四、二一八五、二一八六、二一八七、二一八八、二一八九、二一九〇、二一九一、二一九二、二一九三、二一九四、二一九五、二一九六、二一九七、二一九八、二一九九、二二〇〇、二二〇一、二二〇二、二二〇三、二二〇四、二二〇五、二二〇六、二二〇七、二二〇八、二二〇九、二二一〇、二二一一、二二一二、二二一三、二二一四、二二一五、二二一六、二二一七、二二一八、二二一九、二二二〇、二二二一、二二二二、二二二三、二二二四、二二二五、二二二六、二二二七、二二二八、二二二九、二二三〇、二二三一、二二三二、二二三三、二二三四、二二三五、二二三六、二二三七、二二三八、二二三九、二二四〇、二二四一、二二四二、二二四三、二二四四、二二四五、二二四六、二二四七、二二四八、二二四九、二二五〇、二二五一、二二五二、二二五三、二二五四、二二五五、二二五六、二二五七、二二五八、二二五九、二二六〇、二二六一、二二六二、二二六三、二二六四、二二六五、二二六六、二二六七、二二六八、二二六九、二二七〇、二二七一、二二七二、二二七三、二二七四、二二七五、二二七六、二二七七、二二七八、二二七九、二二八〇、二二八一、二二八二、二二八三、二二八四、二二八五、二二八六、二二八七、二二八八、二二八九、二二九〇、二二九一、二二九二、二二九三、二二九四、二二九五、二二九六、二二九七、二二九八、二二九九、二三〇〇、二三〇一、二三〇二、二三〇三、二三〇四、二三〇五、二三〇六、二三〇七、二三〇八、二三〇九、二三一〇、二三一一、二三一二、二三一三、二三一四、二三一五、二三一六、二三一七、二三一八、二三一九、二三二〇、二三二一、二三二二、二三二三、二三二四、二三二五、二三二六、二三二七、二三二八、二三二九、二三三〇、二三三一、二三三二、二三三三、二三三四、二三三五、二三三六、二三三七、二三三八、二三三九、二三四〇、二三四一、二三四二、二三四三、二三四四、二三四五、二三四六、二三四七、二三四八、二三四九、二三五〇、二三五一、二三五二、二三五三、二三五四、二三五五、二三五六、二三五七、二三五八、二三五九、二三六〇、二三六一、二三六二、二三六三、二三六四、二三六五、二三六六、二三六七、二三六八、二三六九、二三七〇、二三七一、二三七二、二三七三、二三七四、二三七五、二三七六、二三七七、二三七八、二三七九、二三八〇、二三八一、二三八二、二三八三、二三八四、二三八五、二三八六、二三八七、二三八八、二三八九、二三九〇、二三九一、二三九二、二三九三、二三九四、二三九五、二三九六、二三九七、二三九八、二三九九、二四〇〇、二四〇一、二四〇二、二四〇三、二四〇四、二四〇五、二四〇六、二四〇七、二四〇八、二四〇九、二四一〇、二四一一、二四一二、二四一三、二四一四、二四一五、二四一六、二四一七、二四一八、二四一九、二四二〇、二四二一、二四二二、二四二三、二四二四、二四二五、二四二六、二四二七、二四二八、二四二九、二四三〇、二四三一、二四三二、二四三三、二四三四、二四三五、二四三六、二四三七、二四三八、二四三九、二四四〇、二四四一、二四四二、二四四三、二四四四、二四四五、二四四六、二四四七、二四四八、二四四九、二四五〇、二四五一、二四五二、二四五三、二四五四、二四五五、二四五六、二四五七、二四五八、二四五九、二四六〇、二四六一、二四六二、二四六三、二四六四、二四六五、二四六六、二四六七、二四六八、二四六九、二四七〇、二四七一、二四七二、二四七三、二四七四、二四七五、二四七六、二四七七、二四七八、二四七九、二四八〇、二四八一、二四八二、二四八三、二四八四、二四八五、二四八六、二四八七、二四八八、二四八九、二四九〇、二四九一、二四九二、二四九三、二四九四、二四九五、二四九六、二四九七、二四九八、二四九九、二五〇〇、二五〇一、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、二五〇七、二五〇八、二五〇九、二五一〇、二五一一、二五一二、二五一三、二五一四、二五一五、二五一六、二五一七、二五一八、二五一九、二五二〇、二五二一、二五二二、二五二三、二五二四、二五二五、二五二六、二五二七、二五二八、二五二九、二五三〇、二五三一、二五三二、二五三三、二五三四、二五三五、二五三六、二五三七、二五三八、二五三九、二五四〇、二五四一、二五四二、二五四三、二五四四、二五四五、二五四六、二五四七、二五四八、二五四九、二五五〇、二五五一、二五五二、二五五三、二五五四、二五五五、二五五六、二五五七、二五五八、二五五九、二五六〇、二五六一、二五六二、二五六三、二五六四、二五六五、二五六六、二五六七、二五六八、二五六九、二五七〇、二五七一、二五七二、二五七三、二五七四、二五七五、二五七六、二五七七、二五七八、二五七九、二五八〇、二五八一、二五八二、二五八三、二五八四、二五八五、二五八六、二五八七、二五八八、二五八九、二五九〇、二五九一、二五九二、二五九三、二五九四、二五九五、二五九六、二五九七、二五九八、二五九九、二六〇〇、二六〇一、二六〇二、二六〇三、二六〇四、二六〇五、二六〇六、二六〇七、二六〇八、二六〇九、二六一〇、二六一一、二六一二、二六一三、二六一四、二六一五、二六一六、二六一七、二六一八、二六一九、二六二〇、二六二一、二六二二、二六二三、二六二四、二六二五、二六二六、二六二七、二六二八、二六二九、二六三〇、二六三一、二六三二、二六三三、二六三四、二六三五、二六三六、二六三七、二六三八、二六三九、二六四〇、二六四一、二六四二、二六四三、二六四四、二六四五、二六四六、二六四七、二六四八、二六四九、二六五〇、二六五一、二六五二、二六五三、二六五四、二六五五、二六五六、二六五七、二六五八、二六五九、二六六〇、二六六一、二六六二、二六六三、二六六四、二六六五、二六六六、二六六七、二六六八、二六六九、二六七〇、二六七一、二六七二、二六七三、二六七四、二六七五、二六七六、二六七七、二六七八、二六七九、二六八〇、二六八一、二六八二、二六八三、二六八四、二六八五、二六八六、二六八七、二六八八、二六八九、二六九〇、二六九一、二六九二、二六九三、二六九四、二六九五、二六九六、二六九七、二六九八、二六九九、二七〇〇、二七〇一、二七〇二、二七〇三、二七〇四、二七〇五、二七〇六、二七〇七、二七〇八、二七〇九、二七一〇、二七一一、二七一二、二七一三、二七一四、二七一五、二七一六、二七一七、二七一八、二七一九、二七二〇、二七二一、二七二二、二七二三、二七二四、二七二五、二七二六、二七二七、二七二八、二七二九、二七三〇、二七三一、二七三二、二七三三、二七三四、二七三五、二七三六、二七三七、二七三八、二七三九、二七四〇、二七四一、二七四二、二七四三、二七四四、二七四五、二七四六、二七四七、二七四八、二七四九、二七五〇、二七五一、二七五二、二七五三、二七五四、二七五五、二七五六、二七五七、二七五八、二七五九、二七六〇、二七六一、二七六二、二七六三、二七六四、二七六五、二七六六、二七六七、二七六八、二七六九、二七七〇、二七七一、二七七二、二七七三、二七七四、二七七五、二七七六、二七七七、二七七八、二七七九、二七八〇、二七八一、二七八二、二七八三、二七八四、二七八五、二七八六、二七八七、二七八八、二七八九、二七九〇、二七九一、二七九二、二七九三、二七九四、二七九五、二七九六、二七九七、二七九八、二七九九、二八〇〇、二八〇一、二八〇二、二八〇三、二八〇四、二八〇五、二八〇六、二八〇七、二八〇八、二八〇九、二八一〇、二八一一、二八一二、二八一三、二八一四、二八一五、二八一六、二八一七、二八一八、二八一九、二八二〇、二八二一、二八二二、二八二三、二八二四、二八二五、二八二六、二八二七、二八二八、二八二九、二八三〇、二八三一、二八三二、二八三三、二八三四、二八三五、二八三六、二八三七、二八三八、二八三九、二八四〇、二八四一、二八四二、二八四三、二八四四、二八四五、二八四六、二八四七、二八四八、二八四九、二八五〇、二八五一、二八五二、二八五三、二八五四、二八五五、二八五六、二八五七、二八五八、二八五九、二八六〇、二八六一、二八六二、二八六三、二八六四、二八六五、二八六六、二八六七、二八六八、二八六九、二八七〇、二八七一、二八七二、二八七三、二八七四、二八七五、二八七六、二八七七、二八七八、二八七九、二八八〇、二八八一、二八八二、二八八三、二八八四、二八八五、二八八六、二八八七、二八八八、二八八九、二八九〇、二八九一、二八九二、二八九三、二八九四、二八九五、二八九六、二八九七、二八九八、二八九九、二九〇〇、二九〇一、二九〇二、二九〇三、二九〇四、二九〇五、二九〇六、二九〇七、二九〇八、二九〇九、二九一〇、二九一一、二九一二、二九一三、二九一四、二九一五、二九一六、二九一七、二九一八、二九一九、二九二〇、二九二一、二九二二、二九二三、二九二四、二九二五、二九二六、二九二七、二九二八、二九二九、二九三〇、二九三一、二九三二、二九三三、二九三四、二九三五、二九三六、二九三七、二九三八、二九三九、二九四〇、二九四一、二九四二、二九四三、二九四四、二九四五、二九四六、二九四七、二九四八、二九四九、二九五〇、二九五一、二九五二、二九五三、二九五四、二九五五、二九五六、二九五七、二九五八、二九五九、二九六〇、二九六一、二九六二、二九六三、二九六四、二九六五、二九六六、二九六七、二九六八、二九六九、二九七〇、二九七一、二九七二、二九七三、二九七四、二九七五、二九七六、二九七七、二九七八、二九七九、二九八〇、二九八一、二九八二、二九八三、二九八四、二九八五、二九八六、二九八七、二九八八、二九八九、二九九〇、二九九一、二九九二、二九九三、二九九四、二九九五、二九九六、二九九七、二九九八、二九九九、三〇〇〇、三〇〇一、三〇〇二、三〇〇三、三〇〇四、三〇〇五、三〇〇六、三〇〇七、三〇〇八、三〇〇九、三〇一〇、三〇一一、三〇一二、三〇一三、三〇一四、三〇一五、三〇一六、三〇一七、三〇一八、三〇一九、三〇二〇、三〇二一、三〇二二、三〇二三、三〇二四、三〇二五、三〇二六、三〇二七、三〇二八、三〇二九、三〇三〇、三〇三一、三〇三二、三〇三三、三〇三四、三〇三五、三〇三六、三〇三七、三〇三八、三〇三九、三〇四〇、三〇四一、三〇四二、三〇四三、三〇四四、三〇四五、三〇四六、三〇四七、三〇四八、三〇四九、三〇五〇、三〇五一、三〇五二、三〇五三、三〇五四、三〇五五、三〇五六、三〇五七、三〇五八、三〇五九、三〇六〇、三〇六一、三〇六二、三〇六三、三〇六四、三〇六五、三〇六六、三〇六七、三〇六八、三〇六九、三〇七〇、三〇七一、三〇七二、三〇七三、三〇七四、三〇七五、三〇七六、三〇七七、三〇七八、三〇七九、三〇八〇、三〇八一、三〇八二、三〇八三、三〇八四、三〇八五、三〇八六、三〇八七、三〇八八、三〇八九、三〇九〇、三〇九一、三〇九二、三〇九三、三〇九四、三〇九五、三〇

三隣亡 九二
―よけ 八六、九二
山林用具 三八
三和讃 二四

し

死 二六
椎坂峠 一、一五
椎たけ組合 六七
塩あん 一四
塩釜神 一三
ジガイ銭 二六、一四五
四月八日 一六七
敷居 一九
シキビ 一九七、二九
自給肥料 三、三五、六
仕事着 三、二五、二六
仕事はじめ（仕事始め、しごと始め） 一九
死後の供養 三五
ジゴロ 三二
自作 一三五
死産 一六
鄰子 一〇七
―歌
シジノヤスミ（シジ休み） 三七、一六九
鄰子舞 一〇六、一〇七、一六七
死者の着物 二
死者の魂 一四二、一五
猪槍 三九
四十雀 一九

四十九日 三二、一五四、一四五
―供養 一九七、一九八
―もち 一四
四十二いろの虫のロ 一九
四十日ゲイコ 一六七、一六四
ジスケ 二四
下枝の打落し 三八
下草刈り 六七、七二
試胆会 九七
下どせえ仲人 一三五
シタ仲人 一三五
下払 六三
七月二十四日 一六、八
七ゲート 一六五
七五三 一三五
―のお祝 一三五
七年忌 一五四、一九
七福神 一六、一六
―和讃 一七
七へェ袋 一六六、一四
七本塔婆 一九
質屋 一五、七三
七厘 一六
歯痛 三七
ジッコ 一〇
シッチョイ袋 一九
シトシッタ 一九
死人 一九
死の前兆 一六

芝居 六二、一〇四
師走女 一四二
しび布団 一〇
しびれ 三七
ジフク 一六
四方がため念仏 一六
死亡診断書 一四四
四本柱 一四三
島田（まげ） 五
シマダイ 一九
シマダマブシ（島田まぶし） 三五
シマヘビ 一七
凍みコンニャク 一六
凍み豆腐 一六
事務員 六三
シメ 三
注連縄 一八
下郷 一六
社会生活 三五
じゃがいも 一七
しゃくしな 一五
社交 三五
シャックリ 一六
シャッポー 七
集会所 七
集会場所 七
祝儀 一六、一四
―荷鞍 一六
―不祝儀 六

住居 一〇
十五日ガユ（がゆ） 一九六、一六二、一六三
十五夜 一六、一七
十三年忌 一五、一九
十三仏 一〇二、一四
―の念仏 一四
―野辺送り和讃 一四
十三夜 一七
十七年忌 一九
姑 一四
十二月十三日 一四
十二月八日 一四
十二講 八、一六五
十二さま（様） 一、一四、一七、八、八、八、一三、一五、一六、一八、一六五、一八
十二様の石宮 一六五
十二さまの木 八
十二さまの祭り 一五
十八日ガユ 一六二
十六段菊 一六
十六ダンゴ 一六
十六日 一六一
十六マユ玉 一五
十六メーダマ（メエダマ） 三七、一六、八五
酒器 三七
修験 八二、九二
―者 九二
主食 一三
出棺 一九六、一九七

出産 二六
―と育児 二六
―部屋 二七
出世たたみ 五
呪的療法 五六
狩猟 四五
―用具 三九
純農家 四四
十一日正月 一五六
ショイタ（ショイタ板） 二九、三二
しょいっこ 二四四
書院 一六六、一九七
ショウイン 一六七
小学生全員 一七
正月 一五六、一六五、一八一
―かいもん（買いもん） 一七五、一八三
―飾 一九七、二〇〇、二八三
―行事 一七七
―様 一五六
―三が日 一五四
―だな（棚） 八五、一五五、一五六、一六一、一六三
―のオタナ 一五四
―のお松 一、一五一、一六四
―の神 一五三
―のことはじめ 一八三
―の十六日 四四
―の縄 一六一
―の火 一五三
―レイ 一五四
ジョウゴ 二三五
上州名物 一六
精進料理 九一、一六四
ショウゼンサマ 一〇一
条桑育 一五五
上蔟 一五五、一七七、一九九、一四五
―祝 一六九
ジョウヅカイ（定づかい） 六二、七二
ショヅカの婆さん 一七七
少年会 六一、六七、一三五、一八〇
少年期 一六六、一三三
小の餅 一五四
菖蒲 一六八
―酒 一六八
ショウブ湯 一六八
小便竹 一三五
消防士 六六
消防組織 六六
消防団 六六、六七
―の出初式 一七七
ショーボタモチ 一五
上屋柱 二一〇
ショーユ（しょうゆ） 一五七、一七
醤油しめ機 二二五、二二六
醤油めし 九七
しょうゆ屋（醤油屋） 五二
精霊送り 一五二
精霊様の形代 一五二
少林山 九六
―講 九六
―遠磨寺 九九
食事 三
食習 三
―俗信等 一九
諸職 四五、四六
食制 三
―用語 一八
初産 二七
ショッコ 二三五
処女会 四五、六七、六八、二三五
初七日 一四六
除夜の鐘 一五七、一五四
白髪めし 一四四
白佐波神社 七五、八一、八二、一六五、一六七、一七〇
―の祭り 七五
白張提灯 五四、一五二、一七五、一七五
汁 八
汁かけ飯 一六九
汁物 二七
素人踊り 一六九
しろぐら（代鞍） 二三〇
代づくり 一九五
白蛇が出た話 一八九
白モク（白無垢） 一五、一四六
神官 二二
ジンギ（仁義） 六、二〇
ジンキチ袋 一〇
信仰 七五、八一
新婚旅行 一四四
神祭用太刀 二六六
神社 八二、一六六、一七六
―合併 一六七
身上 四三
親戚 二二、二三、一五二
―付合 七六
シンタク 一六九
新築 三
神とう 一四六
神道さま 一六六
神道さん 一八九
人名 九七
神明宮 五五
シンモス 五
人力運搬 一五二
新暦と旧暦 二二、二三
親類 一八
す
ズー 五五
スイコン 一七
水神宮 一六七
水神祭 八五、九一、九二
水神さま（様） 五五
水神さまの祭り 八二
水神社 一五二
水天宮 一六六
水道 一四四
スイトン

すいのう　一〇八
末っ子　二七、二八
須賀大神　二五
須賀大神社　一五〇
須賀大神の石宮　一五〇
須川の三東雨　一〇〇
スキ　三五、一三五
過ぎたるもの　一四五、一五〇
スギデッポウ　三三
スキ同志　一三四
頭巾　七
ズキンカブリ　七六
すくいいちょう　四
スクエヤダンス　六九
ズケ　一六〇
菅笠　一三〇
スゲ笠踊り　一〇六
助郷　四四
すけっこ　三三
ススドリ　一八
硯箱　三三
すすはき（すす掃き、煤はき）　一〇八、一八
すすはきの日　一〇八
ズタブクロ　一四五
頭痛　五六
ズッケ　六六
捨て子　一三〇
砂まき　四八
住の俗信　一四四

スマシ　一五五
スマンジュウ　一三四
炭　四〇
――がま　四五
――やき（焼）　四〇、四五
――焼窯　六九
スリ鉢（すり鉢）　一四五、一七二
スルス　一三五
すわ様（諏訪さま）　五五、七〇、一〇七
諏訪社　八一、一〇七
諏訪信仰　八一
諏訪神社　八一、八二、八三
諏訪大明神　一三五

せ

清温育　一三四
生活用度品　一三三
生産関係の方言　四七
生産暦　三九
青年会　六一、六二、六七、六八
青年団　六二、六三、六六、七〇、一三三、一四〇、一六八
青年の夜遊び　六八
歳暮　一四〇
セエメンバ　一八
背負道具　二九
背負ハシゴ　二九
背負ビク（びく）　九、二九、一三四
セガイ　一〇六
セキ　一五五、一六二

セキザライ（せきざらい）　七二、一〇七
石尊宮　一三三
石尊さん　九二、一〇七
石尊びら　九二
せきだ　九
石塔　一四九
赤飯　一八、一九、三七、三九、四五、五〇、八〇、八六、八九、九〇、一〇三、一二二、一三五、一四四、一五二、一五三、一六五、一六六、一七六、一七八、一八一、一八二、一八六、一八九、一三五
赤飯のオタキアゲ　一八
堰普請　四二、一七二
セキフンゴミ　四八
せきれい　九六
施主　一四五、一四七、一三五、一三三
セチ　一五三
セチ衣裳　一五三
節供　一四〇、一六六、一六八
節供レイ（礼）　五三、五五
節句びな　一六六
セツ酒　一五三
セッチュウラク　一九〇
節分　九二、一〇〇、一六三
節分の豆　一六三
セナカアテ（背中あて）　四三、五〇
セナカーテ　五二

銭箱　一三五
背縫い　一二
背守り　一二
セリ　一七
世話人　一五六
善光寺参り　九八
千社　一三三
――参り　九二、一四一
――札　九二
染色　三〇、一〇
先祖様　一六〇
先祖祭り　一六二、一六六
洗濯　一一
前兆　一四一
膳の餅　一五六
千歯　一三五
千匹がゆ　一六二
ゼンマイ　一七
洗面器　一三
染料　一〇
膳椀　六三、七〇、九四

そ

総入れ歯　四
総会　七〇
葬具　一四六
ソウケン（壮建）　六一、六二、六七、七六、七七、八七、八八
相互扶助　七六
葬式　一五、五三、五四、七一、七二、七六、七七、一四〇、一四八、一五六

—の時の髪型 一四六
—の時の着物 二
—の仕事の分担 一四四
—の食べもの 一九
—の本膳 一四三
葬制 二六、二四
そうぜんまつり 八五
ゾーセー 一六六
相続 七
贈答 一三
—関係 一四四
ぞうに（雑煮） 一五三、一四四、一六
そうめん 一七三
相紋 四四
ぞうり（草履） 九、四一、三〇
ソウリョウ 七
葬列 一四三
—の順 一四六
俗信 六、九
測量機具 一三三
ソッポーデン 四六
袖 七
ソデン 四六
供え餅 一六六
ソノダ家 一四四
園原ダム 七
ソバ（そば） 三七、四〇、六六、九六、一四三、一四四、一八〇、二四四
ソリビキ 五
祖霊 一五二

ソレマ 四四
村落生活 六五

た

大安 一八二
大神楽 一〇六
大工 四六
大黒（だいこくさん） 八六、一六二
大黒柱 一〇、二四、一九七
だいこん（大根） 一六六、一八、一七
ダイコンの切干（大根の切干） 一五、一六
大根のとりいれ 四四
ダイコンのヒバ 一六
大師がゆ 一八二
大師講 一、九七、一五二
大師様 一八二
太子様 一五二、一八二
大食 一、一八二
大尽 八
大神宮 四四
大神宮様 八〇、一六〇、一六二
大神様 一八五
大豆 三五
大豆の年とり 一七、一五、一六、一五、一六
代々名主 一七
退団届 一四四

ダイドコロ（台所） 二〇、一六、一九七、二〇七、一九四、二〇
ダイバ 四四
堆肥 一六、一五、一六
台風よけの祈願 一七一
ダイナマク 一六四、一八
台ランプ 三三
代理 一七
代理店 一六四、一六四
田裏びな 一六六
田植 二、二五、一九、二〇、三、三、一六、四、四、一四、一四、一五、一六、一五
田植地蔵和讃 二一
田植の日 二〇
田植の日の献立 一四三
田植の赤飯 一四三
田打ち 一六
田うない 一四
タガ 一四三
高尾山 一九
田かきの道具 一五五
高メリ 一六
高桑 一七
高崎の少林山 一八
高砂和讃 一二五
タカバ 九
高平宿 一六、一七
高平でまつる神さま 一五

高平の鍛治屋 一三五
高平連 一〇六
高平の保存会 一五
たかり物 一〇三
沢庵 一六
タケナガ 一五
竹馬 一七
タケトンボ 一三五
タケナンゴ 一三三
タケヤスミ 一七
ダシ 一七
タシブ染 一三
演し物 一〇四
たすき 七
タゼ 一六六
畳の合せ目 一三
たたみや 一三
畳寄せ 一三
裁ちこと 一〇七
立ち小便 二
立ちぶるまい 一三五
たちもの 一四、一五、一七
立薬師 一五
タッ頭 九
脱穀器 一四
タテ膳 一四三
建前 一七
建前の祝柱 三
建前の幣束 一三七
棚がい 一三七

七夕 一六九、一七五
—さま 一七五
たにし 一七
谷総会 一七一
タニノボリ 一六七
棚松 一九六
種蚕 二二四
種物入れ 二二七
種をあずけたところ 二二四
田の芋とり 二二四
頼母子 二二三
煙草刻み用の庖丁 二二四
煙草切り庖丁 二二四
煙草道具 二二八
ダバッツララ 二二三
足袋 一〇
旅帰り 一四一
多間取型 一九四
—の民家 一九六
タママユ（玉まゆ） 一〇、二六
玉ミツ 一七
魂呼び 二二六
ダミ 一四六
タメオケ 一五
タヤ 六八
タライガイ 二二四
たらしやき（焼き） 三、一五二
樽（ハナ） 一〇四
タルイレ（樽入れ） 一二六、一二七、一四一
ダルマ 二二七
だるまさま 二二四
タロッペ 一七
俵 一四、一六
—ころがし 一四、一〇八
単位 一〇
だんご（団子） 一九、一四二、一六〇、一六七、二二六、二二七、二二八、二二九
—じる（団子汁） 一二
だんごだんご 八五、八七
誕生 二二六
— 日 二二四
— 餅 二二〇、二二一
タンス（箪笥） 一二六、一四二、二二二
— のこやし 四五
ダンナ 六
—ザシキ（座敷） 一〇、二二
単墓制 一四一
ダンロ（暖炉） 二二二

ち

チアダックボ 二八五
地おどり（地踊り） 七六、二五
地下足袋 九
力くらべ（力比べ） 六六、二二四
畜産用具 二二〇
地形名 八九
地獄 一六九
地芝居 六六、六九、一〇四
地神宮 八五
地神さま（様） 一六、二二
地すべり 一〇
地租改正 二二五
地蔵様 一六六、九二、九九
父の盃 一六六
地主 二二
チバチのうじ 一七
チバレモン 二六
地方歌舞伎 一〇五
地まつり（地祭り） 二二、二三
地名 八五
地名よみこみ俚謡 一〇
地名伝説 八五
茶入れ 二一八
茶がま（茶釜） 二二四、二二五
チャッコ 二二
茶道具 二一八
茶の間 二〇、二二、二三、二六、二七、二五、二五、二五、二七、二五、二五、二七、二八、二九、二九
チャボピェ 二二
茶呼び 二一九
チャンガラチャンガラ 一一〇
ちゃんちゃん 六
中気 一九
中耕作用具 二二五
昼食 二
チュウチュウダンゴ 一九、一九、一六〇
中年 六一
チュウバ 九
中門附け 二二
中宿 一九、一二、一六
チョイチョイ着（ちょいちょい着） 二、六
弔旗 一六六
ちょうし口 八
朝食 二
手水鉢 二二一
朝鮮ショイッコ 一九
ちょうせんびえ（朝鮮ビエ） 一九、一九、一六〇
チョウチン（ちょうちん、提灯） 一九、一六九、二二
調度品 二二
チョーナ（手斧） 一九五、二二九
—仕上げ 一九七
帳場 一四四、一四五
調味料 八
調理用具 二二四
チョッパシ 一四七
チョボ 一〇四
ちょんまげ 四
ちりめん 六
鎮守祭礼 一四
鎮さま（様） 一二二、一四〇、一六〇
—のおまつり 一五
鎮守の秋祭り 一七
鎮守の鍵 二二五
鎮守の祭り 八九
鎮守参り 一五
鎮守森 一五四

つ
追善和潜 一一〇
通勤労務者 一四四
通夜 一四五
ツカ 九七、一〇五
ツカワセ 八
つきあい 一〇二、一五五
ツキアゲ 一九
月見 一五一
作りかや 一三一
つくり酒屋 一五三
ツクネル 九七
作り物 一九六
ツゲ（告げ） 一七六、一四四
つけもの（漬けもの） 一三、一六
辻 一一〇
つじゅうだんご（土蕃団子） 八〇
ソッカアセ 一四
筒袖の着物 一〇
ツヅラテ 一五〇
ツノモガシ 八
ツバメ 一五六
ツブシ人足 一五
ツマジリオケ 一九、九七
ツマジル 九七
つみっこ 一三
ツムギ 一六
爪 一五六
ツモノガシ 一五〇

梅雨あけ 一五六、一〇〇
吊りランプ 一三三
ソレダシ 一一五五
つわり 一一五五
て
手洗針 一三三
大日堂 一六七
ディシ講 一六二
デー 一五五
デーシッケー 一六二
デエドコ（台所） 八五
デエマナク 一六〇
テーラ 一六九
手桶 一一五五
手踊り 一〇六
出買い 一五五
手籍 一一五五
出かせぎ 一三七、一四一
出かせぎの人たち 一四四
出稼労働者 一四四
デカワリ（出かわり） 一六五
テジメ 一一六、一一五
手燭 一一三、一一三
手づかみ（漁法） 一一五五
手づかみ祭り 一五一、一七七
手こう（手甲） 七、一一五五
テッコモリ 一六
手伝い 一六六
鉄びん（瓶） 一一〇、一二四、一二五
——の空煮 一一〇

鉄砲 一六八
——ぶち 一一五、八八
テッメ 一四一
手ぬぐい（手拭） 七
——踊り 一〇六
テネグェ 七
出バリ 一一
手袋 一〇
テメエ織り（てめえおり、手前織り） 一〇
寺 一七、一五五
寺世話人 一六六
寺総代 一五五
寺の世話人 一四四
寺普請 一五五
寺への年始 一六六
寺参り（寺詣り） 一五一、一七七
手ランプ 一四一
テンガ 一三五
天蓋 一一五一、一六六
でんがく 一五五
天気占い 一六三
天気まつり 一〇〇
天狗 一〇一、一六五、一六九
——さま 八
——の面 一六、八八、一六七
天候の予兆 一五
天井 一九六、一〇六
天照皇太神宮 八三
天井の煤 一五

天神講 九七
天神さま（様） 一五五、一六、一三一
天神様のお祭り 一六七
てんじんしまだ 一四
天神待 六七、九七
天神まつり 九七
伝説 一六五
伝染病予防委員 七一、一五七
伝達 六二、一七〇、一七一
天主さま（様） 一五、一〇〇、一七〇
天主様のダシ 一七〇
天主様の御輿 一四一
天秤 一五、一三三
——棒 一五
天婦羅 一六一
天保銭 一六、一四一
天明のキキン 一六

と
燈蓋 一一一
とうがん 一一七
とうかんや（十日夜） 一六、一四四、一五一、一九
十日夜の餅 一九
トーキビ 一四
ドウギョウバライ 一七一
道具洗い 一一六
峠とトンネル 一五
東源寺（ドーゲン寺） 一五六
トウゲンジのイナリさん 九二

冬至 六三
―講 九八
とんじんまげ 四
トウセー 四四
同族間の民俗 六二、九六
道祖神 九七、六八、八三、九一、九九、一五、一六、一八
道祖神子 一三三
道祖神さま 九九
道祖神祭り 一三四
道祖神やき 一三四、一八
道祖神の厄落し 一五一
湯治 一五一
トウチャン 七七
盗難除け 一八
トウネッコ 四四
頭髪 三四
豆腐 一六、九九
―釜 三五、三六
―汁（とうふ汁） 九六、一九
―田楽 一六四
トウモロコシ（とうもろこし） 三、七、八
灯用具 三一
棟梁 三一
棟領おくり 三三
灯ろう 七一
ドウロク神祭 一八
どうろくじんさま 九
道陸神焼き 一六一
道路普請 七三
戸鹿野野の稲荷様 三六、八七
戸鹿野の東源寺 八七
度器 三三
研師 四六
とげぬきの即効散 四六
トコ板 一九五
床入れ 一四
床の間 三九
床柱 二〇、二六
年祝 一三四
年男 一三、一五、一六三
歳神様 八三
年神棚 一三四
年越 八四
年越しの会 三三
歳徳神 八五、一五三
年取りの晩 五一
年まわり 一三五、一三
ドジョウは片目 八三
土蔵 三、一七、八三
トツキトウバ 一三〇
毒けし売り 七四
徳利 三九
十寸嫁ご 一四一
トトクイゲ 一三三
ドドメ 三四
隣組 一四四、一九
利根川 一
利根のマブシ（まぶし） 三五
トノサマ 八三
ドビキ 五〇
トビ職 三三
トボ 三八
トボーグチ（トボロ） 一六四、一七、一九五、一七
土木労働者 四〇
トマ 二〇
土間 一五、一九四、一九五、一六
斗桝 三一五、三三
トマト 一七
トマの座敷 一九五、一九六、二〇九
トマノデイ 二〇
トマリゾメ（泊りぞめ） 一七
土まんじゅう 六九、一四七
ドムロ飼い 三四
友引き 一四四
富山の置き薬 七四
富山の薬売り 九一、五一
富山の薬屋 五、六三
寅の日 一四四
トリ上げ 一七
トリアゲバアサン 三七
トリアゲ水 三七、三八
鳥などの啼き声 一八
トリムスビ 一九、一四
取り結びの式 一九
鳥もち 四三
鳥山イッケ 八一
鳥山マケ 九
ドロッカイ 一六
とろろいも 一七
とろろ御飯 一五
ドンドン焼き（どんどんやき） 一五、一五、一八
トンビ 一九
―ノハネ（の羽） 一六、一三
ドンブリ鉢 一三
呑竜様 一三
呑竜坊主 一三
な
内縁 一四一
ナイラ（ネエラ） 一四
苗床づくり 一九
苗とり 一九
ナエ日 一九
苗間の田植 一三
苗間のもち 一三一
永井維周郎 一四
長井流 二七、二八
長柄ゆとう 一三
仲買人 一三
長着 六
流し 一八、一七
ナガダチ 一五
長持 一七、一八、一四一
ナゲモチ（なげもち） 一三
長だんす 一三五
仲人 一三五、一六、一九、一四、一四一

—　親　五四
—の近所あいさつ　一六六
—の草履きらし　一三五
—七うそ　一三五
—　礼　一三五
夏越し　一六九
なす　一九一
謎　一六六
菜漬　三九
名づけ親　一六
夏作　四三、五三、五五、八〇、一四〇、一六六
夏ブルマイ（夏ぶるまい、夏振舞）　五六、一七〇、一七一
夏祭り　四六
七色唐がらし　七六、一七五
七草　七一、一七五
—会議　一七五
—がゆ　一七五
—ぞうすい（雑炊）　一七五
—ゾウセイ　一七五
—なずなの歌　一七七
七ゲート八十二　一五一
ナナコ　五六、一三九
七歳　一三五
七十七歳　一三四
七つの折目　一三三
七つ坊主　一三五
七間取型　一六六
浪花節　一八
名主　六三、六四、一六六
七日がえり　一五一
ナのヒバ　一六
鍋墨　五六
生枝神社　八一
生枝の観音様　八三
生枝の「ええちょう祭」　一、一〇三、一三四
生アズキ　一五一
なま墓場　一七七
なみのはな　九
ナマリ　三三
ナラックワ　六六
ナリ木ぜめ（成木責め）　六一
成田山のお守り　七四
ナレアイ　一三四
なわ　四一、四三、九七
縄帯　一四四
苗代　一五九、一六一
—かき　一六八
—の水口　六一
縄ない　三三
縄より機　一三七
ナンゴ　三三
難産　一三五
ナンド（納戸）　一三七、一六
に
荷鞍　一三四
荷車　一五、一三四
ニシ（煮しめ）　一五、一三四
二十一夜講　九六
二十一夜待供養　九三
二十六夜講　九六、九七
二十三夜まち　九七
二十三夜和讃　一一三
二十二夜講　九六
二十二夜待　九六
入棺　一四四、一四五
新田一族の子孫　九七
新田義宗　八三
ニナイモッコ　五一
二宮尊徳翁　六一
ニバッ（煮初）　一五一、一八四
二百三高地　四
二百十日　九三、一七一
ニュウ　一六
ニュウガラサマ（様）　三、一五一、一六
ニュウの神様　三、一六
ニュウボッチ　二
夜神楽　一〇七
ニワカ女房　一五五
ニワトコ　一九
鶏の給水器　一三六
庭見　一〇七
ニワヤスミ（ニワ休み）　一七
妊娠　一三六
人足代　六七
ぬ
縫うとき　二
ヌキダレの土砂　一五五
ヌケル　一四
ぬし　一六
沼田城用水　四六、六五、七五、一〇六
沼田のお三夜様　九七
沼田の鬼子母神　一三五
沼田の行商　五一
沼田のコーヤ　六
沼田の西の宮　九八
ヌルメ　四六
ね
ネエラ　四六
根刈仕立　一六六
寝棺　一五五
ねぎのとりいれ　四〇
猫　五六
ネコ（むしろ）　九、一〇、四一、一三四、一三八
ネコ（あんか）　一三三
ねこあみ機　一三六
ねこばた　一三六
ねこ篭　一三六
猫イジメ　一三三
ネズミ（ねずみ）　五六、五九、一八四
ネックイ（根っ杭）　一三
根深石　四六
ねりおしろい　四
ねり肥　一九
ネリゴイビク　一五一
根利の奇応丸　一六六
年回　一四六
年忌　一四六、一四九

年始　一五、一五、一五、一五
—うけ　一五
—ソウリ　一五、一五、一五、一六
—まわり（日り）　一五、一五
年中行事　一五
年始礼　一五
年頭　一五
年頭銭　一五
ねんねこ　一五、一六
念仏　一九、一九、一四七、一六〇
—講　一九
—玉　一四七
—和讃　一〇三
年奉公　一六一
年令階層　一六
年令階梯　一六
の
野位牌　一六
農業労働　一六
農協理事　一七
農具　一三
農事組合　一七、一七
農事研究会　一七
農事実行組合　一六
農事の相談　一五
農道の普請　一五
農間のかせぎ　一四
ノウメエヤスミ（農前休み）　一四、一四、一五、一四
農休み　一六
鋸の目立て　一六
鋸屋　一五
ノシ餅（のし餅）　一三、一五
ノゾコミ　一六
のぞっこみ　一六
ノチザン（後産）　一六
後産の捨場　一〇一、一六
ノテヤマ　一六
のどにものがつっかえたとき　一六
野火つけ　一五
野辺送り和讃　一四
野辺の式　一六
ノボリ（のぼり）　一三、一五
のぼりたて（の立て）　一五
ノメシモン　一四
ノメシモンノサンゾクワラジ　一七、一四
ノンビ　一五
は
歯　一六
灰　一六
歯痛　一七
灰焼　一六
はおり（羽織）　一五、一六、一八
蓋そうじ　一六
歯がため　一五
歯固め柿　一五
墓なおし（直し）　一四七、一四八
馬鹿のオオグイ　一八
馬鹿の三杯汁　一八
墓場　一六、一六
はかま（袴）　一五
墓参り　一四八、一五、一五、一七
ハカリサシ　一五
ハキタテイワイ　一七
掃立調節　一五
ハギマブシ　一五
はきもの　一五
白寿　一五
伯楽（馬喰）　一四、一五
羽黒権物　一九
化物　一八
ハゲン　一六
羽子板　一三
箱階段　一三
箱ぜん（箱膳）　一八、一三、一八
箱そり　一七
箱梯子　一三
箱枕　一〇
はし　一八
橋かけ　一五
馬車　一五
柱　一〇、一九、一六
はたおり　一三、一〇、一四
畑うらない　一五
はたけ仕事（畑仕事）　一五
畑の面積　一九、一三、一七、一六、一〇
破読　一六、一四
ハチ（蜂）　一六
蜂にさされた場合　一七
八十八夜　一七、一六、一六
八間取型　一九
はちまん様（八幡様）　一九、一〇、一七
八幡様の御使　一五
八幡様の手　一六
八厘　一四
ハチワル　一六、一四
初午　一六、一五、一八、一五、一六、一五
—の稲荷祭　一
—の日　一六
初絵売り　一六
発火　一三
八海山　一九、一九、一七、一六
二十日正月　一六、一六、一六
はつがみなり（初雷）　一〇〇、一六
歯ックソ　一七
初子（初児）　一六、一五、一六、一六、一六
ハッサク（八朔）　一四、一五、一五、一七、一六
ハッサク礼（八朔レイ、八朔礼）　一五、一五、一五、一六
初節供（節句）　一三、一五、一六、一六
八丁ジメ（じめ）　一六、一六
ハッテ　一六、一四
ハッテボシ　一三

ハッピ 六
初不動 一六三
初参り 一五三、一五四
初孫 六、一九
初夢 一五五
夢嫁 一五
鳩 一五一、一五六、一六一
馬頭観世音（馬頭観音） 九、一三一、一六一
ハナ（御祝寄附金） 六、一七三
ハナ（小正月） 一五六、一六一
ハナ売り（小正月） 一五六
ハナカキナタ 一五六
花菓子 一六六
ハナ菓子売り 一五六
ハナカタ餅 一五三
ハナガラ 一五六、一六七
ハナムスビ 九
ハナ餅 一六六
花嫁 一三六
花輪 一五六
花和讃 一三
ハネムシロ 一三
歯のぬけた夢 四
ハバキ 七
早鐘 六六
ハヤシモチ 九
はやり日 一七
ハヨーナワ 一五五
はらいた 一七

腹帯 八
腹かけ 七
ハラミバシ（箸） 一五四、一五六、一六一
梁 一〇
ハリウチ 一〇
針供養 一六四
ハリバクチ 一三
春蚕 一三、一三六、一三七、一五一、一六一
春ぎとう（祈禱） 九三、一六
春祈禱のご幣束 一〇
春駒 一〇、一四、一八、一〇三、一〇八、一六五
—の歌詞 一〇八
榛名 九
—講 九
—山 九、一〇
—神社 九、一〇
春の祭 一三
春彼岸 一三、一五、一六六
春祭り 一三、一五
晴着 一三、一五
班 六
バンギ 一五
半夏 一六
バンコンゲタ 九
半ザマ 一九
晩秋蚕 一三、一四
半身上 一五

バンタ（番太） 六、六五、一六六
ハンダイ 一九
班長 六、一七、一三四、六二、一六五
バンツ 八
はんてん（半天） 六、一四
半天半日 一三
阪東 一六
班の当番 一三
ハンメシ（はんめし、半飯） 一三、一三

ひ

火打石（燧石） 一五、一三一
火打金 一三一
ヒエ（ひえ、稗） 一三、一三四、一六、一七、一四、一五、一五、一八
ヒエ、アワ 一五
ヒエドロ 一六
ひえのにかた 一四
控えの間 一九六
ヒカガリ 一六、一五
東入 六
彼岸 一九、一四、一七三
—月 一五
—まいり 一五
—の中日 一六七
挽き臼 一三五
ヒキ飾リ 一六

ヒキツケ 一三、一三三
引き出もの 一六六
引き物 一四四、一六、一六六
ヒキモン 一六
ヒキワリ（挽割り） 一三、一四
ビク 九、一九、一五、一三三
樋口イッケ 一八
樋口マケ 六、一七、一五一
ひこうきびん 四
ひこ帯 一〇
ひじき 一九
ヒシコ 一八
ヒシ餅（ひしもち菱餅） 一六、一五三、一六六
ビシャモンさん 一三
ビショウマイ 一六
絣ちりめん 五
たぜん 一九
ヒッカケ着物 五
ヒッジ祭 一三
ひっつめ 四
ヒデ 一七五、一五一
ヒデ鉢（ひで鉢） 四、一三一、一三三
ひでり年 一〇〇
ひとえもん 六
ひとッカ 一四
ひとッ身 二
ひと七日 一六六
ひとにぎり 一六〇
ひとひろ 一六
ヒトフミダライ 一六六

人よせ 六
ヒドロッ田 三
雛 三三
ひな飾り 二六
ひなさま 二四
雛人形 二三
ヒネリゴイ 六、八
丙午 八三、二三、二四
火の神様 二三
火のキヨメ 二四
火のし 二三
火玉 二四
火の番 七二
—板 二五、二九
火の用心和讃 九、二〇
火伏せ 二三、二五、九一、二九
—の神 一〇
ひもたび 一八
百ケ日 八六
白狐 三三
百貫蛋 九二、二四
百社参り 九四
百姓の神 二四、一八、一九、二三、二五、二六
百八灯 一七
百万ボンデン 七一、一五
評議員 三三
表口（ヒョウクチ） 二三
拍子木

ひようそく 三三
ヒョウソク台 三一
ひようたん 三九
ヒョウトリ（ひようとり、日傳取り） 四、四一、三三
ヒヨトリ 三三
日和下駄 九
ヒラ 一九
平うない 四一
平書院 一〇八
ヒラダネ 三三
ヒラヅケ 三三
ヒラマ 八、一九
平出規約 六二、六四
平出結婚心得書 一四〇
平出神社 八三
平出の結婚式 一四〇
平出の報徳社 六一
ひるめし（昼飯） 三一、三三
ひろい親（拾い親） 一三〇
披露（結婚式） 一六
披露宴 一六、一四
ふ
ふうこうかぶり 七
フキ 一五
吹き竹 一四四
吹き矢 一四三
服飾具 三八
副食物 六
福茶 二三

福の神 一九
福袋 一五
フゴ 三〇
不幸のときの服装 五
不幸のまじない 一九
不作 三三
富士講 九
富士山 九
富士浅間 一〇
不祝儀 六、七、一六
不浄日 一六
フジワラボシ 三
婦人会 六、六七、七、一四〇
舞台 一〇四
ふだんぎ（ふだん着） 三、一六
ブチ 一四
ブチの実 四
ブッケ 三
仏だん（壇） 一〇、七、一八、一六一
—参り 一六
普通小作 三
フッタギ 一八
フッタゲ 八
物納小作 三
仏滅 八一
不動さま（様） 一五、九四、一六三、一六七
不動祭り 一六五
フトリ 六

布団 一〇、四、一一、一三
フナミマチ 九七
フナヤスミ 三
踏だらい 六
冬だめ 六三
部落会 九六
古い家 一六
古い仏様 一六
古い盆 一五三
ふるしきよめご 一四
振舞 八
古屋敷 一〇
フロ 一六、一九七、二〇九
フロバ（風呂場） 一六
分家 三、八、一三
フンドシ（ふんどし） 一六、一六
ブンモギ
へ
米寿 一四
ヘイソク（幣束） 一〇
幣束類 一六
兵隊検査 一四
ヘイトウ 六二、七四
ヘイトウカグラ 六二、七四
ヘギ 二六
へこおび（帯） 一〇、二一
ヘソクリ 六、九七
ヘソの緒 二七、二六
ベタ付け 三三

へチマ　一九
別共有　究、七
へデエ（へでえ）　三元、二四〇
紅　四
へビ（へび、蛇）　一六、一六、一九
蛇のキヌ　八
蛇の夢　一三
蛇よけ（除け）　六〇
へヤ　一六、一九
弁慶　一〇、一九五、一〇九
ヘンゲール　一八五、一八六
便所　一九
―神　三、一四、一八五
―の神様　八五、一九
―まいり　一三
弁天様　一四、八六
弁当　八三、九四
弁当箱　一三
　ほ
ホーエンさま（ホーエンサン）　三、一四
ホーキ（ほうき）　一六、一三、一三
ホーキモロコシ　一九
方言　毛
奉公人　四、一六
―の休み　一七
豊作祝い　一三
坊さんのお相伴　一四
坊さんの年始　一六
棒ジメ　一八
紡織色染　三九
坊主　四、一四、一六
疱瘡送り　一六
ほうそう神　九
ホーソー神様　一三
疱瘡棚　一六
ホートウ　一三
報徳講　六〇
報徳社　六〇、六七、六八
―長　一四
豊年祝い　一六
豊年祭り　一九
ホラバ　一九
ホウビキ　一三
棒まぶし　一五
訪問着　一三
ホーロク（ほうろく）　一三、一四、一五
行器　一五、一六
ボク　一五
ホグイ　八
火口（ホクチ）　一二
保護係　六〇
ほしがき　一五
保存食　一五、一六
武尊　一
―様　一、一九、一九、一〇〇、一六〇
―社　八
―信仰　一、八
―神社　八、八二、八五
保多賀大明神　一五
ホタカ参り　九
武尊祭　一六
ボタモチ（ボタ餅、ぼたもち、ぼた餅、牡丹餅）　一三、一四、一〇、一六、一七、一九、一八
ボタン桑　一六
墓地　一六、一四、一六、一四、一六、一五
ポックリ　九
ホド　一四
仏　九一
ホドイモ　一七
仏様のお祝い　一六
ホトトギス（ほととぎす）　一八五、一八七
ホド焼　一四
ほどやきもち　一三
ホホジロ　一九
ホマチ　一六
ホラ貝　一七
堀さらい　一七
ボロ肥　一九
盆　一一、一四一、一四〇、一七一、一六、一九、一〇五、一七五、一〇五、一七五
―踊り　一五
―かんじょう　一七一
―ご　一七一
―様　一七一
―様迎え　一七一
ほんだち（木裁ち）　二
盆棚　一四一、一七一、一五一、一六
盆月　一五
ボンデンさま　一七
ボンノクドの毛　一三
盆の十六日　一四
盆の高灯籠　一三
盆の念仏　一四
盆の日取り　一七
盆花（盆華）　一七一、一七一
本分家　一五
本まゆ　一六
盆礼　一五、一七一
　ま
埋葬　一四一、一四六
埋葬許可書　一四
マイダマ　一五、一六、一九
前かけ　八
―姿　六
まき（薪）　一九、一四一、一五、一六
マグソ（馬糞）　一四九
枕　一〇
まくらだんご（枕団子）　一四九、一四
枕なおし　一四
枕めし（枕飯）　一四一、一四
マクリ　一六
マケ　一五、一六
まげ　一五

マケ氏神 六二
マケの稲荷 九八
呪 七、三五
ま す（桝） 一三四、一五六、一五九、一八三
かざり（松飾り） 一四二
末期の水 二四
マツコ 二四
マツコブチ 一八一
松 迎 え 一〇四
松本錦枝 七三
祭 り 九一
—世 話 八九、一〇〇、一三五、一六七
—世話人 二〇
間 取 一〇、一三五、一五六、一六四、一七三
マブシ（まぶし、蔟） 一三五
まぶし織り 三三
まぶし織機 一五六
マブシガキ 一四三
まぶしたて 一六五
マブシ作り 一八七
マムシ（まむし） 七、一五、八八
マメガラ 一六四
豆 投 げ 一六五
豆 ま き 一八七
魔 物 四、九、一七、一三六、一五六
マユ（まゆ、繭） 一三三
繭買商人

マユカキ（まゆかき） 一七、一四、一五
まゆかき人足 一六四
マ ユ ゲ 一七
まゆだま（繭玉、マユ玉、まゆ玉、マイダマ） 一、一九、一五六、一五、一五、一五六、一六、一六二、一六四、一六五
マユダマ木 一三五
繭の売り先 一五六
繭の乾燥 一五六
まゆの出荷 一五九
魔 除 け 一五六、一六八
まりつき歌（毬つき唄） 一九、一九二
ま わ た 一〇
マンガ（馬鍬） 一三五
—アライ（洗い） 一三、一五九
万 才 一〇、一〇八、一六八
まんじゅう（饅頭） 一四、一五、一六六、一七七
まんじゅう笠 一三〇
饅頭投げ祭 一三三
マンドウ（万灯） 一七、一七二
マ ン マ 八

み

み（箕） 一三〇、一七七、一八七、一三五
ミアワセ 一四一
三河万才 一〇八
ミコシ（御輿） 一七、一七二
ミソ（みそ） 一七、一九
みそをつける 一四一
みそ汁 三、一三五
みそたき 一三四
味 噌 玉 八
味 噌 つ く り 七
味そづけ（ミソ漬） 一四、一五、一六
味噌つけまんじゅう 一三三
ミソフミグツ 一七、一四二
ミ ソ 豆 三
みそまんじゅう 一八七
水 浴 び 一七〇
水がみなりさま 一〇八
水 ロ 一五九
水 ダ メ 一九四
水 番 一九三
水 不 足 一九四
道 の 争 い 一四、一六六、一六九、一九三
道ぶしん（普請） 一九四
ミツイタチ 一六六
三 つ 打 一三三
三つ口の子 一三三
三 つ 坊 主 一一
ミツミ（三ツ身） 九七
三 峰 講 一七、九七
三峰さま（様） 九八
三 峰 山 一〇一
ミネンドウ 九、一四二
ミ ノ（みの） 一四二
ミノックビ 一一
巳 の 日

ミミズ 一七
耳だれ 一七
—の神さま 九八
耳ぶたぎ 一九四
三柱神社 八三、一三三
宮 大 工 一九四
苗字帯刀 一八七
民 家 一九四
民間医療 一五六
民 具 一三一、一三八
民俗知識 一五六
ミンブチ 一〇

む

六 日 爪 一七
六 日 年 一五六、一七
六 日 山 一七
無 縁 仏 一七二
迎 え（嫁の） 一三五、一五八、一六二、一六七、一七二
迎 え 盆 一八五、一八六
昔 話 一三、一三四、一五六、一六七、一七八、一八五、一九七
麦 一四一
麦 う ち 一三三、一三四
麦 打 ち 杵 一五六、一四一、一三四
麦かり（麦刈り） 一七
麦こうじ 一四
ムギこなし 一三
麦ごはん

麦つき杵 二三五
麦作り 二六
麦つばな 一六
麦の収穫 四一
麦ブチ 七三
麦まき（蒔き） 二八、四〇、一七九
麦めし 三、一三
ムコ（婿、聟） 一五、五三、七六、一〇四、一一六、一二七、一三九、一四〇、一四一、一六九
聟いじめ 一四一
ムコウハチマキ 七
婿まぎらわし 一四〇
ムコ渡し 一二九
ムジナ（むじな） 一〇三、一六五、一八八
ムジナのしかえし 一八八
虫歯 五七、九九、一〇〇、一六一
虫歯除け 一六一
虫封し 五六、九二、一三一、一六三、一六四
虫焼き 一六四
無情和讃 一一〇
虫除け 一〇〇
ムシロ（むしろ筵） 一〇、四二、一三八
むしろ織り機（筵機械） 一三七、一三八
むしろ機のおさ 一三八
むすび 一三、一四
娘の会 六〇
棟上げ 一三、一三三、九〇
——餅（棟上げのもち） 一五、一三
村入り 七六
村から出るもの 四一
村共有 六九、七三
村契約 六一
村境 六三
村制裁 七六
村総会 六一
村総有時代 六九
村尽し 一〇六
村と村とのつきあい 七六
村に来る芸能 七四
村に入って来た職人 七三
村に入って来る商人 七三
村人足 七三、六一、六三、七〇
村の奇人 七四
村の規約 七〇
村の共有財産 六九
村の構成 六三
村の財産 六九
村の祭典がかり 一〇〇
村の三役 六三
村のしくみ 六三
村の事件 七四
村の諸職 六三、七三
村の人物 七四
村の組織 六三
村の春祭り 九四
村の役員 一〇七
村八分 七六
村まつり 四三
村持ち山 六三
村役 六一、六三
村寄合 六一、六三、七〇

め

目 一七
明治三十八年のキキン 一六
メイセン 五
銘旗 一四六
命名 一二九、一六五、一八九
メエダマ 一六一
メカゴ（目かご目籠） 五七、九九、一三一、一六二
メギバラ 一〇
メケー 二九
飯しゃもじ 一四三
メシビツ 六
目立てばさみ 一三六
目つぶし 一〇三、一〇七
メド飼い 一三四
目の神さま 九九
目ハジキ 一四六、一四八
メリンス 五
メンコ 一三一
メンパ（めんば） 一三、一二四、一八、一三七
めんばめし 一三
メンマ 一四

も

木材運搬 一〇四
木製臼 一三四
木炭 八六
もぐら 一九、一七九
——除け 一七八
目録 一七六
茂左衛門様 一三一
もず 九八
もち（餅） 三、一三、一四、一五、一九、一〇六、一四五、一七、一三九、一六〇、一二七、一六六、一八六、一三五
モチグサ 一七、一七
もちつき（餅つき） 一三、一六六、一八二
もち投げ 一三
餅なし三ヶ日 一五四
モチビッ 一八
モッコ車 一〇四
モドギ 一九
モノツクリ（ものづくり、モノ作り） 一六、一五九
モノビ（ものびモノ日） 一五、一五、一五二
喪服 一四六
もみまき 一三、一九
木綿 一三七
桃太郎 一五二
モモヒキ（ももひき） 六、七、八、一〇
ももわけ 四
桃われ 五
モリ（森） 一五、一四二、一四三
モリヤサマ 七七
モロ 六

諸田家のウジ神　一六七
諸田マケ　一九
師のお諏訪さま　八七
もんつき（紋つき）　一二九
紋つきの重ね　一九
紋所　一四二、一四四、一四八
モンバイ（モンベー、モンベイ、門牌）　三、六、八
モンペ　六
モンペばき

や

ヤアーヤアードリ（ヤアヤア取り）　一三、一七
ヤアヤア取り祭　一三
やかいまき　四
ヤカガシ　一六三、一六四
ヤカヤ　四四
焼印　七
ヤキゴメ　一五
やきはた　一〇
ヤキヒガシ　一六
八木節　一〇三、一〇五、一五三
八木節の盆踊り　一〇五
ヤキ（イガシ　一五、一六
ヤキヘガシ　一三、一六九
ヤキボ（焼き穂）　一六
やきもち　三、一三、一六
焼餅粉　一四
夜業　九
役員改選　一六三
役員の改選　七一
厄落し　一二四、一二〇
役がわり　一六七
役決め　一六三
やくじま　一九
薬草　一五
厄年　一二〇、一二四、一二九
厄年の分　一二〇
厄年の人　一六一
疫病よけ　九
ヤグラ（やぐら）　三、一〇四
やけど　一七
——の火もどし　一七
やげん（薬研）　一三四、一三五
屋号　一六一、一六六
野菜の貯蔵　一六
八坂神社　一七〇
——夏まつり　一七〇
香具師　一一〇
屋敷、イナリ、（いなり、稲荷）　一九、一八六、一九一、一九六、一九九、一〇〇、一〇一、一〇三、一〇六
屋敷稲荷祭　一八一
屋敷内に祀る神　八六
屋敷の稲荷　一四四
屋敷の守り神様　一四五
屋敷祭　一〇三、一八三
休ミ祝イ　一六
休ミダンゴ（休みだんご）　一六、一六九
休み餅　一六九
八十二　一六五
矢立　三一
ヤッコ　一〇一
雇い人　一六一
ヤナ　一四五
屋根がえ（屋根替）　三三、一三七
屋根の石　一六
屋根のぐし　一四四
屋根無尽　一三
屋根屋　一四六、一四七
やぶ入り　一六一
ヤマイヌ（山犬）　一四九、一五七、一六八
山入り　一六六
山神　一六一
ヤマギ（山着）　一四五
山出し　一〇、一四
ヤマッキ（山着）　一三
山でっぽう　七
ヤマトチリメン　一七
大和の薬屋　一五
日本武尊　一五三
山鳥　八三
山の神　一四五
山の口（山のくち）　三、八三、八八、八九、一三一、一五五
山の口の日　一四四、一五三、一六九
山の口開き　一六九
山へ入ってはわるい日　八八、九八
山へ入らない日　一四五
ヤママユ　一五
山道普請　一四五
ヤマユクの根　一七
ヤリ（槍）　一六六、一六九、一五一
ヤレテ　一四五
ヤンメ　九一

ゆ

結納　一六五、一六六
——納め　一六六
結納金　一六六、一七三
——目録　一六六
夕恵比須　一六九
夕客　一六六
夕食　一三
夕立　一四五
夕虹　一六
夕はん（夕飯）　三、一三
夕めし　一三
湯灌　一四四
雪かき　一三
ユキグツ（雪ぐつ）　一三、一九
ゆくえふめい　一四
ユズリ　一四一
ユズリグツ（ゆずりぐつ）　一六七、一三〇
ゆっこおび　一一
ユテ　七
弓　一三一、一四一
弓張りちょうちん（提灯）　一七、一一九、一一六、一五五、一五六
夢　一四五

よ
夜あそび（夜遊び）
よい夢
八日餅
養鶏用の水与え器
養蚕
養蚕一般
養蚕籠
養蚕組合
養蚕信仰
養蚕の網
養蚕の神
養蚕の組合
養蚕法
養蚕屋人
養蚕用具
養子
幼児の病気
用水堀
ヨウノメ
ヨーハン
洋服
ヨキバツリ
ヨコザ
横パチマキ
ヨコメツブシ
四十八のハジカキッコ
ヨセグロ
寄せ太鼓
ヨソイギ（よそいぎ）
ヨッコ
四つ子
ヨッジロ
四ッヅケ
四ッ身
夜なき（夜泣き）
夜なきのまじない
ヨナベ（夜なべ）
夜なべ仕事
夜ばい
夜番の番札
呼び戻し
予防委員
四間取型
—民家
嫁の近所まわり
嫁のこづかい
嫁の里
嫁の里がえり
嫁の年始
よめむこ
よめむこの里がえり
ヨメワタシ（ヨメ渡し）
よもぎ
ヨモギとショウブ（蓬と菖蒲）
夜のひと
夜のもの
ヨロク
ら
楽にする
ランプ
り
離縁
—話
理事
—長
リヤカー
りゅうたつ（竜タツ）
竜吐水
俚謡
良縁
料理書
旅行習俗
林業
臨終
隣保班
—長
れ
冷害
恋愛結婚
ろ
ろ
老人
—会
—会の膳椀
ローソク立て（蠟燭立て）
労働唄
労働慣行
労働事情
労働者
老年期
六月一日
六角ちょうちん（提灯）
六観音
—念仏
六間取型
六三
六算よけ（六算除け）
六地蔵
六尺ふんどし
六文銭
ロソウミショウ

ろ端の作法　三四

わ

若い衆　六、六、一九、一五、一七、一八
ワカイモン　六三
若木迎え　一五、一九
若衆　一四、一〇
―頭　六
―組　六三
若妻会　六七
若水　一五、一四
―迎え　一五
若者　六一、六二
―組　六三、六六
ワカレシマダ（わかれしまだ、わかれ島田）　三、五、一四
ワク製　三
ワケイシュ　六三、六六
ワケーシベヤ　七七
和讃　一〇五、一一〇
―会　一四
輪ジメ　一四
ワタ（わた）　七七、六六
わたいれ　六
綿くり機（綿繰機）　三六、三七
ワタゴサマ　九一
綿帽子かけ　一一〇
わたまし　三一、三三
わな　四五
藁　二六、二七、三七
藁のお宮　一八三
藁の叩き杵　三七
ワラグツ（わらぐつ、わら靴、藁沓）　八、九、一七、一八、四三、一一〇
わらぐつの型　一一〇、一一一
わらじ（ワラジ、皮草鞋）　九、四三、一六、一九、一六、一一〇
わら仕事　四一、四三
ワラジヌギ（草鞋ぬぎ）　一六
ワラジョウリ　一五
ワラゾウリ（わらぞうり、わら草履）　八、九、一五、一四、一一〇
ワラットッコ　一八三
ワラヅト　一六一
ワラデッポウ（ワン鉄砲、藁鉄砲）　二、一六、一九
ワラニュウ（藁ニュウ）　一五、一六
わら人形（藁人形）　一四、一九、一五、一五
わら人形作り　一四
ワラビ　七
わらびの根　七
藁布団　一〇
童唄　一九一
ワラマブシ（わらまぶし）　一三、一三、一七
ワラ屋根　四六
藁屋根の祠　一八三
ワンナ（わんな）　四五

群馬県民俗調査報告書第十一集

白沢村の民俗

昭和四十四年三月二十八日印刷
昭和四十四年三月三十日発行　非売品

編集兼発行者　群馬県教育委員会

発行者　前橋市大手町一丁目一ノ一
群馬県教育委員会事務局

印刷所　前橋市元総社町六七
朝日印刷工業株式会社
電話(69)四三六七